

令和 6 年(2024 年)能登半島地震

支援活動報告書



国士舘大学

防災・救急救助総合研究所

目次

I . はじめに

能登半島地震を振り返って	防災・救急救助総合研究所 所長 島崎 修次	3
国土舘大学における防災教育	防災・救急救助総合研究所 副所長 田中 秀治	4
災害支援におけるボランティア・NPO の果たす役割	国土舘大学 名誉教授 山崎 登	5
活動拠点として令和6年能登半島地震を振り返って		
	当時：国際医療福祉専門学校七尾校 教員 星野 雅	9
現地受入団体として	おらっちゃ七尾・sien sien west 代表 今井 健太郎	10

II . 支援活動

1. 物資支援	13
2. 学習支援	15
3. 募金活動	16
4. 災害ボランティア活動	17

III . ボランティア参加学生レポート

第1陣 令和6年2月19日～23日	29
第2陣 令和6年2月28日～3月2日	35
第3陣 令和6年3月4日～7日	43
第4陣 令和6年8月10日～14日	57

IV . 引率教員による手記

第1陣引率教員 都 城治	69
第2陣引率教員 大木 学	70
第3陣引率教員 曾根 悦子	71
第4陣引率教員 植田 広樹	72
第4陣引率教員 都 城治	73
全陣引率教員 浅倉 大地	74

V . シンポジウム登壇学生による報告

体育学部スポーツ学科2年 大橋 勇斗	79
体育学部スポーツ学科2年 篠原 聖真	81
体育学部スポーツ学科4年 淵野 葉子	83

VI. 災害ボランティア活動資料

先遣隊第1次調査報告書	89
先遣隊第2次調査報告書	99
先遣隊第3次調査報告書	107
先遣隊第4次調査報告書	111
災害ボランティア活動概要（第1～3陣）	115
災害ボランティア活動概要（第4陣）	117
第1～4陣共通資料	120
派遣計画書（第4陣）	124
説明会資料	125
ボランティア同意書	133
国際医療福祉専門学校七尾校から国土舘大学への依頼内容	135
国際医療福祉専門学校七尾校関連資料	136

VII. 活動記録写真集

I . はじめに

防災・救急救助総合研究所 所長
島崎 修次

防災・救急救助総合研究所 副所長
田中 秀治

国土舘大学 名誉教授
山崎 登

当時：国際医療福祉専門学校七尾校 教員
星野 唯

おらっちゃ七尾・sien sien west 代表
今井 健太郎



能登半島地震を振り返って

防災・救急救助総合研究所 所長
島崎 修次

2024年1月1日に発生したマグニチュード7.6の能登半島地震は石川県輪島市で震度7を観測した他、能登半島の広範囲で震度6.0以上観測する大地震であった。被害は500名を越える死者を出し、そのうち災害関連死は約半数の250名以上にも達した。また水道管をはじめインフラも甚大な被害を受けたが、なかでも山間地を結ぶ道路が各所で寸断され後述する支援の大きな妨げとなった。そのため復興に長時間を要する事となり、一年以上経過した現在においてもなお被害者住民を苦しめている。主要道路を含む損傷は移動を困難にし、現地での「不要不急の移動」の制限が情報として流されたが、それをきっかけにいつしか「ボランティア活動自粛」の方向に進んでしまった。そのあおりで国土館大学の支援も当初早急な活動を躊躇する事態となり結果ボランティア活動が遅れることになる。しかしながら石川県七尾市の国際医療福祉専門学校七尾校に偶然にも国土館大学卒業生が在籍しており、彼女から被災地の様々な情報を提供していただき現地活動をする準備を整えることができた。そしてまず拠点を七尾校に置き教職員による先遣隊を三度にわたり派遣し、石川県あるいは七尾市の災害対策ボランティア本部と調整を図りながら災害ボランティア活動の需要等を含め情報を共有し支援活動を行うことになる。

それに先立ち発災直後から飲料水をはじめとする生活用品等の物資支援、七尾校在籍の学生の救急救命士国家試験のための講義を含む学習支援、あるいは都内での能登半島地震募金等幅広い活動を行った。

さて災害ボランティア活動に関しては先遣隊の情報を元に第一陣から第四陣（2月から8月まで）まで教職員と共に計90名を越える学生を派遣した。サロン活動運営、被災者家屋の清掃、がれき撤去等を含むきめの細かい災害復旧活動が学生の安全を確保した上で精力的に行われた。人を思い人を助ける「国土」の教育理念にふさわしい防災活動であった。

今回の支援活動で痛切に感じたことは「ボランティアの活動自粛」の言葉に集約される災害ボランティア活動のコントロールシステムがうまく機能しなかったことである。東日本大震災（2011年）、熊本地震（2016年）で既に同様の問題が取り上げられているにも関わらずその対策は一向に改善されていなかった。今後災害増加とともにボランティア活動が益々活発になることが予想されるが一刻も早い計画対応が必要であろう。この点に関しては防災総研で発刊された熊本地震報告書「結」の巻頭言で述べたように災害活動のCSCA ① Command and Control（指揮と調整・連携） ② Safety（安全） ③ Communication（情報伝達） ④ Assessment（評価）の重要性を改めて感じる。ボランティア活動を最大限に活かすのは災害対策計画の重要な部分であり今後の行政の対応に期待する。

今回幸いなことに「縁」があり偶然にも国土館卒業生の協力で機能的な活動が行うことができた。能登半島地震は2024年1月の発災に引き続く同年9月の集中豪雨による土砂災害により被災者は更に苦しめられ災害関連死の増加も心配される。復興が遅々として進まない中、国土館大学は第五陣の災害ボランティア派遣を本年3月に予定している。国土館大学は地域貢献と防災への取り組みを今後も引き続き活発に行っていきたい。東日本大震災の報告書「絆」、熊本地震の報告書「結」に継ぐ能登半島地震の報告書は「縁」としてここにまとめられた。



国士舘大学における防災教育

防災・救急救助総合研究所 副所長
田中 秀治

令和6年1月1日に発生した能登半島地震および9月20日からの大雨災害では、死傷者1,870名、住宅被害12万戸に及ぶ甚大な被害が発生し、多くの方々がいまだ避難所の生活を余儀なくされています。このため被災からほどなくして全国からも多くのボランティアが復旧支援活動に参加しました。

これまで、東日本大震災・熊本地震・さまざまな震災風水害に教員・学生のボランティアを派遣してきた国士舘大学防災・救急救助総合研究所でも、被災者の生活の早期復旧支援するために1月には教職員が先行して現地の被害状況の確認し、その後3月には学生ボランティアを引率して活動を行うことになりました。本報告書では能登半島災害において行った災害ボランティアが果たした活動を振り返るとともに、これからの長い復興への道のりを見据え、災害ボランティアに期待される支援や役割についても教員・学生から報告させていただきたいと思います。

国士舘大学では、地域社会で活躍する、国家の支柱となりうる人材育成を目指しております。今回の被災地でのボランティア活動においても学生たちの成長はめざましく、予想以上の成果を上げることはできましたが、平行して課題も見えてきました。これらを今後の防災リーダー教育に反映させ、よりよい防災教育を行っていきたいと思います。

どうぞみなさまの引き続きのご指導をよろしくお願いいたします。



『災害ボランティアが支えるこの国の防災』

国土舘大学 名誉教授
山崎 登

《阪神・淡路大震災から 30 年》

2025 年(令和 7 年) 1 月 17 日で、6434 人が亡くなった阪神・淡路大震災から 30 年が経ちました。日本は大きな災害を経験するたびにその教訓を生かして防災対策を積み上げてきました。なかでも現在の防災のあり方に大きな影響を与えたのが阪神・淡路大震災でした。国の危機管理体制のあり方、住宅の耐震性を高めることの重要性、地域の防災力やボランティア活動の大切さなどは、いずれも阪神・淡路大震災を教訓にこの 30 年間に形作られてきた防災対策とっていいと思います。災害が大きくなると、消防や警察、自衛隊などの防災機関の手には負えないものになり、地域のコミュニティの力を高めておくことやボランティアの活動が重要なものになると教えました。

阪神・淡路大震災では、震災直後から駆けつけたボランティアの人数は延べ約 180 万人（1997 年 12 月末まで）にのぼりました。ボランティアの役割は、当初は食料や物資の配給、高齢者などの安否確認、避難所運営、医療などでしたが、時間の経過とともに引っ越しの手伝い、住宅の修理、高齢者や障害者のケアなどと変化していきました。ボランティアの内訳は県外から駆けつけた人が 6 割以上を占め、学生など個人で活動する人が多く、医師や看護婦などの医療関係者や建築技術者、それに福祉などの専門技術を提供するボランティアもいました。なかでも大学生など若い人たちが汗を流す姿は被災者に希望や勇気を与えたばかりでなく、多くの人たちにこの国の将来に明るい展望を感じさせました。

アメリカなど海外の災害現場ではこうしたボランティアの存在を目にしましたが、日本ではそれまでの災害では見られなかった光景で、1995 年（平成 7 年）は「ボランティア元年」と呼ばれ、その後の閣議で 1 月 17 日は「防災とボランティアの日」に制定されました。

《関東大震災とボランティア》

過去の災害でも学生の災害ボランティアは重要な役割を果たしてきました。中央防災会議の「災害教訓の継承に関する専門調査会」がまとめた「1923 関東大震災」によりますと、関東大震災では被災者の救護や支援の活動を町内会や青年団などのほかに様々な団体が担いました。火災で焼けなかった地域には周辺の町内会や青年団、在郷軍人会などが救護所を設け、炊き出しや湯茶の接待が行われました。また東京大学の学生救護班は大学構内に避難してきた人たちの支援ばかりでなく、最大の避難地ともいえるべき上野公園にも活動の場を広げました。

【震災直後の避難地調査】（大正 12 年 9 月 1 日、2 日）

上野公園	500,000 人	東京駅前広場	30,000 人
皇居外苑	300,000 人	虎ノ門広場	30,000 人
芝公園	200,000 人	清水谷公園	30,000 人
日比谷公園	150,000 人	麴町公園	30,000 人
浅草公園	100,000 人	土手公園	10,000 人
小石川植物園	80,000 人	清澄公園	10,000 人
富士見町公園	56,800 人	千鳥ヶ淵公園	3,000 人
浜離宮	50,000 人	半蔵門前広場	3,000 人
横網町被服廠跡	50,000 人		
計			1,633,800 人

（「日本公園 100 年史」日本公園 100 年史刊行会）

上野公園には避難地の中で最も多い 50 万人もの避難者が集まっていて、区役所の昼の炊き出しを受けるために 1 万人もの人が列を作り、朝の 8 時頃から並ばなくてははいけませんでした。また公園内の随所に糞便が散乱する不衛生な状況でした。そこで学生救護班は避難者を班分けしてそれぞれに配給などを行わせるとともに、便所を新設して汚物の清掃などを行いました。また遠く関西から支援に駆けつけたのは、神戸のスラムに身を投じて貧しい人達の救済にあたったキリスト教の社会運動家で、後にノーベル平和賞の候補にもなった賀川豊彦で、被害が深刻な東京本所にセツルメントを作りました。セツルメントは宗教家や学生などが主に都市部の貧民地区に自ら居住して宿泊所、託児所、教育、医療活動などの社会事業を行う活動のことで、始まりは産業革命で貧富の差が広がった 19 世紀後半のイギリスだといわれます。賀川豊彦の活動は次第に広がりを持ち、東京大学の学生たちとも緩やかなつながりを持ったということで、関東大震災の被災者の救護、支援活動においてもボランティアは欠くことのできない役割を果たしたといっていると思います。しかしそうしたボランティア活動の萌芽が次代の防災対策に引き継がれることはありませんでした。その大きな理由に第 1 次世界大戦、第 2 次世界大戦へと続く社会の混乱と戦後の日本が珍しく大きな災害が少ない時期だったことを上げることができると思います。

《国土館大学の災害ボランティア活動と今後の課題》

国土館大学の災害ボランティア活動が広く社会に知られるきっかけになった災害は、1993 年（平成 5 年）7 月 12 日午後 10 時 17 分に起きた北海道南西沖地震でした。地震は北海道南西部の海底で発生し、規模はマグニチュード 7.8、最大震度は小樽市などで 5 で、最も被害が大きかった奥尻島には震度計が設置されていなかったことから計測されませんでした。地震発生から約 5 分後、遡上高が 30 m を超える大津波が奥尻島の西部を襲い青苗地区などで壊滅的な被害を出し、死者・行方不明者は 230 人に上りました。この災害で国土館大学の災害ボランティアが活動しました。

内閣府の防災情報のページにはこう記されています。『学内の二つのサークルが「国土館大学学生有志」を結成し、「奥尻島エイド」という名称の活動を興し、街頭で募金を募る（7 月 20 日～28 日）とともに、被災地でのボランティア活動を計画した。実際に奥尻に行ったのは、同両サークルと海外

ボランティア組織および一般学生のなかの希望者計 18 名（男性 16 名，女性 2 名），ならびに同ボランティア組織の責任者（大学職員）とカメラマンの合計 20 名であった。7 月 24 日に出発し，25 日から 8 月 1 日まで，救援物資の仕分けと配送に従事した。テントを持参するが，体育館で宿泊し，自炊生活。財政的には同窓会などの後援があった。ボランティア生活中における参加学生のミーティングの言動からは，当初被災者の間近で作業したいという希望をもっていた彼らが次第に自分たちの行っている地味な仕事の意義を見いだしていく過程が推察された。[「災害の心理学とその周辺－北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ」若林佳史 (2003/ 5), p.156]』

私が間近で国土館大学の学生の災害ボランティア活動を見たのは，死者が 200 人を超え，平成以降の豪雨災害としては最も深刻な被害を出した 2018 年（平成 30 年）7 月豪雨（西日本豪雨）災害の時でした。国土館大学のボランティアは愛媛県や岡山県など西日本の被災地まで支援に行き，多くの学生が床下から泥を掻き出したり，使えなくなった家具やがれきの片付けに汗を流していました。最近の学生は親や教員以外の大人と対等に話をしたり，まして対等の立場から感謝の言葉をかけられたりする機会は少ないように思えますが，被災者からお礼の言葉をかけられたり，地元のテレビや新聞の取材を受けて緊張している学生を目にしました。その経験は「防災リーダー養成論」や「防災リーダー養成論実習」の学びを深めるとともに，人と人が助け合いながら暮らしていく社会のコミュニティのあり方を身に着ける場になっていると痛感しました。防災は知っているだけでなく，それを実践できることが重要だからです。



▲西日本豪雨での国土館大学の学生ボランティア活動
(2018 年・愛媛県大洲市・筆者撮影)

災害ボランティア活動は，災害の多いこの国の被災者支援と防災対策に新たな展望を開いてきましたが，一方で阪神・淡路大震災では被災した市町村でボランティアの窓口が統一されていなかったり，支援を待つ被災者とボランティアをつなぐ仕組みがなかったりしたことが大きな課題となりました。このため 2004 年（平成 16 年）の新潟県中越地震からは社会福祉協議会が「災害ボランティアセンター」を開設しボランティアの窓口になる形が定着し，その後様々な専門性を持ったボランティア団体や N P O などが活動するようになりました。しかし東日本大震災では約 550 万人がボランティアとして活動しましたが，そのすべてを「災害ボランティアセンター」が調整することは難しく，「災害ボランティアセンター」とは別にボランティアや N P O を調整する「中間支援組織」の必要性が浮かび上がりました。また被災地の支援に「抜け」や「もれ」，「むら」があるとも指摘され，熊本地震後の 2016 年（平成 28 年）11 月 1 日にボランティア団体同士の連携を深め，支援の調整をするための全国ネットワーク「J V O A D」が作られました。また熊本地震ではボランティアと行政による初

めての情報共有会議が設けられ、ボランティアは存在感を増してきました。

こうして災害ボランティアを巡る環境は必要に迫られる形で整備されてきましたが、まだまだ災害ボランティアへの社会の理解は十分ではないように思われます。また災害ボランティア活動をさらに効果的なものにするための被災者との調整や行政と連携する仕組みも不十分です。

毎年のように地震や豪雨による大きな災害が起き、今後、首都直下地震や南海トラフの巨大地震の発生が想定される中、被災地の復旧や被災者の支援に欠かせない災害ボランティア活動をどのようにこの国の防災対策に組み込んでいくかは大きな課題です。学生を被災地にボランティアとして送る活動を続けるとともに、学生のボランティア活動をより効果的に、より防災教育に生かせるようにするための研究と実践が求められているのです。国士舘大学に寄せられる期待と役割は大きいというべきだと思います。

【参考】

「日本公園 100 年史」日本公園 100 年史刊行会

「災害教訓の継承に関する専門調査会報告・1923 関東大震災」（中央防災会議）、賀川豊彦記念松沢資料館資料。内閣府防災情報。

活動拠点として令和6年能登半島地震を振り返って

当時：国際医療福祉専門学校七尾校 教員

(令和7年3月31日退職)

星野 唯 (旧姓 武田)

体育学部スポーツ医科学科 2015 年卒業

はじめに、国土舘大学の皆様には多くのご支援いただき、心より感謝申し上げます。

当時、多くの学校関係者が被災されるなか、県外在住職員である私は、人的・物的支援のために1月3日より出勤していました。ご縁があり、学校再開に向け国土舘大学災害ボランティアの活動拠点として運営することとなりました。

国土舘大学の皆様のご支援は学校再開に向けて大きな一歩になりました。学生の笑顔、頼もしい体力、まっすぐな眼差しは、目の前の問題解決のみならず、七尾校スタッフの折れかけていた心に優しく寄り添い、大きな支えとなり、自らの足で立ち上がる気持ちに火を灯し続けることに繋がりました。

私は、国土舘大学在籍中に災害ボランティアに参加する機会がありました。今回、初めて災害ボランティア活動を受け入れる側に立ち、人と人とのつながり「縁」を肌で感じることができました。七尾校に視察にお越しいただいた際には、学生時代からお世話になっていた懐かしい顔を拝見した時に、安堵で涙が溢れてきたことを今でも鮮明に思い出すことがあります。

日本では、毎年多くの災害があり、助けを求める方々がいます。七尾校は現在も復興半ばですが、一歩ずつ確実に前へ進むことができていると伺っております。

国土舘大学災害ボランティアの活動を続けることは誰かの支えとなり、大きな力に変わって受け継がれます。これからも国土舘大学の支援の輪が広がり、新たな発展につながることを心より願っております。

能登半島は、観光地としても魅力あふれる場所です。北陸へ訪れる際には、ぜひ足を運んでみてください。



現地受入団体として

おらっちゃ七尾

sien sien west

代表 今井 健太郎（パパラ）

国土舘大学の学生の皆様には、何度も現地に足を運び、支援活動にご尽力いただき誠にありがとうございました。

被災された皆様にとって、県外からの支援は非常に心強く、学生の皆様の存在が「また前を向き進んで行こう」という希望を与えたことは間違いありません。

特に印象深かったのは、学生の皆様による訪問活動を通じて住民の細やかなニーズを掘り起こし、それを具体的な支援へと結びつけてくださった姿勢です。

例えば、倒壊した家財が原因で車を出せなくなっていた車庫の片付けでは、学生の皆様が自ら作業計画を立て、見事に車を救出されました。

このような自主的かつ組織的な行動に、私たちは皆様の力強さと頼もしさを感じました。

また、夏には「こども縁日」を企画・開催し、地域住民に笑顔を届けてくださいました。被災後、地域行事が相次いで中止となり、子供たちの楽しみが大幅に減っている中で、皆様が地域の子供たちと全力で遊び、交流してくださったことは、学生達だからできた支援だったと感じています。特に、地震で怖い思いをした子供たちにとって、楽しく素敵な思い出になったことでしょう。

支援活動を通じて、学生の皆様が「誰かの力になるにはどうしたら良いのか」を真剣に考え、それを行動に移した経験は、被災地での活動だけに留まらず、今後の仕事や人生においても大きな糧となると強く確信しています。

今後も、国土舘大学の皆様が七尾での経験を活かし、被災された方々の力になり、目の前の人々を笑顔に変えてきたように、それぞれの場で誰かの力となり、地域や社会に貢献していかれることを、心から信じ応援しています。



Ⅱ．支援活動

1. 物資支援

2. 学習支援

3. 募金活動

4. 災害ボランティア活動

I. 物資支援

■期間：2024 年 1 月 7 日～ 27 日

■提供場所：石川県七尾市国際医療福祉専門学校七尾校

■支援物資

1 / 7 提供物資一覧

No	項目	物資名称	個数	支援元
1	飲料・食料	飲料水 500ml	37 箱 (444L)	国土舘大学・多摩市内福祉施設
2	飲料・食料	生活用水	360L	国土舘大学
3	生活支援	簡易便座 (6 個入り)	20 箱	多摩市
4	生活支援	携帯トイレ	160 回分	多摩市内の企業・福祉施設
5	生活支援	ポリタンク	30 個	国土舘大学・多摩市
6	生活支援	ガスコンロ	7 台	多摩市
7	生活支援	ガスボンベ	36 本	多摩市
8	生活支援	ウェットティッシュ	2 箱	多摩市
9	生活支援	毛布	40 枚	国土舘大学
10	生活支援	ボディシート	15 セット	国土舘大学
11	生活支援	ブルーシート 10m × 10m	1 枚	国土舘大学
12	生活支援	黒色ゴミ袋	100 枚	国土舘大学
13	教材	救急救命士国家試験問題		国土舘大学

1 / 27 提供物資一覧

No	項目	物資名称	個数	支援元
1	生活支援	遊び道具	多数	こどもスポーツ教育学科学生有志
2	飲料・食料	米 20kg	8 個	多摩市
3	飲料・食料	ベビーフード 48 個入り	16 箱	多摩市
4	飲料・食料	らくらくミルク 24 缶入り	5 箱	多摩市
5	飲料・食料	水 2L × 8 本	7 箱	町田ビルゼアスポーツクラブ
6	飲料・食料	OS-1 300ml × 24 本	2 箱	町田ビルゼアスポーツクラブ
7	飲料・食料	OS-1 1500ml × 6 本	6 箱	町田ビルゼアスポーツクラブ
8	生活支援	ヨガマット	23 枚	町田ビルゼアスポーツクラブ

■支援物資輸送者

1 / 7 植田広樹 (教授)、曾根悦子 (講師)、都城治 (助教)、永吉英記 (こどもスポーツ教育学科教授)
坂梨秀地 (スポーツ医科学科助教)、吉川文隆 (準職員)

1 / 27 浅倉大地 (助教)、永吉英記 (こどもスポーツ教育学科教授)
田中くらら (ウエルネス・リサーチセンター研究員)

■支援物資輸送方法：防災総研トラック (1 / 7)、私有車 (1 / 27)

写真による報告



東京での積込の様子



専門学校での積み下ろしの様子



1 / 7に積み下ろした荷物



多摩市によるポリタンクの支援



学生有志による遊び道具の支援



運び込まれるヨガマット

II. 学習支援

■活動目的

国際医療福祉専門学校七尾校は救急救命学科、理学療法学科、介護学科の3学科で総学生数90名が在籍している。救急救命学科は1年生9人、2年生13人、3年生16人が在籍しており、3年生は国家試験が目前に迫った段階での被災となった。学生指導に加え、学校の復旧活動、自宅の復旧活動などに直面する現地専門学校の教員や学業に専念しにくい環境下で暮らす学生のために学習支援を行った。

■期 間：1月13日・14日・26日

■活動場所：13日14日：国立能登青少年交流の家
26日：金沢市内研修施設



NHK 石川 NEWS WEB「地震で休校の専門学校生に特別授業 救急救命士目指し」

<https://www3.nhk.or.jp/lnews/kanazawa/20240126/3020018555.html>

III. 募金活動

■活動目的

3月の活動で一度区切りをつけた被災地でのボランティア活動だったが、被災地の様子はまだまだ復旧もままならない状況であり、継続した支援が必要である。春期の授業がスタートしてしまうと石川県での活動は難しくなるが、東京でも出来る活動をしたいという学生の意思等を尊重し、お祭りで活動報告及び防災意識の啓発・募金集めを行うこととした。

■期 間：2024年4月7日 10時～17時

■活動場所：京王線聖蹟桜ヶ丘駅周辺 九頭竜公園

■イベント名：第43回せいせき桜祭り

■連携実施団体：多摩市社会福祉協議会、ゆるたまネット

■参加学生：2名（21- 2 A199 紺谷龍之介、23- 2 C117 篠原聖真）

■募金額合計：82,828円

■寄付先：国際医療福祉専門学校七尾校



IV. 災害ボランティア活動 概要

■活動目的

2024 年 1 月 1 日に発生した能登半島地震により、石川県、富山県、新潟県において大きな被害が発生している。中でも能登半島を中心に石川県内では甚大な被害が発生し、今現在も多くの方が避難生活を送られている。被害状況、ボランティアセンターの運営状況、災害ボランティアの要否の実態調査を行ったところ、ボランティアニーズがあることが認められた。また、断水が継続する中で、復旧・復興支援が急務である。これまでの災害ボランティア活動の経験を活かし、学生の安全を確保した上で被災地支援に行く事は、本学の教育理念に適い、当研究所の事業目的でもある。

■期 間：2 月 19 日～ 23 日：1 陣 2 月 28 日～ 3 月 2 日：2 陣 3 月 4 日～ 7 日：3 陣
8 月 10 日～ 14 日：4 陣

■活動場所：石川県七尾市内

■活動内容：サロン活動の運営・周知、被災家屋（個人宅）の瓦礫撤去、ブロック塀撤去・清掃、ニーズ調査、子ども向けイベントの運営など

■集 合：1 陣 2 陣：初日の 17 時～ 19 時の間に国際医療福祉専門学校七尾校に現地集合
3 陣：初日の 9 時 45 分に国土舘大学多摩キャンパスに集合
4 陣：初日の 17 時～ 20 時 40 分の間に OneDayFam（宿泊場所）に現地集合

■解 散：1 陣 2 陣：最終日の昼までに国際医療福祉専門学校七尾校で現地解散
3 陣：最終日の午前発で国際医療福祉専門学校七尾校出発、夕方から夜に東京到着
4 陣：最終日の 8 時に OneDayFam（宿泊場所）で現地解散

■移 動：1 陣 2 陣 4 陣：公共交通機関
3 陣：チャーターバス

■個人装備：※別途添付

■学生補助：1 人活動日数× 5 千円の補助（公共交通機関で移動した学生のみ）
ボランティア保険代（全員分）
宿泊費の半額（クラウドファンディングから）

■学生負担：1 人 1 万円程度の移動費、期間中の食事代、個人装備代

参加学生一覧

1 陣 16 名		
学籍番号	学部	名前
20-1G009	政経学部政治行政学科	桑原敦也
21-2C082	体育学部スポーツ医科学科	永瀬甲矢
21-2C146	体育学部スポーツ医科学科	望月愛歩
21-3A026	理工学部理工学科	淵野葉子
21-3A159	理工学部理工学科	藤原正輝
22-1G177	政経学部政治行政学科	大津寄史子
22-2C004	体育学部スポーツ医科学科	須田空都
22-2C126	体育学部スポーツ医科学科	赤間拓夢
22-2C170	体育学部スポーツ医科学科	尾谷優
22-4A136	法学部法律学科	毛塚悠斗
23-2C018	体育学部スポーツ医科学科	城条涼介
23-2C056	体育学部スポーツ医科学科	向澤伶惟
23-2C061	体育学部スポーツ医科学科	川嶋恭志郎
23-2C068	体育学部スポーツ医科学科	上野陽色
23-2C086	体育学部スポーツ医科学科	牛島爽斗
23-2C140	体育学部スポーツ医科学科	氏田和花

3 陣 41 名		
学籍番号	学部	名前
23-MJ002	大学院救急システム研究科	田中正弥
21-1G011	政経学部政治行政学科	石田和也
21-1G029	政経学部政治行政学科	鈴木隆太
21-2A199	体育学部体育学科	紺谷龍ノ介
21-3A027	理工学部理工学科	井上翼
21-3A103	理工学部理工学科	三輪龍生
21-4A007	法学部法律学科	小松由宜
21-4A015	法学部法律学科	伊藤渚々翔
21-4A026	法学部法律学科	高橋知希
21-4A071	法学部法律学科	高妻樹
21-4A093	法学部法律学科	河田大志
21-4A098	法学部法律学科	天野洸介
21-4A138	法学部法律学科	細田大地
22-2C015	体育学部スポーツ医科学科	大塚日向登
22-2C060	体育学部スポーツ医科学科	山崎桜羽
22-2C066	体育学部スポーツ医科学科	倉科幸太朗
22-2C070	体育学部スポーツ医科学科	中村文太
22-2C077	体育学部スポーツ医科学科	松尾祥汰
22-2C137	体育学部スポーツ医科学科	原希実
22-2C157	体育学部スポーツ医科学科	川上泰矢
22-2C168	体育学部スポーツ医科学科	浅島伶遼
22-2C170	体育学部スポーツ医科学科	尾谷優
22-4B010	法学部現代ビジネス法学科	佐藤隆登
22-4B051	法学部現代ビジネス法学科	小上晴幹
22-4B064	法学部現代ビジネス法学科	白井暁人
23-2C008	体育学部スポーツ医科学科	中村駿太
23-2C012	体育学部スポーツ医科学科	関口輝
23-2C015	体育学部スポーツ医科学科	田村晃誠
23-2C022	体育学部スポーツ医科学科	佐藤彩人
23-2C026	体育学部スポーツ医科学科	渡辺竣太
23-2C039	体育学部スポーツ医科学科	小澤飛翔
23-2C056	体育学部スポーツ医科学科	向澤伶惟
23-2C068	体育学部スポーツ医科学科	上野陽色
23-2C117	体育学部 スポーツ医科学科	篠原聖真
23-2C121	体育学部スポーツ医科学科	田邊陽紀
23-2C135	体育学部スポーツ医科学科	久保雅暉
23-2C150	体育学部スポーツ医科学科	大橋勇斗
23-2C164	体育学部スポーツ医科学科	笹原琉星
23-4A177	法学部法律学科	高柳威文
23-5J035	文学部史学地理学科	吉田葉奈
—	体育学部スポーツ医科学科	匿名

2 陣 14 名		
学籍番号	学部	名前
21-2C076	体育学部スポーツ医科学科	長井英慈
21-4B007	法学部現代ビジネス法学科	大河内裕貴
21-3A328	理工学部理工学科	水野匡
21-4B056	法学部現代ビジネス法学科	新井勇大
21-4B092	法学部現代ビジネス法学科	佐々木翼
21-4B127	法学部現代ビジネス法学科	小野航歩
22-1E120	政経学部経済学科	遠入綾杜
22-3A023	理工学部基礎理学系	杉崎文哉
22-4A018	法学部法律学科	町田遥翔
23-1E146	政経学部経済学科	亀山瑠加
23-1E230	政経学部経済学科	保科風人
23-1E381	政経学部経済学科	上迫恭大
23-2C130	体育学部スポーツ医科学科	坂田大馳
23-2C132	体育学部スポーツ医科学科	石井寿真

4 陣 20 名		
学籍番号	学部	名前
20-1G009	政経学部政治行政学科	桑原敦也
21-2C139	体育学部スポーツ医科学科	板垣和真
21-3A328	理工学部理工学科	水野匡
22-2C104	体育学部スポーツ医科学科	岡山雄希
22-4A054	法学部法律学科	鶴賀奏汰
22-4A064	法学部法律学科	荒野颯汰
22-5J035	文学部史学地理学科	山崎悠斗
23-2C104	体育学部スポーツ医科学科	栗本直輝
23-2C150	体育学部スポーツ医科学科	大橋勇斗
23-4A160	法学部法律学科	林優花
23-4A229	法学部法律学科	常盤侑那
23-7A104	経営学部経営学科	浅品真優
24-2A130	体育学部体育学科	宮副直志
24-4A019	法律学部法律学科	海老原南
24-4B092	法学部現代ビジネス法学科	依田莉歩
24-5J414	文学部史学地理学科	吉田隼斗
24-5K223	文学部文学科	飯田創太郎
24-5K247	文学部文学科	田島侑弥
—	法学部法律学科	匿名
—	文学部史学地理学科	T.S

合計 91 名

ボランティア参加教職員

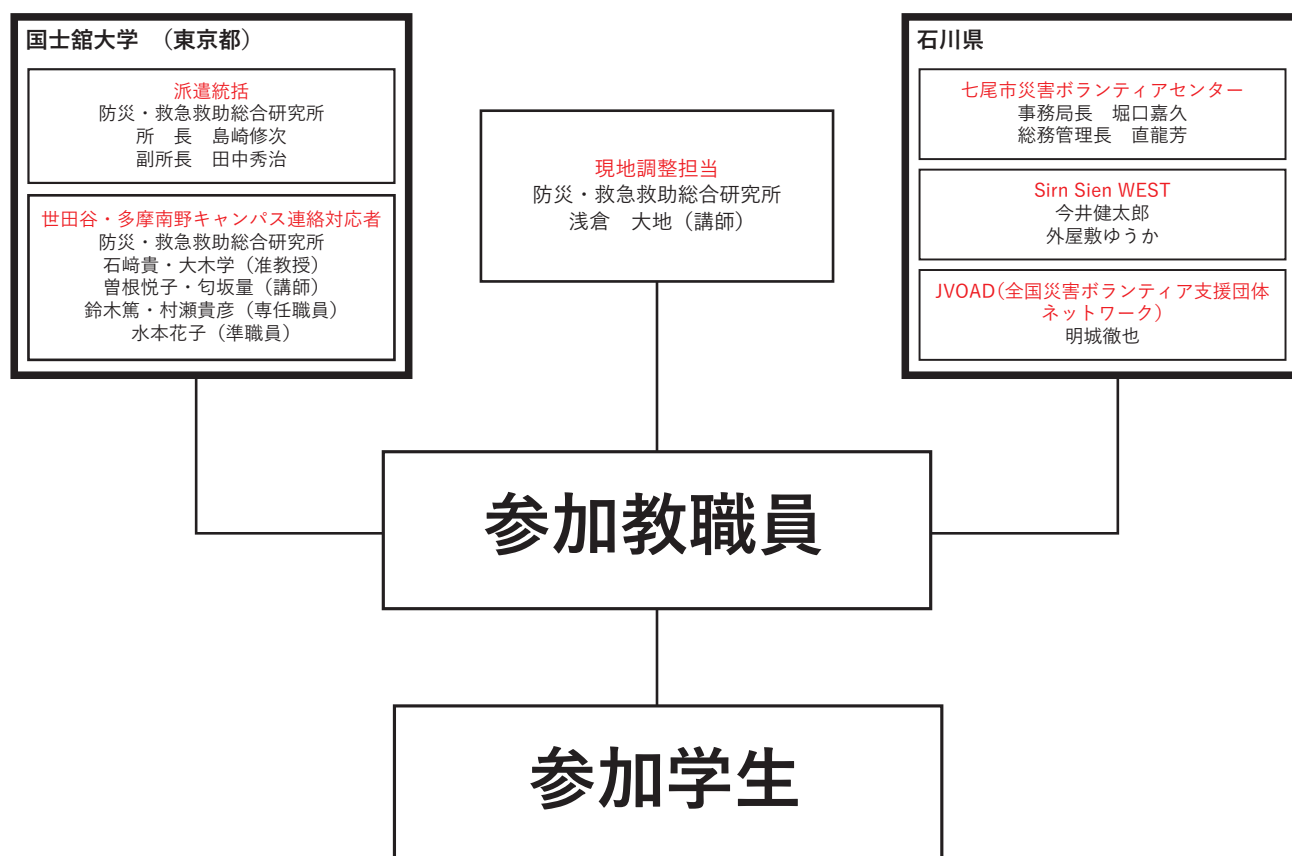
	1 陣	2 陣	3 陣	4 陣
責任者	浅倉	浅倉	浅倉	浅倉
メンバー	都	大木	曾根	植田・都

防災総研所属

植田広樹（教授）大木学（准教授）曾根悦子（講師）浅倉大地（助教→講師）都城治（助教→講師）

合計 7 名

≪組織図≫



時系列活動概要

1 陣

2月19日（月）

- 10：00 教員ハイエース多摩南野キャンパス集合・出発
- 17：00 石川県七尾市国際医療福祉専門学校到着
- 18：00 生活環境整備
- 19：00 専門学校副校長先生・国土館 OG 挨拶
- 19：20 ミーティング（自己紹介・明日の予定確認）
- 20：00 入浴
- 22：00 就寝

2月20日（火）

- 07：00 起床
- 08：30 朝食後集合・体調確認
- 09：00 午前の活動開始
(図書館・書庫書籍整理、水汲み、学校内清掃等)
- 12：00 昼休憩
- 13：00 午後の活動開始
(図書館・書庫書籍整理、水汲み、タイル並び替え等)
- 17：00 活動終了 順次入浴・夕食
- 19：00 ミーティング（活動の振り返り・明日の予定確認）
- 20：00 有志による活動延長戦（図書館書籍整理）
- 21：30 延長戦終了
- 22：00 就寝

2月21日（水）

- 07：00 起床
- 08：30 朝食後集合・体調確認
- 09：00 七尾市災害ボランティアセンター到着後受付
- 09：30 オリエンテーション、マッチングを受け、活動現場決定
- 10：00 送迎バスを待ち、活動現場へ出発
- 10：30 活動開始
 - ①都先生 家屋内の片付け、ゴミの分別、家財整理、運び出し
 - ②浅倉先生 「カリカリ」災害ごみの仮置き場の前の仮置き場での分別

12:00 悪天候により午前で災害ボランティアセンターの活動終了
13:00 国際医療福祉専門学校に戻り、昼食・休憩
14:30 午後の活動開始 国際医療福祉専門学校内での活動
(水汲み、木の伐採、タイル並び替え等)
16:30 活動終了 順次入浴・夕食
20:00 ミーティング (活動の振り返り・明日の予定確認)
21:00 体育館にてドローン試飛行
22:00 就寝

2月22日(木)

07:00 起床
08:30 朝食後集合・体調確認
09:00 午前の活動開始
(側溝のゴミ拾い、木の伐採、水汲み、タイル並び替え等)
12:00 昼休憩
13:00 午後の活動開始
(寮の備品移動、ドローンを使つての屋根上撮影、教室備品整理、水汲み、タイル並び替え等)
16:00 活動終了 校長先生終了挨拶
17:00 順次入浴・夕食
20:00 ミーティング (活動の振り返り・明日の予定確認)
22:00 就寝

2月23日(金)

07:00 起床
08:15 集合・清掃場所割当
(体育館、食堂、風呂場、トイレ、水汲み)
09:30 清掃終了 副校長先生・国土館 OG 挨拶
09:45 解散
10:00 教員ハイエース国際医療福祉専門学校出発
17:00 ハイエース多摩南野キャンパス到着・解散

2陣

2月28日(水)

09:00 教員 MPV 多摩南野キャンパス集合・出発
16:00 石川県七尾市国際医療福祉専門学校到着

18:00 生活環境整備
19:00 専門学校校長・副校長先生・国士舘 OG 挨拶
19:20 ミーティング（自己紹介・明日の予定確認）
22:00 就寝

2月29日（木）

07:00 起床
08:15 朝食後集合・体調確認
09:00 石崎保育園集合
午前の活動開始
（ゴミの分別、瓦礫・泥撤去、ブロック塀撤去等）
12:10 昼休憩
13:10 午後の活動開始
（瓦礫・泥撤去、ブロック塀撤去、ニーズ調査等）
16:00 活動終了 国際医療福祉専門学校帰校後 順次入浴・夕食
19:30 ミーティング（活動の振り返り・明日の予定確認）
22:00 就寝

3月1日（金）

07:00 起床
08:15 朝食後集合・体調確認
09:00 七尾市災害ボランティアセンター到着後受付
09:30 オリエンテーション、マッチングを受け、活動現場決定
10:00 送迎バスを待ち、活動現場へ出発
10:30 午前の活動開始
「カリカリ」災害ごみの仮置き場の前の仮置き場での分別
12:00 休憩・昼食
13:00 午後の活動開始
「カリカリ」災害ごみの仮置き場の前の仮置き場での分別
15:30 活動終了 七尾市災害ボランティアセンターへ戻る
16:00 国際医療福祉専門学校帰着 順次入浴・夕食
19:30 ミーティング（活動の振り返り・明日の予定確認）
22:00 就寝

3月2日（土）

07:00 起床
08:15 集合・清掃場所割当
(体育館、食堂、風呂場、トイレ、水汲み)
09:30 清掃終了 副校長先生・国土館 OG 挨拶
09:45 解散

3陣

3月4日(月)

10:00 チャーターバス多摩キャンパス出発・教員金沢市宿泊先出発
12:00 教員石川県七尾市国際医療福祉専門学校七尾校到着
13:00 生活環境を整備
19:00 チャーターバス石川県七尾市国際医療福祉専門学校七尾校到着
19:30 専門学校校長・副校長・国土館 OG 挨拶
20:30 ミーティング(自己紹介・明日の予定確認)
22:00 就寝

3月5日(火)

07:00 起床
08:15 朝食後集合・体調確認
09:00 石崎保育園集合
午前の活動開始
(ゴミの分別、瓦礫・泥撤去・ブロック塀撤去等)
12:00 昼休憩
13:00 午後の活動開始
(瓦礫・泥撤去・ブロック塀撤去・ニーズ調査等)
16:00 活動終了 国際医療福祉専門学校七尾校帰校後 順次入浴・夕食
20:30 ミーティング(活動の振り返り・明日の予定確認)
22:00 就寝

3月6日(水)

07:00 起床
08:15 朝食後集合・体調確認
09:00 石崎保育園集合
午前の活動開始
(ゴミの分別、瓦礫・泥撤去・ブロック塀撤去等)

- 12：00 昼休憩
- 13：00 午後の活動開始
(瓦礫・泥撤去・ブロック塀撤去・ニーズ調査等)
- 16：00 活動終了 国際医療福祉専門学校七尾校帰校後 順次入浴・夕食
- 21：30 ミーティング（活動の振り返り・明日の予定確認）
- 22：00 就寝

3月7日（木）

- 07：00 起床
- 08：15 集合・清掃場所割当
(体育館、食堂、風呂場、トイレ、水汲み)
- 09：45 清掃終了 校長・副校長・国土館 OG 挨拶
- 10：00 チャーターバス石川県七尾市国際医療福祉専門学校七尾校出発
- 20：00 チャーターバス多摩市永山駅・多摩キャンパス到着解散

4 陣

8月9日（金）

- 09：00 教員トラック多摩南野キャンパス集合・出発
- 17：00 石川県七尾市国際医療福祉専門学校七尾校到着ハイエース借用
- 17：30 宿泊先（OneDayFam）到着
- 19：00 ミーティング（今後の予定確認）
- 20：00 専門学校校長先生訪問・差し入れ受取
- 22：00 就寝

8月10日（土）

- 07：00 起床
- 08：00 朝食後集合・視察出発
- 09：00 輪島市到着
朝市跡地等を視察
能登空港視察
- 12：00 珠洲市到着、昼休憩
- 13：00 すずプレーパーク視察、終了後出発
- 16：00 宿泊先帰着
- 20：45 学生集合完了
- 21：00 ミーティング（自己紹介・明日の予定確認・役割分担）

22：00 入浴後就寝

8月11日（日）

06：30 起床

07：00 朝食

08：30 体調確認後出発

09：00 石崎保育園到着、朝礼

09：30 午前の活動開始

こども縁日の活動準備

買い出し、ポップ等の作成

12：00 昼休憩

13：00 午後の活動開始

14：00 こども縁日の準備完了

移動し、活動開始（いるもの、いないものの仕分けのお手伝い）

16：00 活動終了 終礼

17：00 宿泊先に戻り、順次入浴

19：00 夕食

21：00 ミーティング（活動の振り返り・明日の予定確認）

22：00 就寝

8月12日（祝）

06：30 起床

07：00 朝食

08：30 体調確認後出発

09：00 石崎保育園到着、朝礼

活動開始

（こども縁日イベント運営）

16：00 活動終了

16：30 学生の半分を連れて輪島市へ視察へ

17：00 残りの半分の学生は宿泊先に戻り、順次入浴

19：30 輪島市から帰着、夕食

21：00 ミーティング（活動の振り返り・明日の予定確認・役割変更）

22：00 就寝

8月13日（火）

06：30 起床

07:00 朝食
08:30 体調確認後出発
09:00 石崎保育園到着、朝礼
活動開始
(こども縁日イベント運営)
16:00 活動終了
16:30 学生の半分を連れて輪島市へ視察へ
17:00 残りの半分の学生は宿泊先に戻り、順次入浴
19:30 輪島市から帰着、夕食
21:00 ミーティング(活動の振り返り・明日の予定確認)
22:00 就寝

8月14日(水)

06:30 起床
07:00 朝食
08:00 宿のご主人に挨拶
08:30 和倉温泉駅まで学生を送って解散
09:00 借用ハイエース国際医療福祉専門学校七尾校に返却・トラック出発
18:30 トラック多摩南野キャンパス到着・解散

Ⅲ．ボランティア参加学生レポート

第1陣 令和6年2月19日～23日

永瀬甲矢	藤原正輝	尾谷優
望月愛歩	大津寄史子	毛塚悠斗
淵野葉子	須田空都	城条涼介

第2陣 令和6年2月28日～3月2日

大河内裕貴	小野航歩	亀山瑠加
水野匡	遠入綾杜	保科風人
新井勇大	杉崎文哉	坂田大馳
佐々木翼	町田遥翔	石井寿真

第3陣 令和6年3月4日～7日

石田和也	中村文太	田村晃誠
紺谷龍ノ介	原希実	渡辺竣太
井上翼	川上泰矢	上野陽色
小松由宜	浅島伶遼	田邊陽紀
伊藤渚々翔	尾谷優	久保雅暉
細田大地	佐藤隆登	大橋勇斗
大塚日向登	小上晴幹	高柳威文
山崎桜羽	臼井暁人	吉田栞奈
倉科幸太郎	中村駿太	

第4陣 令和6年8月10日～14日

板垣和真	林優花	T.S
水野匡	常盤侑那	
岡山雄希	宮副直志	
鶴賀奏汰	海老原南	
荒野颯汰	依田莉歩	
山崎悠斗	吉田隼斗	
大橋勇斗	飯田創太郎	

- 第 1 陣 -

体育学部スポーツ医科学科 3 年 永瀬 甲矢 (第 1 陣)

今回の災害ボランティアは 2024.2.19 ～ 2024.2.23(活動日 20 ～ 22) であった。

支援先は石川県七尾市、中能登地域であった。特に建物の被害が多い地域であり、駅を降りてすぐに地割れや傾いた柱など被害の大きさを感じさせられた。宿泊先は国際医療福祉専門学校七尾校で、体育館、食堂を借りて寝泊まりさせてもらった。慣れない環境で体は休まりにくかったが、たったの 4 泊であったことを考えると、被災から 2 ヶ月立つ被災地の人はどれほど辛いだろうか感じられる機会であった。

活動内容としては、専門学校での活動が 2 日、七尾市ボランティアセンターでの活動が 1 日であった。

専門学校での活動は、片付けがメインで、水汲みやサロン(被災者支援サービス)なども行った。片付けの内容としては、図書館の片付け、壊れたロッカーの整備、地面のレンガ並べ、木の剪定、排水溝に溜まった落ち葉の片付け、支援物資の管理、寮の片付け、などであった。

図書館の片付けは、地震により倒れた本棚を撤去し、散らばった本を分類分けする作業であった。単純な仕事ではあったが、数が尋常ではなく、1 日目をほとんど使っても作業は終わらなかった。図書館の片付けを通して思ったのは、あれだけ重い棚が倒れた時に、人が下敷きになれば重症または死に至ると感じた。

いくつかの活動の中で最も大変だったのは水汲みである。組み上げホースを使いタンクに水を貯める作業であるが、雨に打たれながらタンクが貯まるまでホースを保持し続けるのは寒く、足も疲れた。

七尾市のボランティアセンターを通しての活動では、連絡役、住人への対応を任されたが、トラック運転手、ボランティアセンターのスタッフと時間の調節や物資の調節など連絡を取り合ったりなど、重労働以外の重要な仕事を任せられ、責任を持って仕事できた。初めての経験であったが、都先生のサポートもあり、とても良い経験となった。

今後また機会があれば、七尾市、その他のボランティア活動に参加したい。

体育学部スポーツ医科学科 3 年 望月愛歩 (第 1 陣)

今回、初の災害ボランティア活動に参加させていただき、非常に実のある時間になった。

主な活動としては、書籍整理、サロンのお手伝い、災害廃棄物の仕分け、タイルの並べ直し、給水、下駄箱・仮設トイレの清掃等を行った。

実際に被災地で生活してみて、水の大切さや被災地の寒さ、自己完結の難しさを実感し日常生活を見直すきっかけになった。運営者であると同時に被災者であるボランティアセンターの皆さんや七尾校の皆さんの堂々たる活動姿に支援者である自分自身、たくさんのパワーをもらった。初めて全壊の建物や神社の鳥居が半分倒壊、地盤が隆起、断水などの非日常を目の当たりにし、また、アルファ米を食べ続けたことも貴重な経験の一つであった。

自分たちの活動によって、少しずつ色々なものが修復されていくのが形として表れた時や「ありがとう」と感謝の気持ちを伝えてくださった時、胸がいっぱいになった。毎晩その日の活動についてデフュージングを行い、仲間で讃えあったことでより良い活動につながっていった。「泥や瓦礫だけを見ずに、人を見る」という言葉の意味を改めて考えてみた時に、被災者とそこにあったこれまでの生活やこれからの生活を想像できる支援者であることが、復旧・復興を視野に入れた一ボランティアの役割であると学んだ。そして、一人一人が被災地へ関心を寄せ続ける事も立派な支援の一つであると感じた。

最後に、温かく迎えてくださった七尾市の皆さんに心から感謝申し上げます。

理工学部理工学科 3年 淵野葉子（第1陣）

今回のボランティア活動で私は一陣に参加しました。前回行われた千葉県茂原市でのボランティア活動の時の仲間もいて心強かったです。大学で災害ボランティアに泊まりで参加するのは初めてでした。七尾市に着いてからの街並みは、綺麗な家もあれば、全壊している家、マンホールがとび出ている、がけ崩れ起きていました。歩道のタイルが崩れていたり、道路に大きな裂が入っていたり、初めて地震の爪跡を見ました。七尾市では断水していて、水が出ない生活を初めて過ごしました。手を洗うのにもトイレに行くのにも、自分で水を汲まないとならない生活はとても大変で、実際に七尾市に住んでいて生活している方は相当なストレスだと感じました。活動は主に、宿泊した専門学校のお手伝いをしました。図書館は本棚が壊れて崩れていたり、棚から落ちた本が多く散乱していました。新しい本棚が届いた際に、本を並べやすいように、ラベルごとに仕分けをしました。ただ本を片付けるだけでなく、新しい本棚が来た時の事まで考えての活動でした。先のことまで考えて活動できるのはとても素晴らしいことだと感じました。普段は外部のボランティアチームに所属していて活動しています。年齢の近い人はあまりいないため、大学のみんなで活動するのはとても新鮮で有意義です。初めは友達もおらず不安でしたが、すぐに打ち解けることが出来、5日間過ごすことが出来ました。仲間がいなかったら乗り越えることはできなかったと思います。最後、金沢駅で解散した際、またボランティアで会おうという約束をし、とても素敵な約束だなと思いました。

理工学部理工学科 3年 藤原正輝（第1陣）

初めての災害ボランティアで、周りの学生もスポーツ医科の方が多く関連の無い学部から来ている人は少数派だったので少し緊張していましたが、メンバー全員慣れ親しみやすくとても活動しやすかったです。

今回の活動で一番に得たものは被災地での生活について理解を深めたことです。1日を過ごす中で何度も新たな気づきがあったり、座学では聞いていても体感するのは全く違うことだと改めて感じました。仮設トイレに対する多少なりともある抵抗感、体育館の床の硬さや冷たさ。水を得るために必要な労力、すべて実際に体験した人にしかわからない”大変さ”であったと感じます。自ら進んでこの環境に足を運んだ人間であるのにも関わらず抵抗感を感じたということは、ある日突然被災した

方達で災害関連死が起きるのにも納得が이었습니다。

ボランティア活動で一番に感じた事は関連分野の専攻をしていない自分でも思っていたより活動できたことでした。誰にでもできることはあると気づけた事がまた次の機会に足を進める後押しになったと思います。

ここで言葉に言い合わせない事が悔しい程多くの事を学んだと強く感じています。これからも自分にできる事は何かないのか考えながら生活していければと思います。

政経学部政治行政学科 2年 大津寄史子（第1陣）

私は今回の活動を通して、災害の恐ろしさを知ることになった。地震の痕が生々しく残っていたからである。

まず七尾駅に着いた際にホームが崩壊しており、道のあちこちに亀裂が残っていたほか、屋外での活動の際には倒壊家屋の下敷きになった車や鳥居が壊れてしまった神社を見た。全壊した寮に入った際に目にした光景も衝撃的だった。家全体が傾き、網戸は閉まらなくなっていた。家の中に足を踏み入れて床を踏むと、床の遠くから音が鳴る。階段はとても使える状態ではなかった。私は「日本の家は震度7じゃないと全壊にはならない」と思い込んでいたため、全壊家屋や倒壊家屋が並ぶ光景は信じがたいものだった。自分にとって思い入れのある土地で今回のような悲劇が起き、街がこのような姿になってしまったことがとにかくショックだった。

七尾市内の震度は6強だったというのが、これは地元・神奈川県相模原市における首都直下地震の際の予想震度と同じなので「自分の街の未来の姿」を見ているようだった。自分の街が将来こうなるかもしれない、だとすれば今何ができるだろうか？ それを改めて考える切っ掛けになった。

私は活動を通して、災害の恐ろしさと共に被災地の人達の力強さも知ることになった。活動中は学校の敷地内の井戸から生活用水を汲んでいたが、その井戸は元からあったものではなく「断水が解消しなかったためやむを得ず掘ったもの」だということを知った時に大変驚いた。また、屋外での活動を終えて拠点に戻ろうとしている最中に店やコンビニの窓に「がんばろう能登」「全国からありがとう」と書いてあるのが目に入って心が温かくなった。自分たちが大変な状況なのに他の人に「ありがとう」と言えるのは、やはり日本人の国民性なのだろうか。自分が被災者になった時もこのように強くありたいと思った。

自分が活動することによって現地が復興していく手助けになるのだと考えると、活動した五日間はとても有意義に感じられた。特に図書室の復旧作業の時に、足の踏み場もなかった図書室が少しずつ元の姿に戻っていったのが嬉しかった。

体育学部スポーツ医科学科 2年 須田空都（第1陣）

私は今回のボランティアを通して被災地で生きることの辛さ、大変さを学ぶことができました。電気は通っているが水が断水している生活を人生で初めて経験しました。水も普段の様に好きな量を使えるわけではなくタンクから蛇口を捻って使用しました。いつもは蛇口を捻れば水が出るため、今回

のタンクを使って、視覚的に水が減っていくのを見て水の有限さを感じました。今回我々は被災地に「普段の生活ではないこと」を想定した完全装備で現地の生活に加わったのに、夜は寒さで何度も起きたし、食生活の偏り水周りのトラブルなどから、ストレスを感じたりもしました。自分がもし今から災害が起きて今夜から避難所生活となった場合、今回のような用意周到な防災用品はありませんし、大勢の避難者と共に生活しなければなりません。今回のように少人数ではないからシャワーができなかったり手を洗えないなど、水の使用がかなりシビアになることが予想できます。不衛生になってしまう生活で、食事の不足やストレス、免疫低下、感染症、災害関連死と向き合っていかなければならないことの辛さ、大変さを再認識することができました。今後は防災用品、備蓄の確認と被災時の今の住まいのハザードマップの確認を疎かにせず行きたいです。

体育学部スポーツ医科学科 2年 尾谷優（第1陣）

私は実際に1月1日実家に帰省しており能登半島地震を体験しました。北陸は地震が来ないことで有名な地方であり普段からの備えが薄いと思っています。そんななか学校での災害ボランティアがあると知りぜひ参加しようと思い参加しました。実際に現地にはいってみると震災から1か月半が経っているとは思えないくらい復興が進んでおらず、水も断水した状態でした。また被災地の方々は毎日の復興作業でとても疲れているようにも感じました。そんななか自分たちの活動で少しでも被災地に元気を与えられるように活動しました。

第一陣では七尾校の復興作業を中心に自分たちで知恵を出し合い協力して仕事をしていきました。特に印象に残っているのは2日目のボランティアセンターに行きゴミの集積場の荷下ろし、仕分け作業をしたことです。まだ使えるのではないかと思うものや本当に捨てても大丈夫なものかと心配になることもありましたが、集積場に来る多くの人に10分前に自分たちが教わったことを伝えて誘導するということがあまり普段の生活をしている中では感じるものの出来ない経験となり『頼られている』ということをすごく感じるました。ありがたい言葉はすごく自分たちの活動をする活力となりました。

第三陣では1陣よりも多くの手がいたことから七尾市のボランティアさんに行き、自分たちで一軒一軒ニーズを聞きに周り、その集めた情報から現地の人とも相談をしながらどのお宅が緊急性が高いのかを判断してボランティアをしました。その中でも地震で車庫に積んであった土木が崩れ2ヶ月間愛車を外に出すことが出来なかった被災者宅で土木を1つ1つ手で運び出し車を脱出させることが出来た時の被災者さんの喜んだ姿は一生の忘れることのない経験となりました。

この第一陣、三陣の活動から自分たちにできていることはほんの少しかもしれませんが、少し勇気を出して行動することでこんなにも感謝され頼られるのだということを迷いました。この経験を活かして防災や災害ボランティアに対する関心をもっている人はそう多くないと思うので、今後の自分の進路などにも活かして行きたいと思いました。

法学部法律学科 2年 毛塚悠斗 (第1陣)

「協力」…出来ないだろうと思っていたレンガの地面の修繕や水の補充など、仲間同士で協力し、上手くできた。案外、複数人で行えば並大抵以上のことは出来るのではないかと思った。

「愛想」…活動全体を通して、コミュニケーション能力が必須だと感じた。国士館の学生同士でも半分以上が初対面だったり七尾市のボランティア活動でシャトルバスの中で隣になった方や軽トラで災害廃棄物を運んでくる方だったり、初対面で話す機会が多くあった。その中で、笑顔で元気に話すと、相手も笑ってくれてお互いに気持ちよく話せるということがあった。どんな人と話すときも、愛想よく話すと良い関係が築けると感じた。

体育学部スポーツ医科学科 1年 城条涼介 (第1陣)

1日目の午前は地震の影響で崩れた学校の図書館の本棚の解体と散らかった本をはじに寄せました。午後は、午前の続きをしプラスで別の場所である書庫中の整理（外に本を出し、テーマごとに仕分け、棚ふき）などをしました。

長年、使われてなかった、出されていなかった本が崩れてきたことによって、室内はホコリまみれでマスクをしていましたが、途中、目がかゆくなってきて鏡で見ると目が赤くなっていた事から室内ではゴーグルをつけた方が良いと感じました。

2日目の午前ボランティアセンターに行き、自分が出来そうなニーズを友人と選び、1軒目の依頼は2階にあるタンスを出しました。崩れたブロック塀とともに処理が主な内容で2軒目の依頼は自宅の2階、3階にある陶器類を1階に降ろす内容でした。午後は1日目の続きで書庫の整理をし、テーマごとに分けていた本を元の場所に返し書庫の仕事は完了しました。

人生初めてのボランティアセンターで実際に困っている方のニーズを限られた時間内にやることはとても苦労しましたが、1軒目も2軒目も他人から見たらもう使う事が出来ない物だったりしますが、それは元々大切に使われていた財産なんだと思い、1つ1つ慎重に運ぶことを心がけていました。

3日目の午前1日目の午前にやっていた続きとして、はじに寄せていた本を番号順に揃える作業をしました。午後も続きで本を番号順に揃える（007～1000）番程ある数をほぼまとめて残りは本棚がないとほとんど出来ないの図書館はほぼ完了しました。

1000番までの本があると途中から番号が抜けてしまうことがあり、それを1冊ずつ気にしていると、キリがないので残りは本棚が届いてから詰め作業がある陣に任せたいと思います。

4日目午前は学校の側溝に溜まって水を止めていた葉をかき出し水通りを良くした後に、例年の雨、雪で垂れ下がってしまっていた木の枝を切りました。午後は地震により隆起した敷地内の地面のコンクリートを平らにする為にコンクリートブロックを1回出して盛り上がっている土を出して平らにしてからはめる作業をし、正面玄関前とその隣のスロープ前は完了しました。

最終日が終わり始めはどこか被災地に行きどのような場所でどのような作業をするのかという自己満足的な気持ちで参加しましたが、いざ七尾校や災害ボランティアセンターで被害にあわれた方と接

しニーズをやることによって自分の達成感はもちろんのこと被災地の方の自律やなんとかしてこの現状を少しでも楽にさせてあげるという被災者を思いやる気持ちに変わっていった5日間でした。この経験は私が将来目指す消防士だけでなくこれから起きるとされている関東大震災や南海トラフ地震時に自分が被災しているかもしれませんが、その際にボランティアとして来てくださった方の気持ちをわかってあげられるようになっただけでも今回の災害ボランティア活動は実り大きいものになったと思いました。

- 第 2 陣 -

法学部 現代ビジネス法学科 3 年 大河内裕貴（第 2 陣）

私はボランティアが初めての参加でとても貴重な経験が出来ました。特に重要と思ったのがコミュニケーションでした。被災者の方とのコミュニケーションやボランティアの人々とのコミュニケーションを取ることを意識してこのボランティアに参加しました。被災者の方とのコミュニケーションでは、元気づけようと思っていましたが、逆に元気づけられました。ボランティアの人とのコミュニケーションは作業する上で危険なシーンもあり、ケガを起こさないようにコミュニケーションを取ることが重要ということがこのボランティアで学びました。一番大変だったのが、液状化の泥を片付ける作業でした。日本では災害がよく起きることをニュースなどで見ていて、こういった災害ボランティアをして少しでも被災地にこれからも積極的に参加して元気づけたいと思いました。

理工学部理工学科 3 年 水野匡（第 2 陣）

七尾駅に到着するまでは、実際の震災の影響を受けた地の様子を見たことはなかった。七尾駅に到着し駅の周りを見渡すと、信号の支柱が曲がっていたり、地面が隆起して割れている箇所が目立った。そのため、足元に気を付けて歩かなければ怪我をする可能性がある状態であった。七尾駅から国際医療福祉専門学校七尾校へ向かう際、付近の住宅には応急危険度判定の紙が貼られており、ほとんどが黄色い紙か赤い紙であった。中には既に大きく倒壊している家屋も見受けられた。到着初日はボランティア活動は無かったが、断水であり空調も無かったため、「これが実際に被災しているときの生活状況か。」と改めて過酷さを実感した。

2 日目の朝から活動を開始した。活動内容は NPO 団体の方と共に地域の住民の手助けを行いました。倒壊した塀ブロックの撤去や液状化現象によって側溝に詰まった泥の撤去、落下した瓦の撤去を行った。今回は学生の団体で活動し人数が多いため 1 つの現場の作業時間は 1 時間程度であったが、NPO の方々は大勢で活動はいないため実際の作業時間はもっと長いと考えられる。そのため、ボランティアの人数が足りていないことを実感し、今の被災地の課題であると感じた。行政の復興団体や現在活動しているボランティアの人数では復興が本格化するのにはまだ時間を要すると考えられる。

3 日目は七尾市のボランティアセンターの募集しているボランティアに参加した。このボランティアが主に一般のボランティアの方が参加する方法であり、集合場所の部屋には活動する地域の地図に現状や活動内容が沢山記載されており、現在の活動状況やこれから行う活動の詳細が細かく書いてあった。私たちが実際に活動した「仮置き場」では七尾市中の廃棄となった家具や家電製品、瓦や陶器を処理しやすく解体や「仮置き場」へ移行する作業を行った。ガラスの解体や家電製品の解体は危ない箇所があるため、手袋やゴーグルをする必要がある。また、近年の SDGs の影響で分別が細分化されており、家電製品の解体がとても大変だった。復興はまだほとんど始まっていないと実感した期間であった。これからは機会があれば災害ボランティアに参加して貢献したいと思った。

法学部現代ビジネス法学科 3年 新井勇大（第2陣）

このボランティアを通して学んだことがたくさんある。例えば、ボランティア自身が怪我などをしてしまうと返って被災者の負担になってしまうことだ。ボランティアに来てもらうのはありがたいけど怪我などをしてしまうと自分を責めてしまうことを初めて知った。

また被災地では、心が弱ってしまうため、被災者にとって心の負担にならないようにする事が大事だと学んだ。また、自分達の作業を見て、もう一度がんばろうと勇気をもらったとの言葉をもらった。微力ながらも自分のしたことが七尾市の方々の復興に向けた力になれたことに誇りを感じた。また、高齢者の方々がとても多く、災害ゴミの撤去作業が思うように進んでいないことを目の当たりにした。2ヶ月も経っているのにまだ、災害ゴミの撤去作業をしていることは初めてしることができたし、課題も目の当たりにした。

これからは高齢化社会となっていく中で、災害時における問題はたくさん出てくると思う。

瓦礫の撤去作業や、水汲み、食事面でも限られた中での食事などたくさんの課題があると感じた。また、実際に3日間と寝泊まりしてみて感じたことは、水のありがたさ、電気のありがたさなどを感じた。シャワーを浴びるのにも水を汲むことだったりトイレも衛生環境が決してよくなく、また寝る時にも寒い中で耐え凌ぐことは1日1日を生きるのにやっとだと感じた。また、みんなと協力することが大事だと感じた。1人ではとても生きていけないと感じた。また、作業をしてたくさんの方にありがとうの言葉をもらった。ありがとうの言葉はとても大きな力を生むなと感じた。ありがとうと言われて自分が役に立っていると実感することができ、こちらとしても充実感を感じありがとうという気持ちになった。とても人の温かさを感じることができた。私は、将来警察官を目指している。今回学んだありがとうの言葉の力、困っている人のために動くことの充実感を警察官になった時に思い出して人のために尽くせる人になりたい。今回は少ない時間だったが、とても充実した時間を過ごすことができた。今回一緒に来た友達と共に、数年後復興した七尾をまた訪れたい。

法学部現代ビジネス法学科 3年 佐々木翼（第2陣）

1日目、電車で移動した。金沢から七尾に行く電車で、外を見ると屋根にブルーシートを敷いてる家は何個もあった。七尾駅につき外で歩くと地面が割れていて歩きずらかった。国際医療福祉専門学校七尾校につき食堂の部屋にあるテントで寝た。

2日目、朝7時に起き顔を水で洗ったがとても冷たかった。お湯のありがたみに気づいた。

8時15分から活動を開始し、ボランティアの方たちと瓦礫の撤去や地面の補強など、また、家具や電化製品のゴミなどをまとめる作業を8時30～16時ごろまで行なった。被災地の方々の地震の影響によるゴミなどを集めているゴミ処理場に連れてってもらったのだが、そこにはものすごい量のゴミがあり驚いた。

また、ゴミ処理場までの送迎で家が半壊以上している家などがあり、能登半島地震の被害を直接見る経験ができた。

瓦礫を運ぶ作業を仲間でバケツリレーで行ったり、家具や電化製品を荷台に積む時どう積みばいい

か皆んなで考えたりと1人では行えない作業を皆んなで力を合わせて行うことができた。能登半島地震の被害からすれば自分たちの行なった復興作業はほんのわずかであるが、この日々の積み重ねがとても大切だと思う。

能登半島が復興する日はいつになるかわからないが、建物や街並みだけではなく、被災者の方々の心の中も復興できたらと思う。

また、シャワーのポンプが機能しなくなったのだが、皆んなでシャワーで出た水を捨てる作業を行い、暖かいシャワーを浴びることができた。

3日目、朝8時30頃にボランティアセンターに行きボランティア内容を説明された。自分たちは仮置き場という場所に行き住民から預かったゴミを分別する作業を行った。とても細かい作業だったのですが皆んなで声を掛け合って分別を行った。普段使わない工具を使ったり、トラックと一緒に乗り仮置き場までも一緒に行く経験ができた。仮置き場に行った際ある老夫婦がおり、その方達は地震の影響で壊れてしまった家の家具などを車に沢山詰めて来た。しかし多くの家具が分別されておらずそのまんまの状態に来ていた為、その方達は家具を仮置き場に置くことができず返却されていた。腰が悪い老夫婦が、家具を細かく分別することはとても大変だと思いその為に我々のようなボランティアの人が必要とされているのだと実感した。能登半島でおこった地震は誰も望んでなく、その老夫婦の方達も地震が起きなければ家具を捨てる必要はなかったはずだ。そのような誰も悪くない自然による災害に困っている人達の力になれた経験ができてとても良かった。

4日目、朝7時45分から泊まらせていただいた国際医療福祉専門学校の後片付けや掃除を行った。自分はその日の夜にシャワーを浴びる人たちの為に水汲みの作業を担当した。綺麗な水を保管している貯水タンクから長いホースで別の保管するタンクに水を流す作業がとても体力が必要であり、疲れた。能登半島地震での影響でお風呂に入るたの過酷さや、自分の家で流れるお湯が当たり前な存在ではないことに気付かされた。また、毎回のご飯がお湯を入れて食べるアルファーマであることや、就寝の際はテントの中で寝袋に入り睡眠を取ること、そして作業で疲れた体を流す為に、貯水タンクから水を運び浴びる3分間のシャワーなど全てが初めての経験だった。復興のためのボランティアや被災地の方達の暮らし方などこの3泊4日間は全て自分自身の成長につながるととても良い機会だった。この経験を私生活で活かしていきたい。

法学部現代ビジネス法学科 3年 小野航歩（第2陣）

私は初めて災害ボランティアに参加しました。

きっかけは、防災士の資格を取得していて、一度は災害ボランティアに参加してみたいと思ったからです。

まだ断水をしていたため、水が貴重なので、初日はお風呂に入れませんでした。けど、災害を受けた人たちの話を聞いて、3.4日お風呂に入れてない人は沢山いたので入れることが当たり前ではないということを実感しました。

活動日1日目は、午前中にブロックの後片付けや、液状化により出た泥の撤去を行いました。ブロッ

クも両手でしっかりと支えないと手の怪我や、重くて落としてしまう可能性がありました。午後は、トラックでゴミ捨て場に行き、その後は、近所を散歩して、困っている人がいるか一軒一軒声をかけていきました。

1日目の作業を通して、一つ一つの作業をみんなでこなせば早く終わるが、被災した方々はこれを1人、2人で行っていることを知り、とても大変さを知ることができました。さらに、声をかけて回っている時に、自分たちが被災をして大変の中、私達に対してとても優しく接してくれ、手土産までいただきました。応援もしていただき、暖かく迎え入れてくれてすごく嬉しかったです。トラックの中でお話した際に、もっと多くのことに自発的に挑戦してほしいと言われたことがとても印象に残りました。ボランティアは自発的に参加して、自ら多くの人を助けることができる。1人でも多くの人助けをできるようにさらに頑張ろうと思いました。

2日目は、仮置き場というところでゴミの分別や解体をした。その中で2回ほど、トラックに乗りゴミ捨て場に行く作業をした。ブロック塀の積み降ろし作業はとても腰にきてきつかったです。移動中に多くのボランティアの方々とお話をすることができてとても貴重な経験ができました。一つエピソードして、ボランティアセンターのトランシーバーをきいていたのですが、ボランティア同士でその日の作業の最後にお礼をいい合っているところがとても印象に残っています。「短い間ですが、みんなと出会えて作業できたことがとても嬉しく、楽しかったです」という言葉にとっても感動しました。最後にみんなが「本当にありがとう」とすごく強調して言っているところがボランティアしにきて良かったってとても思いました。

短い時間の中、同じ目的を持つボランティア同士でとても仲良くなれて、本当にすごいいい経験ができたと思っています。

作業としては二日間、このような貴重な経験を活かしてこれからの自分自身の成長に繋げて行きたいと思いました。災害が起きることはよくないですが、また機会があったら参加したいと思います。ありがとうございました。

政経学部経済学科 3年 遠入綾杜（第2陣）

1日目 NPO の方達との作業

2月29日の活動では、NPOの方と共同で地域の方々の家のコンクリートブロックや瓦、瓦礫といったものをトラックに積みこむ作業や住民の方々の家に訪問し現在の困りごとなどの有無を聞き込みに行った。

瓦礫の撤去ではまず、重量がありなかなか大変な作業であった。これを何回も何回もルーティン化してやっていると身体への負担はとてつもない。又、コンクリートブロックの中から鉄が飛び出たりと、大小問わず危険は常につきまといっていると感じた。作業をしていく中で、共に活動している国土館の学生や医療学校の生徒、NPOの方々とも仲良くなっていき、やっていて楽しいという感情も生まれた。作業が一つ一つ終わるたびに、住民の方から「ありがとう」と深くお礼をしてくださるのが力になっているのだなと実感する場面であった。

2日目ボランティアセンターでの活動

3月1日の活動では、ボランティアセンターが主となり、時間や作業場所等の計画を細く立てて行った。「仮置き場」と言われる「仮置き場」のそのまた仮という場所で災害ごみの分別(11種類)を仕分け、仮置き場に持って行くという作業をした。私は、ガラス・陶器・瓦という中でも一番危険な物の撤去の担当となった。次々ともものが運ばれていく中で、手が空いたら他の場所の手伝いに行ったりと、全員が視野を広げ活動している姿が見られた。1日目よりもより能動的になったと自分自身が思うし、周りとのコミュニケーションもとれていたと思う。

生活では、とにかく水の自由がないためトイレにしてもシャワーにしても、歯磨きにしても本当に無駄のないように心がけた。しかし、ストレスが溜まるということもなく、活動を終えることができた。寝るテントでは、思った以上に暖かく、狭いのはあるが、一緒に寝た相方の先輩がすごく良い方ですぐ仲良くなれたため、生活しにくいとかはなかった。1つ、枕がないと頭が痛く、寝れないため、毛布等を利用し、枕代わりにするとすごく寝れることを知った。

全体を通して、作業をするたびに、ここは災害現場のごく一部で今やっている事はためになっているのか？ 復興の力になっているのか？ と正直感じる場面はあった。しかし、周りからの感謝の気持ちや「今日ここまで進むとは思わなかった！皆さんのおかげです！」といった嬉しい言葉を耳にすると、よりやりがいを感じた。塵も積もれば山となるのように、小さいことを1つ1つやっていけば必ず大きく復興の形となるのだなと感じた。この思いを忘れずにまた活動していきたいと思った。

このボランティア活動で様々な面で良い経験をしたと思う。この活動したことを忘れずに、自分のこれからに生かしていきたいし、ここで終わるのではなく、ここからさらに自分にできることを探し、何かためになることをしていく、それ全てを含み災害ボランティアなのだと感じた。

理工学部基礎理学系 2年 杉崎 文哉 (第2陣)

1日目金沢駅の周辺を散策してその後七尾まで鈍行で90分程度かけて向かった。

その間金沢市でも営業停止をしているお店が多くあったり金沢城に関しては立ち入り禁止の区画があったりと被害があるのが見られた。

七尾市に着いても倒壊した建物が見られたり、信号機が大きく傾いていたりと目に見える普通じゃないを感じることに恐怖感が少し芽生えた。

ただその中でも学校やお店等は営業が再開されていて安心感を覚える一方七尾駅のドンキホーテの中を覗いた際に一番くじの棚の景品がぐちゃぐちゃになっているのを見て、普通に見えてもやっぱり普通じゃないという状況に不思議な感覚を覚えました。

また、国際医療福祉専門学校に到着してからは他のメンバーとも合流でき、男14人の集団であり、女がいないことである程度は共同生活をする上での気遣いを緩和することができそうだと安心していった。

法学部法律学科 2年 町田遥翔（第2陣）

活動初日はNPO 法人の方のご協力のもと家庭の粗大ごみや、家の前に溜まってしまった土砂、壊れたレンガブロック、落ちてきた屋根の瓦などの回収作業に参加しました。私は全員が初めましてでしたが、NPO の職員の方をはじめとし現地の方や学生とともに協力し作業を行い、昼食をとるなかでコミュニケーションの大事さを学びました。実際に活動を行った後、お店の店主さんからお礼の言葉をいただき、こんな自分でも皆さんのお役に立てるのだと実感しました。ただ、地域の御宅に御用聞きをさせていただいた際にはご自宅の中が荒れてしまっていて片付いていない御宅や1階の部分がつぶれてしまったままの御宅も見させていただきました。勝手な想像でもうほとんど片付けが済み、ほとんどの方が元通りの生活が送れていると考えてしまっていたが故に現実を痛感しました。だからこそ、これからたくさんの方の手助けが必要であり復旧はもちろんのこと、復興にはさらに多くの時間と労力が必要だと考えさせられました。

2日目の活動では災害ボランティアに参加し、災害ボランティアセンターで説明を受けた後、各家庭から出た粗大ごみ等を仮置き場で十数種類に分別し仮置き場へ持っていくということをさせていただきました。トラックが運んできたたくさんの積み荷を降ろしたあと分別し違うトラックに寄せ送るという作業の繰り返しでした。実際に仮置き場へ行かせていただいた際には、大きなグラウンドいっぱいにそれぞれたくさんの土砂や毛布、木材などが山積みになっていました。一緒に作業をさせていただいた皆さんとお話をさせていただき大きな学びを得ることができました。それは、ボランティアは難しいことだけではないということです。私にとってボランティアとういことが何か資格が必要で、何か技術が必要で難しいことだと考えていました。しかし、実際には被災地の皆さんにお話を伺うことが誰かの助けにつながったり、重いものを運ぶことを手伝ったりすることも誰かの助けになると学ぶことができました。

今回の活動を通じて、これからも自分のできるボランティアに参加し、誰かのお役に立てるよう活動していきたいと考えました。

政経学部経済学科 2年 亀山瑠加（第2陣）

初め、友人に誘われたのと力仕事得意なことから手助けになりたいという気持ちで行ったが、活動した2日とも自分の思っていた通りの力仕事を多くすることができた。また、生活の中で最低限の物で暮らす環境が自身にとってとても良い経験になった。

政経学部経済学科 1年 保科風人（第2陣）

私は今回のボランティア活動を通して学んだことが三つありました。

まず一つ目は、被災地の現状についてです。二か月が経過しようという中で、未だに断水や仮設ごみ置き場などの問題に悩まされているという現状を目の当たりにしました。活動初日に伺った中華料理屋の山久さんは、水さえ通れば営業を再開できるのにと嘆かれていました。他にもボランティアを運営されていた今井さんと話した中で、仮設ごみ置き場のルールが厳しいことや、効率の悪さが長い

待ち時間を生んでしまっているという話がありました。私は今回の活動では数日しか滞在しませんが、それでもトイレや風呂などで不便に感じることは多々あり、現地の方たちは毎日過ごすだけでも手一杯な状況なのだとことを実感しました。

二つ目は復旧・復興の大変さについてです。防災リーダー養成論の講義で学んだことで、今のマイナスの状況からゼロに戻すまでが復旧。そこから発展させていくのが復興というものがありました。しかし、今井さんにも伺ったように建造物や道等を元に戻すだけでも四年はかかり、それだけでなく被災者への物的援助や心のケアも考えるとキリがなく、これらを考えると何十年という時間がかかるという大変かつ難しいことなんだとはっきり分かりました。

最後にボランティア活動のやりがいについてです。ボランティアは自分に金銭的な利益が出るものではありません。それは誰もが知っていることですが、それでもやるのは、人を思う気持ちだけなのだろうかと疑問に思っていました。しかし、私は今回の活動で、確かにその気持ちが大きいとしても、それ以上に喜んでくれる人がいる。感謝してくれる人がいて、こんな自分でも人のために出来ることがあると分かることこそが一番のやりがいなのではないかと思いました。私自身、現地の方々に感謝していただいたことが今でも印象に残っており、やりがいを感じることができました。

以上より今回私は、人のためを思っている行動はもちろん、規律を守っている行動や臨機応変に動くことなど、これから大いに役立つことを学べたと思える経験を得られました。

体育学部スポーツ医科学科 1年 坂田大馳（第2陣）

初めてボランティアに参加してまず最初に感じたことは、想像以上に被災地は過酷だったということだった。断水してシャワーもまともに浴びれなかったり飲料水の確保が難しかったりしたうえで、暖房が使えず極寒の中生活することになったりと今まで当たり前に生きていたのが、実はすごくありがたいことだと気づかされた。また生活面だけでなく、被災地の光景にも言葉を失った。ほとんどの建物の瓦が壊れ、屋根にブルーシートが敷かれており、ブロック塀もたおれ、中には全壊している建物もあり、これが地震の脅威かと驚かされた。ボランティア活動を通して感じたことは、ブロック1つ、瓦1つ運ぶにしても想像以上の労力が必要だということを知った。これを高齢者の住人だけでやるのはとても困難で、このような状態が能登半島全体で起きており、まだまだ復旧まで途方もないと知った。また今回の地震は、活動中に他のボランティアの方にほとんど会わないほどボランティアの数が少なく、現地の方とお話した時も思うように復旧が進まないとおっしゃっていて、そこが今回の災害の一番の課題だなと感じた。また、活動の中で「活動中は黙々と作業するのではなく、にぎやかにやったほうが被災者もお願いしてよかったと思ってもらえる」とアドバイスをされ、災害ボランティアとは復旧のための瓦礫撤去などの活動だけではなく、被災者への心遣いや明るいコミュニケーションも大切だと学んだ。

体育学部スポーツ医科学科 1年 石井寿真（第2陣）

1日目

移動だけだったが、電車から見た風景は、多くの家の屋根にブルーシートがかけてあって、普段見慣れない光景だったため、非常に衝撃的だった。学校の食堂にテントを張って寝てみた感想はとても寒かったし、床が硬くて深夜に何回も目が覚めてしまった。

2日目

慣れない環境で寝たため、一日目の移動の疲れがとれなかった。この日の活動はごみの回収と、ブロック・瓦の回収、側溝や道の泥の撤去をした。数件の家だけでも、軽トラを何往復もさせないといけなかったことにとても大変だと思った。ただ、現地の方から「ありがとう」などの感謝の言葉を送ってもらい、ボランティアに参加してよかったなと思ったし、これからも頑張ろうと思った。

3日目

この日は七尾市のボランティアセンターへ行っての活動だった。活動の内容はごみの仮置き場での仕分け作業と搬出だった。この日だけでも普段見られない量の木材だったり、家電だったり、いろいろなものが運ばれてきて、こんなにも多くの被害が出ているのだなと思った。その中でも、家電や家具などの鉄とプラ、木材の分別がとても大変だった。

4日目

最終日の朝、雪が降ったり止んだりを繰り返していて、この時期の災害は環境的にも大変だと思った。

このボランティアを通して、ボランティアの大変さや、やりがいを感じたし、現地に行くことでいろいろなことを経験することができてよかった。この経験をさらに活かしていきたいと思う。

- 第3陣 -

政経学部政治行政学科 3年 石田和也（第3陣）

災害ボランティアには記憶している中では少なくとも中学生の頃には関心がありその意欲は毎年起る国内での災害で増していったように思う。しかしながら私の固定概念として、災害ボランティアへ個人で行くには、交通手段と宿泊場所、食事や個人装備に至るまで全てを自己完結する必要があると考えハードルが高く災害ボランティアに参加することはできていなかった。また、現地での活動は家財の撤去など重たいものを運ぶ仕事で肉体労働に耐えられるかも不安要素であった。しかしながら婚外の七尾市での活動を通じ実際の災害ボランティアの像を見ることが良い意味で理解することができた。

活動は2日に分かれ1日目は民家と倉庫の建物内全てのものの搬出。2日目は現地で活動する支援団体のクレープの炊き出し支援を行った。1日目は以前からイメージのある肉体労働出会ったが、落ち着いて考えてみれば自分の部屋にある中で持ち上げられないほどの家財はそう多くはない。実際活動した中でも男女混ざっての活動であったが全ての人員に仕事があり想定していたより肉体労働でなかった。家財撤去で思ったことは、頭数がとにかく重要であり高齢者だけでの片付けは限りなく不可であるということだ。ボランティアの力は絶大であり、被災地ではコントロールできる限りボランティアの数は多い方がよく健康な人で意欲があればぜひ参加するべきであると感じた。

二日目の炊き出しは、被災者と話せる機会が多く作れると思い挙手制であったため志望した。被災者の声として水が出なことの厳しさ。ご飯がまともに調理できない大変さや暖を取ることの大変さ、ボランティアにきた人への感謝の気持ちはメディアを通じるより多くの感じるものがあり、今後の自分自身の防災意識を変えるものであったと確信している。

活動した七尾市石崎地区はまだ水が通水しておらず奨学生は仮設トイレを使用していたが、そこには我々のような他所者もいてストレスをかけ心が痛くなることや学校前の通りの住宅は多くが住めないような門構えをしていた。継続的な支援こそ災害時には必要であると再認識した。より多くのことを書き残したいが最後に私がこの活動を通じて感じた防災意識と仲間とのつながり、主体性はこの上ない実りあるものであると確信している。

体育学部体育学科 3年 紺谷龍ノ介（第3陣）

まずはじめに、携帯やニュース、テレビなどで見る現地の様子と実際に現地に行って現場を見て、活動するのとでは大きく様々なことが異なると感じました。2024年のはじめに発生した地震は誰もが注目したでしょう。メディアでは何度も取り上げられていました。

ですが最近は石川県のニュースを見ることはほぼなくなり、今の様子を知っている人はほとんどいないと思います。注目されることも少なくなってしまうのも悲しいですが、現状です。

ボランティアに行くことで現状を知ることができ、あたり前ですが、少し現地の人の力にもなれます。

「ボランティアはさせてもらう」という言葉も心に残りました。

すべて私たちでするのではなく、手助けをする気持ちが大切だと学びました。

案件をしに行くのではなく、実際にお家を訪問して困っていることを聞き、それをさせてもらう体制はとても良いと感じ、より現地の方々との関りを深くすることができたと思いました。

私は、冷蔵庫の運び出しからしました。「他に困られていることがあればおっしゃって下さい！」と言った時、岩崎さん（そのお宅の方）は「悪いからな」と口にされ、やはりボランティアでも現地の方は頼みづらいんだなと感じました。「本当に少しのことでも言って下さい！ 助け合いなので甘えて下さい！」と声をかけると、「車が木材で出せてなくて」と本音を言って下さりました。

今でも車が倉庫から出た時の岩崎さんの笑顔は忘れられません。少しは力になれた気がして心の底から嬉しかったです。

作業をする上で初対面だった国土の学生とも絆が深まり、効率がどんどん良くなり、どんどん楽しくなっていました。

友達も何人も来て、繋がりも増え、ボランティアは自分たち自身にも成長するだけでなく良い要素が本当に多くあるんだと感じました。

この用紙に収まらないほど感じたこと、嬉しく思ったこと、感動したことなどたくさんあります。ボランティアの経験をこれからの活かし、今日で最後にしないと心から言えます。本当にありがとうございました。「楽しむ」はボランティアではおかしい表現ですが、心から私は楽しかったです。

理工学部理工学科 3年 井上翼（第3陣）

今回の災害ボランティアを通して多くのことを学ぶことができ、とても良い経験になったと感じています。

まず、自分達のあたりまえのように使っている水の大切さに気づきました。

普段は蛇口をひねれば出る水が出ず、飲み水を自分たちで確保しなければならなく、トイレやお風呂などで使用する水も、雨の降る中、自分達で用意しました。また、被災者の方々と話す中で、人との繋がり大切さも改めて感じさせられました。ご近所との交流があったからこそ、現在なんとかなっていると話す方が多くいました。これらのことから、日々のあたりまえに感謝し、人との繋がりを大切に生きていこうと思います。

法学部法律学科 4年 小松由宜（第3陣）

今回のボランティアを通して、相手の立場になって考えることの重要性を改めて学んだ。具体的には、活動一日目の午前中に被災者の方のお宅を一軒ごと訪問してボランティアのニーズを収集する活動を行った際に、実際にボランティアが必要だと判断し、書類に記載をお願いする場面において、依頼内容を記入する欄にどのような記載を行えばよいかという質問をされた際に、散乱した飲用水の空いたタンクが見えたためごみの片づけと記載するように助言を行ったが、後々考えてみるとその中には依頼者の方の大切な物品が含まれていた可能性もあったのではと考え反省した。この場合、ごみな

どの直接的な表現は避け、写真を撮らせてもらえたため、散乱した物品の片づけなどといったように自分が依頼者であったら、あまりしてほしくない表現ではなく思いやりをもった言葉の選択をすべきであったと考える。以上のように、ボランティアをする上ではまず第一に相手の立場になって自分の言動が正しいものであるかを常々冷静に考えながら行動することが重要であるということを学んだ。

法学部法律学科 3学 伊藤渚々翔（第3陣）

2日目は、家財の搬出と貴重品の仕分け、家の掃除をしました。ほとんどの方が避難所生活をしているため人気が無く、家も壊れており少し怖さを感じました。七尾市の方々の大切にしている家財や貴重品を見て地震によって全ての生活が崩れてしまうことは一瞬で、当たり前生活を大切に生きなければならないと感じました。出会った方々は今の生活は不安でいっぱいだけど前向きに生き、後世に残さなければならないと笑顔で伝えてくれました。私はその姿を見て強い人だな、カッコいい人だなと思いました。そのためボランティアに来た人が崩れたものを見て悲しがるのは違うと気が付きしました。元気な姿で現地の方々に勇気付けなければならないと思いました。

3日目は、家財の搬出、コンクリートブロックの搬出、各家に聞き取り調査をしました。1番心に残ったのは聞き取り調査です。各お宅に困ってることなどを伺い、対応をしました。中には困っているのに相談が出来ない方やボランティアじゃ頼りないと思断る方もいました。頼りがいがあると感じてもらうためには寄り添う気持ちを伝えることや気遣いをすることが必要だと感じ、自分はまだそれがしっかり出来ていないと思いました。聞き取り調査では反省点が多かったですが、自主性を身に付けることが出来たとも思います。普段の生活では知らない人に声を掛けることはほとんどありませんし、声を掛けるとしても緊張してしまいます。ですが聞き取り調査の経験でリーダーだけに頼るのではなく自分から動くことの大切さを学びました。人をしっかりと見てその人に合った対応をするのは難しいと思う反面、今後の日常生活で役に立てたいと思いました。

ボランティアに参加する前は少し緩い生活を送っていましたが、ボランティアに参加して、困っている人に手を差し伸べる勇気や人と人との協力して生きることの大切さを学び、気が引き締まりました。今回の地震は能登半島でしたが、次はどこで起こるか分からないし次は自分が被災者側になるかもしれません。誰しも1人では生きていけません。そのような毎日だからこそ私は様々な人に寄り添い協力できる人間になりたいと思いました。

法学部法律学科 3年 細田大地（第3陣）

私は石川県七尾市の災害ボランティアに3月4日から3泊4日で参加した。私のこのボランティアでの活動内容は、主に瓦礫の分別作業、家財の搬出、室内の壁を剥がす、木材の筆筒等を解体、聞きこみ調査、ブロック塀の解体であった。この活動を通して感じたこと、学べたことは非常に多かった。その中でもいくつか絞って、感じたことと学べたことを述べていく。

まず私が強く感じたことは、感謝されることに対してやりがいを感じたことである。精神的にも肉体的にも辛かったが、やり切れたのは人のためだという思いと、そこから地域の方々から感謝されや

りがいに繋がったからであると思う。そこで私は人のために働くことの素晴らしさを実感した。この先また災害が起き、私も参加できる時があれば参加したい。そこで大切にしたいのは、なぜボランティアに参加しようと思ったのかという気持ちを忘れずに参加したいと思う。

次に仲間の大切さである。生活面に置いて日常と比較するとかなり厳しかったが、互いに声を掛け支えあえたことで乗り切ることができたと思う。またグループごとに活動し、様々な学年の学生もいた。そうした中で、私より経験豊富な学生から技術面や声の掛け方を学ぶことも出来た。仲間から学ぶことも沢山あったと思う。

最後に思いやりについてである。私たちと一緒に活動してくれた大人の方や、被災者の方から体調は大丈夫？でや、喉乾いてない？などの気遣いがあった。私はこの活動中、自分のことでいっぱいであった。だが一緒に活動してくれた大人の方や被災者の方は、私たち以上に辛いはずなのに私たちを気遣ってくれた。私はそんな大人の方を見て、とても強いなと感じた。自分が辛くても、相手を思いやる気持ちは忘れないことを学べたと思う。

私が行った活動は、正直誰でも出来る仕事であったと思う。だが、それでも感謝されたりしたことからも誰かの役に少しは立っただとを感じる。また前述したように誰でも出来る仕事内容であったが、自分に出来ることは限界がありそれぞれに役割があると思う。自分に与えられた仕事に対して全力で取り組むことが復興の1歩1歩に繋がっていくのだと思う。私一人の力は極僅かであったが、復興に向けて少しは役に立てたことは嬉しく感じる。私が人に役に立てやりがいを感じたと同時に、自分が気付かされ学べることも多く貴重な経験であった。

体育学部スポーツ医科学科 2年 大塚日向登（第3陣）

活動内容は家財の運搬、解体、ブロック塀の解体などを行いました。このような作業を行うなかで自分1人が頑張るのではなくてチームのみんなと協力し合うことでより効率的に作業を進めることができると感じました。また、被災者の方に求められている活動を行うためには被災者とコミュニケーションをとることが大切だと学ぶことができたので今度被災地に行く機会があれば積極的にコミュニケーションをとっていきたいと思います。

体育学部スポーツ医科学科 2年 山崎桜羽（第3陣）

私は実際に被災地に行き活動したことで、話を聞きに行くことの重要性・水や電気が使えることのありがたみを改めて実感しました。

自分たちで生活する上で必要な水を汲みに行かなければならないため、必要最低限の水しか使うことが出来ず、お風呂も毎日入れる訳ではなく、入れても普段のようにゆっくりと入れるわけではありませんでした。被災地では、そんな生活に慣れないといけない状況になっているのを考えると、東京では当たり前のように使えてしまう水や電気を大切に使うべきなのではないと感じました。

私たちの班では活動1日目に聞き取り調査を行いました。家族が多くお子さんもいるため生活用水が足りないといった問題や、木材や棚に入っていたものが崩れ車庫から車が出せなくなってしまう

たという問題があることが分かりました。1日目の午後から2日目で解決に向け、水をご自宅まで届けたり、班員全員で分担して木材や物をどかしたり、被災者の方々の力に少しでもなれるように全力を尽くしました。車庫から車を出せた瞬間に被災者の方から頂いた笑顔とありがとうという言葉はものすごく嬉しかったです。私たちが災害ボランティアとして活動したことで、被災者の方の力になることができたんだと、やりがい強く実感することができました。今回私たちが出来たことはまだほんの1部でしかないので、少しでも多くの方の力になれるように今後も積極的にボランティアに参加したいと考えています。

体育学部スポーツ医科学科 2年 倉科幸太郎（第3陣）

～能登半島地震ボランティアを終えて～

私が今回、このボランティア活動に参加した理由は2つある。

1つは、被災された方々の力になりたいと考えたからだ。

SNS やニュースを見ているだけでは気持ちが落ち付かず、自分も現地に入り、自分の目で確かめたいと強く思った。

実際に建物が激しく崩れていたり、傾いているのを見て揺れのすごさは容易に想像できた。さらには現地の方々とお話したり表情を見ていても、災害といういつどこで起きてもおかしくない恐怖に怯えながら生きていることがひしひしと伝わってきた。現地にボランティア活動に入れて本当に良かった。

2つ目は千葉県茂原市でのボランティア活動の悔しさがあったからだ。

水害により家のほとんどが浸水した1人世帯のお宅の泥や家屋を外に運び出すという作業だった。蒸し暑く屋内ということがあり汗が止まらなかった。

2日間参加を予定していたが体調が悪く1日目でのリタイアをよぎなくされた。とても悔しかった。ボランティア活動を甘くみていたのだ。

次回は必ず最後までやり切る、そう心に誓い今回のボランティア参加に至った。4日間体調を崩すことなくやり遂げられたことは大きな自信になった。

今回のボランティアの経験を生かし、Japan Heart での支援も一生懸命努力する。

体育学部スポーツ医科学科 2年 中村文太（第3陣）

令和6年能登半島地震のボランティアに参加させていただきありがとうございます。それと共に被災された方に深くお見舞い申し上げます。まず初めに、2日間で行って来た内容から説明します。

1日目は、午前中「2階からの家財搬出」と、「運ばれて来た家財の解体」、午後は「ブロック塀の解体」でした。

2日目は、前の日同様午前中から午後にかけて「ブロック塀の解体」と、午後後半では、「家財搬出」を行いました。

今回参加させていただき自分たちが今できている当たり前は、本当は当たり前じゃないんだと1

番感じました。この気持ちはやっぱり来てみないとわからないかなと思います。

今回たまたま起こったのが能登地方であって、もしかしたら自分たちが同じような被害を受けていたかもしれないと考えるといまから何か行動起こさなきゃなとも思いました。それと同時に当たり前に住む場所があって、当たり前にご飯が食べれて、当たり前で家族や友達とお話できて、当たり前で生きれるってありがたいことだなと。こういうふうにも思いました。1人じゃできないことを、自分たちの力で何か手伝ってあげて「ありがとう。」と笑顔を見せてくれたおばあちゃんの顔は忘れられないです。

自分たちは、3泊4日でしたが、現地の方々は先が見えない中これからも生活していきます。できるならもっと長くいて、どんな小さな要望でも聞きたかったし、もっとお話を聞き少しでもリフレッシュになる時間を作ってあげたかった思いもあります。

この経験を得た自分が今できること、これからしなくちゃいけないことは、立派な人間になることかなと思います。どんな些細なことにも感謝の気持ちで感じ取る心と、この経験を次に生かすことができれば今回関わっていただいた七尾市の人が喜ぶんじゃないかなと思います。

これからも強く生きます。

体育学部スポーツ医科学科 2年 原希実（第3陣）

今回ボランティアをしてみて、まずはこの4日間を通して避難所での生活の大変さを感じられたと思う。寝る場所はとても寒いし、シャワーも限られた時間で入って、温かいご飯も当たり前で食べられない、非日常の生活は4日間だけでも大変だった。実際の避難場所はよりプライバシーもないし、トイレは水が流れなかったり、ずっとお風呂に入れない状態で今まではニュースで見てるだけで辛そうだな、と人ごとのように思っていたが、実際に似たような環境を体験してみると水や食料の備蓄って大切なんだな、どうやったら避難所でもっと快適に生活できるのだろう、ともっと現実的に地震が起きた時何が困って何が必要になるかが明確に考えられるようになった。2日目、3日目の活動では、家から使わない家具を搬出したり、木製の家具を分解したり、家を回って聞き取り調査をした。一軒目に入った家は、床がもう抜けている状態で、家具も倒れていたりしていた。私は、地震で散らかった部屋の隅に汚れたざるのようなものを見つけて、これはどうしますかと住民の方に聞くと、その人は、そのざるですずっと梅を干していて、他の住民の人にあげたりしていたと笑顔で言い、それは捨てないでと言われた。なのでここではどんなものもその人の思い出があって、雑に扱ったり勝手に捨てたり絶対してはいけないなと感じた。また、実際に被災者と接してみて、とても明るく私たちに話しかけてくれたり本当に助かった、有難う、という言葉を書いてくださって、とても嬉しかった。その反面、自分はどのような言葉をかければいいのかわからず傾聴することしか出来ず難しかった。

最後に、この4日間で一番感じたのは、ボランティアは気遣いの積み重ねなのだなと思った。被災者の方だけでなく、一緒に活動する皆んなが心地よく、怪我をせず元気に活動できるように自分ができることを率先してやるのが大切だなと思った。これは、ボランティアに限らず日常の生活でも意識できることだと思う。また七尾校の学生や他学部の学生と交流できたことも楽しかった。また災害ボ

ランティアに参加したいと思った。泊まらせてくださった七尾校には感謝の気持ちでいっぱいだ。

体育学部スポーツ医科学科 2年 川上泰矢（第3陣）

今回が初めての災害ボランティア派遣でした。

現地の人の力になりたいという気持ちと、将来救命に関わる職業を目指す中で、気持ちのいい表現ではないですがひとつの経験を積みたいと考え応募しました。

このボランティアを通して最も感じ、心にとどめておこうと思ったのは「同情はできない」ということです。

私自身が被災したわけでもなく過去に同じ経験をしたわけでもないため正直被災者の方々の心情はわかりません。それぞれの立場、その時の感情、多くのことが交錯している中での震災。「気持ちがわかるわけがない」というのが本音です。

そんな中で派遣に行くことに少し怖さを感じていた自分もいます。何もわからない自分が行っていいのか、力になれるのか多くの不安を感じながら現地に到着し活動を始めました。

支援団体の方々のお力添えもありスムーズに活動が進む中で、わずかではありますが被災者の方々をお話しさせていただきました。当時の様子や震災後の生活、聞いた上でやはり「同情」なんてできないと改めて感じました。しかしだからこそ頑張らないといけないとも感じました。少しでも被災者の方々の役に立てるよう会話をしながら、任せられたこと以外にも必要なものや代わりにやってほしいことを聞き、自分たちでできる部分は行い、それ以外は後日引き継いでもらうなどして活動を行っていました。

またたったの数日ではありますが避難所を模した生活も経験し、震災が来るタイミングの季節により生活の困難さが変わることも身をもって体験しました。

3泊4日という短い時間ではありましたが非常に良い経験でした。周りの方々に支えられ生きているのだと改めて再確認しました。

また機会があれば参加し今回の経験を十二分に発揮したいと思います。

貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

P.S. 朝倉先生、間違い電話してごめんなさい。

えっちゃん、車牧場臭いの解決したいですなあ。

体育学部スポーツ医科学科 2年 浅島伶遼（第3陣）

災害ボランティアに参加してみて、まず驚いたのは被災地の現実を目の当たりにすることでした。メディアで見る情報とは異なり、実際に被災地に足を運ぶと、その状況の深刻さや被災者の方々の苦しみを直接目にすることができました。その中で、自分が何か手助けできることがあるのか、どうすれば助けが必要な方々に寄り添えるのか、ということを考える機会がありました。

参加した活動では、瓦礫の撤去、解体、被災された家の仕分けなどのさまざまな活動に携わりまし

た。その中で、被災地の方々からの温かい言葉や笑顔をもらったり、一緒に作業をすることでコミュニケーションを図ったりすることができました。その経験から、単純な作業や物資の提供だけでなく、被災者の方々とのコミュニケーションや共感が、彼らの心の支えになることを感じました。

また、ボランティア仲間との協力やチームワークも大切な経験でした。みんながそれぞれの力を合わせて、作業を進めていく中で今まで関わったことない学部、学科の生徒とコミュニケーションを取ることができました。そこでは新たな考え方や将来の目標に触れたことがとても刺激になりました。

参加後は、自分ができることは少ないかもしれないけれど、少しでも被災地の方々の役に立ちたいという気持ちが強くなりました。そのためにも、日頃から災害への備えやボランティア活動への参加を積極的に考えるようになりました。

また、このような貴重な体験をを学生のうちから経験できたことが何よりも一番の収穫であったと考えます。消防に入ることが目標でしたが、入るだけではなく、入った後に自分がどう活躍の場を広げていくか、とても考えさせれるボランティア活動であったと思います。

体育学部スポーツ医科学科 2年 尾谷優（第3陣）

私は実際に1月1日実家に帰省しており能登半島地震を体験しました。北陸は地震が来ないことで有名な地方であり普段からの備えが薄いと思っています。そんななか学校での災害ボランティアがあると知りぜひ参加しようと思い参加しました。実際に現地にはいってみると震災から1か月半が経っているとは思えないくらい復興が進んでおらず、水も断水した状態でした。また被災地の方々は毎日の復興作業でとても疲れているようにも感じました。そんななか自分たちの活動で少しでも被災地に元気を与えられるように活動しました。

第一陣では七尾校の復興作業を中心に自分たちで知恵を出し合い協力して仕事をしていきました。特に印象に残っているのは2日目のボランティアセンターに行きゴミの集積場の荷下ろし、仕分け作業をしたことです。まだ使えるのではないかと思うものや本当に捨てても大丈夫なものかと心配になることもありましたが、集積場に来る多くの人に10分前に自分たちが教わったことを伝えて誘導するということがあまり普段の生活をしている中では感じるものの出来ない経験となり『頼られている』ということを感じました。ありがたい言葉はすごく自分たちの活動をする活力となりました。

第三陣では1陣よりも多くの人手があったことから七尾市のボランティアさんに行き、自分たちで一軒一軒ニーズを聞きに周り、その集めた情報から現地の人とも相談をしながらどのお宅が緊急性が高いのかを判断してボランティアをしました。その中でも地震で車庫に積んであった土木が崩れ2ヶ月間愛車を外に出すことが出来なかった被災者宅で土木を1つ1つ手で運び出し車を脱出させることが出来た時の被災者さんの喜んだ姿は一生の忘れることのない経験となりました。

この第一陣、三陣の活動から自分たちにできていることはほんの少しかもしれませんが、少し勇気を出して行動することでこんなにも感謝され頼られるのだということを迷いました。この経験を活かして防災や災害ボランティアに対する関心をもっている人はそう多くないと思うので、今後の自分の

進路などにも活かして行きたいと思いました。

法学部現代ビジネス法学科 2年 佐藤隆登（第3陣）

私は4日間の活動を通して、多くの経験を得ることができました。ボランティア活動のやりがい、被災地の状況、断水の大変さなど多くのことを経験しました。活動が終了し、自宅に帰りトイレやシャワーを使いました。普段どうりの生活がどれだけありがたいものなのかを実感しました。2日目と3日目の活動を通して、家屋の荷物の運び出しや地域の方とお話しすることができました。地域の方とは実際の家庭内の状況や、物資の話をしました。お話をした方は、仕事場がつぶれて働けないと話していました。物資の話では、最近食料が不足してきて、孫におなか一杯食べさせてあげられないと話していました。今現在も被災し、苦しんでいる人が多いことを知りました。石川県のためになるような募金活動やボランティア活動を行っていき、少しでも日々の生活を取り戻せるように手伝っていきたいと思いました。

法学部現代ビジネス法学科 2年 小上晴幹（第3陣）

私は被災地でのボランティア活動は、初めてで不安もあった。ただ、日々流れてくるニュースなどを見て、自身が経験した常総市の水害を思い出し、少しでも石川県の力になりたいと考え参加した。

活動の内容は、倉庫の片付けや、聞き取り調査を行った。まず、倉庫の片付けでは、鉄、木材などおおまかに分別した。思い出のあるものや、貴重品は、住民に確認してから分別を行った。その際に、手袋を外してから触るなど、住民に対して些細な気遣いを行う事も重要なのだと感じた。また、災害支援のベテランの方々は、間違えて捨ててはいけないものが無いか再度確認したり、作業が終わったら住民が綺麗になったと感じるくらい掃除を行っていたので、2日目は私も行なった。さらに、ベテランの方は、私たちや住民などにも気遣いながら、常に周りを見て行動していたのだと感じた。そして、私が作業する上で、気をつけていたことが、重い物を持つ時は無理をせずに、協力して運んだり、バールで壊す作業などの際は、周囲に知らせてから行い、全員が怪我をしないように作業した。仮に、ボランティアが怪我をすれば、周囲の人にも迷惑がかかるだけではなく、力になれずに終わってしまう可能性もあるので、そこは気をつけた。また、聞き取り調査で町を歩くと数カ月前までは、多くの住民が、生活を送っていたとは思えないほど静かで、どこか寂しいと感じた。ただ、住民とお話しをすると、災害に屈せず、未来に向かって一步一步着実に進んでいく雰囲気を感じとれた。

私の想像以上にボランティアは過酷でしたが、住民とすれ違っただけでも「ありがとうございます」と声をかけてくださり、差し入れをくださり、逆に元気をもらって活動をする事ができた。また、現地に行かないと到底理解出来ない事も沢山あり、良い経験にもなった。

法学部現代ビジネス法学科 2年 臼井暁人（第3陣）

自分は今回が初めてのボランティア活動だったのですが、まずケガ無く終えることができて良かったと思っています。活動日の2日間、一緒に活動した大人の方たちのリーダーシップや些細な気遣い

といった部分が、ボランティア活動において大事でお手本にするべきだと感じたし、気遣いの部分に関しては帰ってからの日常生活にも活かせることだと思いました。また、自分の所属したグループは1日に2、3件の家のお手伝いをしましたが、全体の被害を考えると本当に微力な手伝いなのだと実感しました。さらに共同生活の大変さなど、やはり身をもって経験しなければ分からない気づきだったりを学ぶことができて、本当に学びの多い期間になりました。今回参加できて良かったです。ありがとうございました。

体育学部スポーツ医科学科 1年 中村駿太（第3陣）

私が七尾市を自分の目で見て、初めはボランティアが必要なように感じませんでした。テレビで見えるような倒壊した建物はなく、屋根がはがれている家があるだけで自分にできることはないと思っていました。

活動日初日は家から家具の運び出しをしました。家というよりは倉庫のようで、毛布や座布団、食器などが散乱してました。次の日はグロック塀の解体をしました。倒れ掛かった塀をドリルで破壊し、運ぶのはどちらも力のいる作業でした。二日間作業をして七尾市をもう一度よく見るとボランティアが必要な場所がそこら中にあることがわかったとともに、復興にはとても時間がかかることがわかりました。

また、七尾市での生活を通して被災者のお風呂に入れなかったりアルファ枚しか食べられない生活がどれだけつらいことなのかを身にしみて感じました。アトピー性皮膚炎をもっている人、精神的に疲れている人などそれぞれが持っている不安を考え対応していく必要があり、今回の体験を通して何が欲しくて何を準備したほうがいいのかがわかりました。

七尾市の災害ボランティアは私にとって自分の視野が広がる活動になりました。テレビを見てわかるものは少なく、実際に経験することでしかわからないことや感じられないことがありました。

体育学部スポーツ医科学科 1年 田村晃誠（第3陣）

今回のボランティア活動を通して、被災地の過酷さやボランティアが必要である理由を理解することができた。まず、自分たちは災害発生から2か月経過してから活動をしに行っていることもあり被災発生当初より過ごしやすい状況で生活ができた。しかし、自分は寒さで眠れないことや体や髪を洗えないことにとてもストレスを感じた。さらに、集団で体育館に寝るため睡眠時間のズレ、いびき等の影響でボランティア活動での疲れも十分に回復することはできなかったと思う。2日でかなりのストレスと疲れを感じた。被災者の方々はこの生活が2か月以上続いていること。また、自分たちの活動期間は2日でゴールが見えた状態の活動をしているが、被災者の方々はこの先のゴールが見えず不安な状態で活動していること。このことから、被災地は自分が考えていたよりも過酷な場所であることを実感できた。ボランティアが必要である理由も被災者のストレス、疲れ、不安等を少しでもなくすことができるということ。災害発生から2か月経過しているが多くの困っている人がまだいること。子供たちは学校が始まっていて楽しそうにしている様子があったが高齢の方や積極的に復興活動

を行っている大人にリラックスする場所、休む場所が十分にあるのかがわからないこと。被災地に行きこのことが頭に浮かびこういう状況を解決するためにも多くのボランティアが必要なのだと理解できた。

体育学部スポーツ医科学科 1年 渡辺竣太（第3陣）

私は3月4日～7日の4日間、石川県の災害ボランティアに参加しました。災害ボランティアへの参加は初めてだったので自分に何ができるか分からず不安もありましたが、周りの仲間と協力し、支援活動の他にも水汲み等の被災地での生活もやり切ることができました。

このボランティアを通じて、当たり前のできることの大切さや感謝を学びました。そしてボランティアは被災地の人々にとって希望であることを自覚し、次回参加する機会があればまた参加したいと感じました。

体育学部スポーツ医科学科 1年 上野陽色（第3陣）

まず最初に石川県金沢市に降り立ったが、七尾市比べると被害というものは少なかったと思う。電車で七尾市に移動するにつれて景色というものがガラリと変わり始めていました。駅のホームや歩道はひび割れしていてガタガタ。ゆっくりできるはずのトイレも仮設トイレだけあって居心地の良いものではなかったです。3か月以上この生活をしている被災者の気持ちを考えると休めるところがないな、と思ったのが第一印象でした。

生活面については、身に染みて感じたのは、水のありがたみです。

まだ電気は通っていたのでお湯が出たのが幸いでしたが、苦勞して給水した水が一晩でなくなってしまうのは凄く辛い現実でした。

食事はお湯が出るので麺類なども食べれたのでストレスなどは感じませんでした。

3陣の昼食が本当の被災地のご飯と考えると味変できるものや、味の濃いものなどがあると飽きずに食べられるのではないかなと考えました。

ボランティア活動としては、主に七尾校の片付け整理、地域住宅の家財の整理などを行いました。何事も準備が大切ということが再確認できました。特に重要と感じたのは、ゴーグルです。釘などを扱っていないにしろ、埃などから目を守るためにも大切と感じました。身体を動かすだけではなく、活動をストップさせ、耳を傾けることも大切であり、サロンの際は沢山の方とお話ができお互いのメンタルのケアにもなったのではないかなと思いました。

体育学部スポーツ医科学科 1年 田邊陽紀（第3陣）

3月4日（月）～3月7日（木）の4日間で私は多くのことを学びました。

震災から2ヶ月が経過していたためインフラはある程度復旧していたが、完全には戻っていなかった。暗く寒い夜はとても厳しく、なんとも言えない不安をずっと感じていました。今まで当たり前で電気やガスが使えていた事がどれだけありがたい事かを痛感しました。ですが、被災直後の方達は私

が感じた不安と比にならない程の恐怖と混乱があったと考えると恐ろしかったです。

活動内容としては活動の1日目が家財搬出、2日目がブロック塀の撤去、3日目はこれまでの活動拠点の整備を行いました。どれも力仕事で学生が1日かけてようやく終わるかどうか、といった大変な作業ばかりでした。特に、ブロック塀の撤去は工具を用いて行う作業だったので自分を含め学生も体力的な負担が大きかったです。ですが、作業が終わり依頼をされた男性から笑顔で「ありがとう」と言ってくださった際には、人生で一番とも言えるやりがいを感じました。

テレビやSNSで見えていた何倍も現地は明るいなと活動中に感じました。最初は暗いニュースばかりが目に入り現地はもうボロボロなんじゃないかと思っていましたが、学校や保育園では子ども達の楽しそうな声が、炊き出し場では地域の方の憩いの場となっていました。ボランティア活動で現地の方に元気を与える事と同時に私は七尾市の方々から元気をもらいました。今後も被災地ボランティアがあれば積極的に参加をしたいです。

体育学部スポーツ医科学科 1年 久保雅暉（第3陣）

私は日頃から自分の感情を口にする癖がある。それをしてしまうと周りの雰囲気が悪くなってしまいます。ボランティアとして援助しようとしているのにも関わらず意識が自分の方へ向いてしまい、被災者の気持ちや状況を考えることができなくなってしまった場面があった。同じチームとして活動していた学生2年川上先輩は常に周りを見て仲間への声かけをしていた。次ボランティアで活動する時は自分がそのような役割を果たしていけるように頑張っていきたい。

使えなかったものが使えるようになった。必要ないものを取り除いて自由に使えるスペースができた。など0から100にするような活動は特にやりがいを感じた。また被災者の笑顔や感謝の言葉を見ることで、自分の行動がどれだけ意味のあるものであるかを実感することができました。

自分の時間や能力がチームのみんなと協力することで、より力強いエールとなることがわかりました。

活動1日目は被災者さんとのコミュニケーションが不足していた。

目標である泥だけ見ずに人を見るを達成できなかったと思う。

2日目は作業にも慣れてきて周りを見ることができるようになったため、前日の反省を活かして最近の生活の状況を聞くことができ、共感しコミュニケーションがとれていたと思う。

積極性の大切さも学ぶことができた。学生41人もいとやることがなくなり、ただ立って見ていだけの人もいた。そんな時、自らできることを考えたり、必要なことは何かを聞くことができる人はさらに自分の成長ができると思った。

何もしていない人に対して、「やろうよ」と声かけできたことは良かった。

これからの学生生活も世のため人のために行動できるように活動していきます。

体育学部スポーツ医科学科 1年 大橋勇斗（第3陣）

私は公共交通機関を使い七尾市に向かいました。金沢から七尾駅に向かうにつれ電柱が傾いていた

り倒壊している家が増えていきました。七尾駅に着くとホームに亀裂が入り使用できないホームがあり乗車目標が書かれた石が積まれていました。七尾校に向かう道中にも半壊した建物、岩崩によって半分以上ふさがれた歩道があり地震による被害を目の当たりにしました。夜寝るときは足がとても冷え防寒の観点から足元にカイロを置くなど知る必要があると感じました。

活動1日目、2日目を通しブロック塀のはつり作業を行いました。最初は不慣れで時間がかかっていたが1軒目の終わりの頃にはどの部分を削ればいいのか分かり手際よく作業することができました。2軒目では塀が大きく傾いておりどの部分から作業するかを考える必要がありました。午後からの増員メンバーにもやり方を教えていき1日目の最後には半分の掘削を行うことができました。しかし、午後の作業で掘削した塀が安全靴を履いていないメンバーの足に落ちケガが発生してしまいました。倒れかけた塀に限らず掘削した塀はどちらに落ちてくるかわからないため、はつり機の作業、塀の支えをする人はつま先に鉄板が入っている安全靴を履いている人が担当するようにする必要があると感じました。

法学部法律学科 1年 高柳威文（第3陣）

今回の災害ボランティア派遣は国際医療福祉専門学校七尾校を拠点とし、4日間にわたって活動しました。この活動を通して私は、被災された方々がどんなに大変な生活を送っているか身をもって体感しました。

その理由の一つとして、水道がまだ復旧していなく使えなかったことです。これによって飲み水や手を洗うこと、トイレなどといったことを気軽にすることができませんでした。この中でも特にトイレが外に設置された仮設トイレしかなく、行くのに時間がかかることや詰まってしまい流れなくなったこと、匂いの問題などとても不便でした。また、睡眠の面でもとても大変でした。私たちは体育館をお借りして睡眠を取ったのですが、日本海側ともあってとても寒く、初日の夜には2、3時間に一度は起きてしまうほどでした。2日目以降はもっと暖かい恰好をし、毛布も多く借りてもまだ快適と呼べるものではありませんでした。他にも食料は基本レトルト食品やアルファ米といったもので、少し物足りないものでした。

これ以外にも多くの点で不便な生活で、家に帰ったときには疲れがどっとでて2日間ほど引きずってしまいました。ですが、私たちはある程度の覚悟をしてこの活動に参加したからいいものの、被災された方々はいつもの日常を過ごしている中、ある日突然震災にあい不自由な生活を3か月以上続けていると思うと、私が体感したものはほんの一部で、もっと大変な思いをしている人がたくさんいるのだと感じました。

文学部史学地理学科 1年 吉田栞奈（第3陣）

活動開始初日、私は聞き込み班として活動した。東京とは違いほとんどの家にインターホンがなく、最初困惑した。徐々に慣れていき、扉をノックし大きな声で「国土館大学から来た災害ボランティアです。」と、名乗り各家を回っていった。しかし、何件か尋ね話を聞かせてもらったがほとんどの方

の表情は不安げだった。国士舘大学からとは名乗ってはいるが、地元の方々からすれば信用できる要素は一つもないに値し、そのような人相手に個人情報教えるのが怖いということからくる不安なのではと思ったが、自分から信用に値することを提示することなどできず聞き込み中何度か挫けそうになった。しかし何人か地元の方とすれ違った際に掛けてもらった「ありがとう」の言葉に救われ頑張ることができた。拠点地である旧石崎保育園の周りは地面が隆起していたり、ブロック塀が倒れていたりなど想像よりは酷くなくあまり被害がなかったのかなと到着時は思っていたが、聞き込みの際に奥のほうに行くにつれて、全壊してある家や赤や黄色の応急危険度判定の紙が貼られてある家が増えていき、私は被災地の一部しか見ていなかったのだと気づいた。

活動開始2日目、前日にガレージと倉庫の片づけを手伝わせていただいた家に行かせてもらい前日に引き続き片づけをさせてもらった。しかし撤去している家具や木材が災害によりでたものではないと知り、また疲れからなのかこの作業はいまするべきなのだろうかと思い始めてしまった。しかし、家のご主人から地震により足を負傷し片づけができなかった為とても助かった感謝しかないと言ってもらい、申し訳なくなってしまった。

また今回のボランティアではじめて寝袋で寝た。女子は七尾校の食堂で一人一つのテントを使い寝たが寒すぎてなかなか寝付けず、寝ることへの恐怖をはじめて味わった。

ご飯は基本がアルファ米であった。想像よりおいしかったがこれが何日も続くとなると堪えるものがある。今回のボランティアで実感したのは体力面よりも精神面の消耗が激しかったが、気軽に話しかけられる人が周りにいてくれたおかげで乗り越えられた。他愛もない話ができる人がそばにいること、暖かい布団で寝られて、ご飯が食べられることなど普段何気ない事がとてもありがたいものなのだと気づくことができた。

- 第4陣 -

体育学部スポーツ医科学科 4年 板垣 和真 (第4陣)

この度、能登半島地震の災害ボランティアに参加させていただき、被災地の方々や日本全国から集まられたボランティアの方々との関わりの中で、人の繋がり大切さを改めて感じました。

私たちが行った活動はイメージしていた瓦礫撤去や家の片付けがメインではなく、被災地の子ども達に向けた子ども縁日というイベントを運営するというものでした。子ども縁日では、ヨーヨー釣りや射的、流しそうめんなどのブースに分かれて、0から準備を始めました。学年や学部が違うボランティアのメンバーたちとの慣れない作業でしたが、そこでは地元の子供達に喜んでもらえるように、みんなが同じ気持ちで取り組んでいたからこそ、子ども縁日を成功に導けたのだと思っています。活動中は sien sien west という災害・被災者支援を行う団体の方々を中心に、日本全国からボランティアの方々が集まり、私たちが子ども縁日を開いている間も、瓦礫の撤去や家の片付けなどの作業をされていました。私は子ども縁日の準備がひと段落したところで、そこで活動をされていた方に「お手伝いさせてください」とお願いをしたことがありましたが、その方が返してくださった言葉がとても印象に残っています。その方は「気持ちはありがたいけど、それぞれの役割で一生懸命がんばりましょう」とおっしゃってくださいました。それまで私は、災害ボランティアは災害が起こる前の状態に戻すための活動だと思っていましたが、被災者それぞれにニーズや求めているものは違い、被災者支援にも様々な形があることを認識しました。子ども縁日も、地元の子供達たちに楽しんでもらうことはもちろん、夏休みの期間、家事の増えるご家族の助けにもなり、集まった地元の方々の交流の場としてもとても必要な役割だったことに気がつきました。災害により、地域住民の方々は、その土地を離れてしまうことも多くあると伺いました。自助・共助・公助という言葉がありますが、復興もボランティアだけでは達成することはできません。被災者の方々が手を取り合って復興に向かい「これからここに住みたい」、子ども縁日を楽しんでくれた子供達たちに「またここに帰ってきたい」と思ってもらえるように活動をしようと思いました。

今回の災害ボランティアを通して、復興支援の様々な形を見ることができました。復興は外見のものだけでなく、人と人との繋がりを深めて、助け合い、励まし合い、より強固な地域コミュニティを形成し、そこに生活する人の暮らしをより良いものにするまでが復興だと学びました。能登半島地震による被災地の日でも早い復興を願っています。

理工学部理工学科 3年 水野 匡 (第4陣)

私は今年の2、3月に開催された災害ボランティアにも参加した。その時は冬であり、日中は気温が一桁代で、日が沈むとマイナスになる程度の気温まで下がるような環境であった。また、水道が断水しておりトイレや食事などは普段とは違う時間を過ごした。そして、今回の災害ボランティアは被災地の復興支援作業ではなく、被災地の避難所でのイベント運営であった。活動場所は前回のボランティアで液状化現象による泥の撤去やがれきの撤去を行った地域であった。活動にあたって運営は学

生たちに任されたため、8/11が準備日とし、8/12,13がイベント開催日となった。前日の活動ミーティングでフライドポテト、かき氷、流しそうめん、射的、輪投げ、ヨーヨー釣り、スーパーボールすくい、シャボン玉遊びにグループ分けをした。私は8/12は流しそうめンを担当した。流しそうめんに必要なものをグループの中で話し合い、流しそうめんの竹の切り出し担当と竹を割って加工する担当、食材や食器を買ってくる買い出し担当を決めた。私は買い出しと竹の加工を行ったが、買い出しでは丁度用途にピッタリなものをスーパーで見つけることができず、何件かお店を回ったが見つからなかったため代用を考えることにした。竹の加工ではサンダーを用いて竹の内側を滑らかにする作業を行った。これがとても繊細な作業で難しく時間を要した。そうめんを流すので竹の繊維も一緒に流れないような滑らかな加工が求められた。準備が終って12日のイベント開催日になると、地域の子供たちがチラホラと訪れ始めてきた。そして、お昼ごろになると昼食としてそうめんを食べようと集まってきた。流しそうめんは夏でも日常的にはしない体験であるため、子供たち以外でも新鮮な体験になったと思う。暑い夏を少しでも楽しく快適に過ごしてもらえるかが重要だと感じた。13日は、輪投げ担当であり、前日と比べて多くの子供たちと遊びを楽しんだ。子供たちが楽しんでもらうための工夫を考えることは容易ではなかった。輪投げ以外にも外遊びなどもすることでより沢山子供たちと一緒に楽しく過ごせた。

今回の災害ボランティアは前回のボランティアとは異なりイベントの運営を行ったが、これも被災された方にとっては励みや癒しになると考えたら参加して良かったと感じた。

体育学部スポーツ医科学科 3年 岡山 雄希 (第4陣)

5日間能登半島災害支援ボランティアに行かせて頂きました。

能登半島地震から8ヶ月経った今でも必死に復興に向けて、笑顔絶やさず活動してた現地の方々、全国から集まったボランティアの方々をみて、多くの事を考えさせられました。

初日と最終日は移動日。中3日間は七尾市の石崎保育園を拠点にして活動させてもらいました。

活動日初日はこども縁日の準備と被災者宅の家財整理などをやらせて頂きました。

2日目、3日目はこども縁日をやり、七尾市の子どもたちが2日間で延べ100人くらい来てくれて一緒に遊んだり、食事提供などをしました。

被災地の大人は休みの日、家財整理などがあるため、なかなかこどもと遊べなかったり、こどもが家にいるとなかなか作業が進まなかったりすると言った意見もあるそうです。つまりこども達も大人と同じくらい辛く寂しい思いをしてるということ。

そこでお盆の2日間国士舘大学を中心に縁日を企画しようということになりました。

流しそうめん、フライドポテト、かき氷、ヨーヨー釣り、スーパーボールすくい、シャボン玉、射的、輪投げ、水鉄砲などを全て一から準備して、当日は思いっきり楽しみました。

おしまいとき「兄ちゃん達帰らんで一年中いてーやー」「そしたら毎日遊び来るでー」って言ってきて、自分たちがボランティアとして来た意味がその言葉に詰まってるなと思わせて頂きました。保護者の方々からも喜ばれ、こども達も笑顔になってくれて、とても嬉しかったです。災害ボランティ

アという瓦礫の撤去など重労働を想像する人も多いかと思いますが、被災地の方々の精神面でのサポートもボランティア活動のあり方の1つであります。「東京の兄ちゃんたちと遊んだなあ」とこどもたちの夏休みの思い出の1つになっていたら幸いです。

縁日が終わったあとには輪島市に連れて行ってもらいました。

輪島市は全壊した建物が多くあったり、崖が崩れて道がふさがっていたり、復興がほとんど進んでいないのが現状でした。

輪島市に行く道もずっとボコボコで、そこら中にヒビが入っていました。

通電火災により5万平方メートル(約300軒)が燃えた「輪島朝市通り」を見た時は言葉が出ず、地震の恐ろしさを実感しショックで涙が止まらなかったです。

目に見える形での復興はあまり進んでいなかったですが、輪島の方々も一生懸命復興に向けて活動しています。「少しずつ、ちょっとずつ、一歩ずつ」前に進んでいるのは間違いなく、ただその進みがゆっくりなだけであります。そこには多くの課題があり、1つに「人々の興味の薄れ」があると考えました。自分も今まではその1人であったためとても反省しています。だからこれを機にもっとみんなに能登の今を知ってほしい、興味を持って欲しいです。

被災地に実際に行ったことで、ひとの温かさや、地震の怖さ、人のために何かをやることの大切さなど様々なことを学びました。また見習うべき素敵な方々にも出会えました。

テレビで見ただけでは分からない現実が被災地には広がっていて、少し精神的にもショックを受けましたがその現実と向き合い、互いに励まし合いながら頑張っている現地の方々の強さを身に染みて感じました。

20年生きてきた中で間違いなく1番心に残る経験でした。

この5日間で見、聞いて、感じたこと、学んだこと、全てをこの先の人生に活かしていきたいです。そしてずっとずっと能登半島の復興を応援します。

法学部法律学科 3年 鶴賀奏汰(第4陣)

私は、今回のボランティア活動で、どのようにすれば人の役に立てるか、自分で考えて行動することの大変さを学ぶ事ができた。分からないことでも、求められていて、自分がやらなければいけない事である以上、誰かに聞いたり、自分で調べたりしながらできるように努力しなければならない。それはとても大変だったが、その行動の結果、誰かが喜んでくれた、頑張って良かったと思えた。

ただ、ボランティアをしたことで、逆に自分はどこまで行ってもボランティアなんだと思った。私は外からそこに行っている人間で、実際にその地域で生活をしているわけではないので、何が不便で、何を必要としているのか分からず、できる事は、求められたことと、応援することぐらいだった。だから、なるべく自分から勝手に行動したりせずに、頼まれたことをできる範囲でできるようにした。それが、自分なりにできる被災地への敬意だと考えた。手伝っているのではなく、手伝わせてもらっている。この気持ちを忘れず、これからも人のために行動できるようにしたい。

法学部法律学科 3年 荒野颯汰（第4陣）

私は、災害ボランティアに初めて参加した。メインは縁日の運営で、一日目は縁日の準備を行い輪投げを担当した。準備を終了した際、近所の瀬戸さんという方の家の家財撤去も行った。家財には思い出が詰まっているので、一つ一つ丁寧に運ぶよう他のボランティア団体の方が話されていて、学ぶことができた。

二日目は、縁日が開催した。子供は想像していたよりも少なかったが、子供たちと遊ぶことができた。また、輪島へ直接見に行った。状況はとても悲惨でニュースで見た感じよりも直接見た感じではとても違った。

最終日は、昨日と役割を交代してポテト揚げを担当した。暑さもあり、揚げるのは大変だったが前日より子供たちが倍以上来てくれたので忙しく楽しくできた。

災害ボランティアといえば瓦礫の撤去などのイメージがあったが、縁日の運営、準備も立派なボランティアだということを実感することができた。

文学部史学地理学科 3年 山崎悠斗（第4陣）

今回初めて参加した災害ボランティア活動であったが、ボランティア活動は人と人との関わりが非常に重要であることを学んだ。

国土館主催の縁日では、とても暑い中にもかかわらず、石崎地域の子供たちや保護者の方、高齢者の方など多くの方々がお越しになり、楽しんでくれたことが本当に嬉しかった。その中で、それぞれ担当するブースに限らず、人手が足りないところにサポートに入り、チームワークを生かして全員で協力できたからこそ円滑に進み、地域の方々を楽しませることができたのではと考える。特に子供たちにおいては、突然発生した地震によって恐怖を覚え、日常の風景が失われた状況にストレスを感じたことだろう。しかし、この縁日を通じてそのストレスが少しでも解消することができたのであればいいと思う。

災害が発生した場合、初期の段階では多くの支援やボランティア活動が行われるが、時間が経過するごとに徐々に少なくなっていくのが現状である。【sien sien west】代表の今井さんによれば、被災された方の中には災害後の家の様子が当たり前となり、なかなか片付けが進んでいないといった場所もあるという。勿論、初期支援も重要なことに間違いはないが、先ほどの事例を挙げると現在でも支援の手が必要である。そのような支援を行うために【sien sien west】のようなボランティア団体が災害発生時から被災地域に入り、ボランティア活動を行う一方で、被災者と積極的なコミュニケーションを図り関係を深め、時間が経過した現在でも、ニーズに応えられる支援構造が構築されていることから、ボランティア活動者と被災者との関わりも重要であると学んだ。

七尾市まで行く道中、屋根にブルーシートを被せている家がいくつかあったが、震源地に近づくにつれその数は多くなり、道路には凹凸が目立ち、大規模な土砂崩れも発生していた。能登半島地震に限らず、災害大国の日本であるため、いつ・どこで災害が発生する可能性がある。もし、災害が発生し同じようにボランティア活動に参加する機会があれば、今回の経験で学んだボランティア参加者の

チームワーク、被災者とのコミュニケーションといった人と人との関わりを大切に、復旧の一翼を担えるような活動をしていきたい。

体育学部スポーツ医科学科 2年 大橋勇斗（第4陣）

七尾に向かうまでの電車内で思ったことは、まだ電柱が傾いていたり屋根にブルーシートがかぶせられていたり3月にボランティアに行った時と光景があまり変わっていないということです。和倉温泉駅についてから宿に向かう際にも地面がガタガタしていてマンホールが隆起している場所が何カ所もあり暗くなった時間に歩くのにはとても不安に感じました。2日目縁日の買い出しのため店に行くと地震の影響により入り口に段差ができ、店内にも亀裂が入っている箇所があり改めて地震の影響の大きさを実感しました。3日目からは実際に地域のこどもたちが縁日に遊びに来ました。最初は皆、恥ずかしがっていましたが、名前を呼び合ううちに徐々に笑顔が増え元気に遊んでくれました。活動が終わり宿に戻るとボランティアメンバーに子供たちから「兄ちゃんたち明日もいるん?」と聞かれ、明日はいるけど明後日帰ってしまうことを伝えると「1年中いてーや!毎日遊びに来るよ!」と言われたという話を聞き、しっかりと楽しんでもらえていることにやりがいを感じました。4日目は前日来た子に話を聞いたのか3日目よりも多くの子供に来てもらうことができました。またこの日は高校生ボランティアによるスマホ講座もあり子供だけでなく大人の方にも楽しんでもうことができました。

今回のボランティアでは3月の時に行けなかった津波避難場所の養泉寺に行き、実際に避難された地域住民の方、住職の方に話を聞くことができ発災当時はこの場所に300人もの人が避難し1月の寒いなか一夜過ごしたことを聞きました。

また4日目の縁日終了後には輪島市を視察しに行きました。実際に自分の目で見える光景はニュースで見るものとは異なり言葉を失うほどのものでした。

今回のボランティアを通して感じたことは、発災から8か月たった今でも復興していない場所が多くあること、災害ボランティアは瓦礫撤去や家財搬出だけでなく縁日など心休まる場所を被災地に開くことも重要なことであるということです。これからもこのようなボランティアがあれば笑顔を届けられるような活動をしていきたいと感じました。

法学部法律学科 2年 林優花（第4陣）

被災地でのボランティア活動を通して、感じたこと、学んだこと

私は、今回のボランティア活動を通じて、ボランティアの形はたくさんあるということを学んだ。

私は、今回のボランティア活動を通して、今まで身近に感じる機会のなかった災害の被害をみて、今後の防災対策に生かすことのできるような知識を身に着けたいと思い参加した。応募当初は、家財の運び出しや瓦礫の撤去作業などがボランティアの主な活動内容だと思っていたが、今回のボランティア活動でそのイメージが大きく変わった。今回のボランティアでは、家財の運び出しや、子供縁日の運営を行なった。活動のメインであった子供縁日の運営をしていた際に、一緒に活動していた

七尾市出身の方に、「能登半島での地震があつてから亡くなった人や、都市部に出てしまった子供たちがたくさんいて、いまここに残っている子供たちは心から遊んでいいのかがわからない状況であったが、子供縁日の活動で子供たちが心から楽しんでいる様子をみて嬉しかった」ということを教えていただいた。この言葉を聞いて、それまでは子供縁日に対して、ただ私たちが楽しんでいるだけであると思っており、本当にボランティア活動へと繋がっているのか不安であったが、私たちが率先して楽しみ、子供縁日を運営することが子供たちの楽しさへ繋がり、子供たちが楽しむこと自体が地域を元気づけ、復興につながるということがわかった。また、家財の運び出しの際に被災者の方がボランティアの人と楽しそうに話しているのを見て、家財の運び出しなどの力仕事のボランティアは、ただ物を整理しているだけではなく、活動を通じて被災してから希薄になっていたコミュニケーションなどを活性化させ、精神的な支援にもつながっていることがわかった。

以上のことから、ボランティアの本質は、家財の運び出しや瓦礫の撤去など地域の復旧作業だけでなく、その他の活動を通じて地域の人のコミュニケーションを活性化し、復興を目指していくことであることを学んだ。

法学部法律学科 2年 常盤侑那（第4陣）

私は今回初めて災害ボランティアに参加しました。参加を決めてから、知り合いが一人もいない中での参加であったことに加え、被災者の立場から、災害ボランティアはただの偽善者に過ぎないのではないかと考えてしまいとても不安でした。しかし、実際に能登に行ってみると、たくさんの方々が作ってくれくださった信頼関係の下で、そんな不安を忘れるほど、温かく迎え入れていただけたと思います。

今回の主な活動内容は、こども縁日の準備と運営でした。私は外で行うシャボン玉とヨーヨー釣りの担当でしたが、とても暑くほとんど水遊びをしていました。準備日も文化祭のようで、運営とはいえ、子供たちと全力で外遊びをした感覚でした。しかし、一緒に遊んだ子供たち一人一人が1月から、今まで経験したことないような非常事態の渦中に置かれ、不安や恐怖でいっぱいだったと思います。どなたかがおっしゃってくれた「子供たちにとって、あの年、地震があつて大変だったけど、夏休みに大学生のお兄さんお姉さんと遊んで楽しかった、という良い思い出になるといいね」という言葉が忘れられません。私も、能登に行って子供たちと遊んだこの夏は一生忘れられないと思います。たくさん辛い思いをしてきた子供たちの良い思い出の一部になればいいと思います。また、輪島は、七尾以上に1月1日から時が止まったようで、言葉に言い表せないような光景がたくさんありました。輪島に向かう道中のトンネルが一つでも塞がったらどうなってしまうだろうと考えさせられ、山の無い地域で育った人の考えの浅はかさを思い知らされました。

そして、東京に帰ってきて、道路が平らであることや、電柱がまっすぐ立っていることなど、今までは当たり前すぎて何も思わなかった光景が目にとまるようになりました。普段からよく使う道を歩いているときも、ここで大地震や大火災が起きたらとか、応急危険度判定の紙が自分の家に貼られたらとか、普段とは全く違う見え方ができました。不安を抱えながらではありましたが、何にも代えら

れない経験をたくさんすることができ、ここに書ききれないほど多くのことを感じました。本当に参加して良かったです。この経験を糧に、これから精一杯生きていきたいと思います。

体育学部体育学科 1年 宮副直志（第4陣）

私が今回ボランティア活動に通して学んだことが3つあります。1つ目は、日々の生活の大切さです。その理由として、被害があった家や道路などを見て普通に生活できていることが当たり前ではないと感じたからです。2つ目は、復興についてです。理由として、能登半島地震から約半年経っているにも関わらず災害があった日と同じように全壊の家もあったからです。また、時間が経ったからもう大丈夫と勝手に思っていたためとても衝撃を受けました。3つ目は、縁日についてです。理由として、運営はもっと簡単なものだと思っていたがアクシデントなどがあり運営の難しさを学んだからです。また、自分は子供と遊ぶことが多くその中で子供から半分くらいの人が金沢に引越したという言葉聞き自分が上手く受け答えできなくなってしまったことをよく覚えています。そして、最後にボランティアに参加してまた誰かのために頑張りたいという気持ちがより強くなりました。

法律学部法律学科 1年 海老原南（第4陣）

私は以前から災害現場でのボランティア活動に興味があり、今回の災害ボランティア活動に応募した。

1月の地震から7カ月の月日が流れ、ニュースでも石川の地震のニュースを目にする機会は減っていたため、復興はかなり進んでいるものだと考えていた。そのため、実際に自分で7カ月経った七尾市や輪島市の現状を見て驚いた。もちろんあの日から少しずつ復興は進んでいる。だが、倒壊した建物や今にも崩れそうな住宅、地震によってガタガタになってしまった道路など私の目にはニュースで見たあの日のままの光景に見えた。特に被害の大きかった輪島市は思うように復興は進んでいないように感じた。私はテレビなどを通じて今回の地震による被害を理解していたつもりだった。だが、実際に現地に行って自分の目で変わり果てた街並みを見てそこでようやく今回の地震がもたらした被害の大きさや自然の恐ろしさをきちんと理解できたように思う。お正月の家族団らんの時に突然大きな地震に襲われ、津波の恐れもあった人々はその時テレビでその様子を見ていた私の想像を絶する程の怖さだったことだろう。私にとって自然災害の恐ろしさを再認する機会となった。

ご年配の女性と話をしていた際、「あの日から辛いこともたくさんあったけれど、本当にこうして笑顔で過ごせるようになって嬉しい。遠いところから本当にありがとう。」とおしゃってくださったことがとても嬉しく印象に残っている。私たちが行った活動の大半は子ども縁日という自分の想像するボランティア像とは異なるものだった。しかし、形は違えど少しでも被災された方々の力になれたのなら嬉しく思う。

今回のボランティアで改めて自然災害がもたらす被害の大きさ、防災に対する日々の備えがいかに重要であるかを学ぶことができた。このような貴重な体験をすることができ、参加して良かったと思った。またこのような機会があれば参加しようと思う。

法学部現代ビジネス法学科 依田莉歩（第4陣）

私はボランティアは初めてでは無いですが災害に関わるボランティアをするのは初めてでした。まず、この活動を通して一番感じたことは人を助ける事が出来るのはほんとに人しかないということです。

何をする時も人と人とが支え合い協力することで行動を起こすことが出来ました。今回でいうと一緒に活動をした国士舘生のメンバーと被災地の方々です。明るい声かけをしあったり、計画を立てたり、片付けをしたり、一緒にご飯を食べたり、子供たちとじゃれあったり沢山の人と関わり沢山の笑顔が生まれました。そんな中、ある被害にあった家の片付けをしている時に言われた言葉がとても心に残っています。それはその家の人がまたこいよ！　なんかあったらなんでもしてやるからな！　と言っていたことです。私はこの言葉を聞いた時心がじんとしました。どれだけ辛いことがあってもここが自分の居場所というくらい誇りをもってその地域をほんとに大切にしているなと感じました。また自分達もここに来ていいんだ。と感じました。みんな同じ災害に遭っていても一人一人の心のキズはバラバラだと思います。そんな皆さんに私達がさせてもらった活動でその一瞬だけでも笑顔になってもらえたらという一心で活動させてもらいました。しかし現地の皆様は私達以上に笑顔溢れていて自分達が元気を与えてもらいました。自分達は帰ったら当たり前の生活が出来るけれど現地の人たちは終わりというものはありません。私達は目を逸らすことは出来ます。しかし今回繋がった人と人との関わりを切りたくないと思います。自分達だけではなく、みんなでもっと笑顔になりたい！と思いました。1人1人の助けたいという気持ちが合わさったらこんなに大きいものを作り出せるんだなと感じました。だからこれからもこのようなボランティア活動があったら参加させてもらいたいです。被災地の皆様に少しでも早く幸がありますように。このような機会を作ってくださいありがとうございました。

文学部史学地理学科 1年 吉田隼斗（第4陣）

今回のボランティアは人生で初めてのボランティアだった。個人で参加だったため、仲間ができるのか、良い活動だったと思えるのかと不安なことだらけではあったが、結論を言うと仲間もでき、良い活動だったともいえる。

今回の災害ボランティアの活動内容としては、子ども縁日を運営するいわゆるソフト面での復興であった。2日間の開催で老若男女問わず大勢の方に来ていただいた。子供達と遊ぶことがとても多く、みんな楽しんでくれているような印象だった。楽しんでいる姿はまるで私たちが子供の頃と同じように感じたが、現実問題では環境が異なる。能登半島地震による被害によって家屋の倒壊、ライフラインの遮断、地域住民の転居などで普通とは言えない環境を乗り越えてきているのである。私自身は中学の頃に胆振東部地震を被災し、停電、道路の陥没などを体験した。当時を思い返すとコンビニに食料や水などを求め大行列ができていたり、交差点で交通渋滞していたりと混乱した状況だった。非日常的な生活を送ることは保護者はもちろん、子どもにもストレスがかかる。今回の活動で能登の子ど

もたちは楽しめたことに加えて、心に蓄積されていたストレスも自然と解消されていっただろう。また、子どもたちと遊びながら大学生同士の交流もでき、仲を深めることができた。

子ども縁日以外にも、断捨離や運搬の手伝いもした。この体験を通して感じたことは限りなく一歩ずつが大切と言うことだ。ほとんどが手作業である中で何かの作業の効率を大幅に上げることはできない。一軒ずつ皆で手作業でやっていくと言うことは、普通であれば気の遠くなるようなことである。それを一歩ずつ進めていき、復旧完了の状態にするには被災者、ボランティア含め協力していける関係が大切だと感じた。被災者のニーズにボランティアが応え、できないことは被災者に納得してもらえ形できない理由を説明する。こうしていくことで、一歩ずつではあるが一番の近道になると思う。

活動自体は三日間と短い期間ではあったが、今後の生き方や防災について考えさせられる活動になった。

文学部日文学科 1年 飯田創太郎 (第4陣)

今回のボランティア活動は自分の想像していたものとは、だいぶ違っていたが全力でやったつもりだったが正直なところ、今やっている活動が本当に意味のあることなのかとふとした時頭をよぎることもあった、だけれども自分の結んだ竹がきちんと機能して地元の人たちに楽しんでもらえて、お礼を言われたとき「ああ来てよかったな」と感じたのは、紛れもない僕の本心だった。

最終日にパパラさんが言っていた、「自分たちのやったことには意味がある」という言葉聞いてまた来ようと思った。

また最終日にやった道の舗装、周りにあるものを使って道を整備する作業が新鮮でいい経験になった、次の日に筋肉痛になったので、またボランティア行くまでには、鍛えておこうと思った。

文学部史学地理学科 1年 T.S (第4陣)

私は、初めて災害ボランティアに参加しました。この災害ボランティアでいろいろなことを学びました。その中で印象に残ったのは、二つあります。一つ目は子供縁日の運営です。今回の活動では、夏休みの子供たちを楽しませる子供縁日の運営を主に行いました。

子供たちがいかに楽しくいられる場所を提供できるか考えるのには苦労しました。最終的にはたくさんの子供たちが来てくれて、とても大成功した子供縁日を運営することができました。この活動では、災害の復興が終わっていない中子供たちを楽しませることなど様々な経験を積むことができました。

二つ目は、当たり前の生活ができなくなる苦悩と現状、そして復興の大変さを身に染みて感じたことです。地震が起きてから半年以上たった今も水道が出ない地域が、傾いた家や屋根の瓦などが少し崩れている家、家財のお片付けができていない家などがまだたくさん残っている状態でした。今回は、瀬戸三代さんのお宅の家財の断捨離のお手伝いと廃業したホテルの布団をトラックに積む作業を行いました。瀬戸三代さんは、とても人柄がよくお手伝いをされていてとても楽しかったです。しかし、こ

ここでは家財の断捨離がいかに大変かを学びました。たくさんの家財があり、それぞれに思い出があるなかできっぱりと捨てる、捨てないことの判断をしていた瀬戸三代さんは本当にすごいと思いました。

この三日間の活動を通して、災害の復興の大変さを身にしみて感じました。また、機会があれば災害ボランティアに参加したいと思います。

IV．引率教員による手記

第1陣引率教員

都 城治

第2陣引率教員

大木 学

第3陣引率教員

曾根 悦子

第4陣引率教員

植田 広樹

第4陣引率教員

都 城治

全陣引率教員

浅倉 大地



第1陣引率教員 都 城治

今回のボランティア活動では、いくつかの課題とボランティア参加による教育的効果を感じた。国士舘大学における被災地域への学生ボランティアを振り返ると、水害に伴う活動が多く生活基盤が整っていたケースがほとんどある。一方、地震災害は東日本大震災、熊本地震、島根県西部地震が挙げられるが、インフラ復旧が完了していない地域に生活拠点を置く経験は2011年の東日本大震災以来である。今回の能登半島地震においては事前情報から生活用水、飲料水の確保は現地で可能とのことであったが、学生含め約20名分の水を現地で確保することは、容易な作業では無いと感じた。これらの水の確保という点から、ボランティア派遣に伴う今後の課題点と、断水地域での生活経験による教育的効果についての私見を述べる。

ボランティア自身の飲料水の確保に伴う負担が大きいと感じたが、改善が可能であると考えられる。飲料水は給水所に行くことでタンクに充水できるが、あくまで現地住民が優先されるべきものであり、20名分の飲料水を全て現地調達することは、被災地域への負担をかけることになる。また、給水施設までの往復時間や、車両の使用が必須である事を加味すると他の作業に当てられたはずの人員や時間を割くこととなる。第1, 2陣は公共交通機関での現地集合のため、学生が自身の使用予定の水量を把握して持参することは、一定の限界が生じると考えられるが、一人2L程度の持参であれば、現地での飲料水確保の負担は軽減できると考えられる。

生活用水の確保に伴う負担は大きいですが、学生自身が水の備蓄や節水に関する見識を深める良い経験になったと感じる。生活用水は貯水槽から自力でくみ上げ、シャワーによる入浴、トイレでの汚物処理に当てられる。そのため、ボランティア活動に加え毎日1.5t程度の給水が必要になり、6名ほどの人員で2時間近くの作業を行っていた。給水作業は電動ポンプを一部使ったものの、非常に過酷な作業であり普段からトレーニングを行っている学生であっても身体的負担は大きかった。

現地入り2日目には充水したタンクからの水漏れが発生し、多くの時間と体力を使ったにも関わらず、全量を失ってしまう事を学生は経験したが、その際には多くの学生から水の重要性を再認識する旨の発言があった。この出来事は意図しない事象ではあったものの、平素における本学の防災教育と比較して高い教育的効果を得たものと感じた。本学で開講している防災リーダー養成論実習では、入浴できないことを条件にした宿泊実習を行っているものの、水道そのものは開通しており、水の確保に関する労力は実感できていないのが現状である。被災地域での生活による教育効果は、現地の状況によって異なるため一概には言えないが、本学のボランティア参加学生は断水地域での生活や活動を体験したことで、日常的な水の備蓄や節水に関する意識が高まったのではないかと考えられる。



第2陣引率教員 大木 学

雨が少ない天気恵まれ、被災地に実際に入り災害ボランティア活動を行うことができた。地域の住民、復興に携わっている近隣地域の人々、NPO 団体のスタッフに接する機会があり、学生たちは貴重な経験をした。

2月29日(木)は、七尾市石崎地区にて、倒壊したブロック塀の撤去作業や液状化現象で出た泥の撤去を主に行った。ブロックを集め、軽トラックに載せる作業は、学生6～8名×2チームで行い、午前午後で数軒分の撤去を行った。泥の撤去では、ある家の前の排水溝にたまった泥をかき出し、土嚢に入れる作業を行った。石崎地区に限ったことではないが、お年寄りが多くいる地域ではこのような力仕事ができなかったと思われ、2ヵ月経った今もこのような作業がまだある。現在も、生活を取り戻すことが大変な人々が多くいると感じた。

また、この日は、周辺地域のニーズ調査として、学生が実際に家々を訪問し、困ったことがないか聞き取りをする活動を行った。これは、ブロックの撤去作業を一緒に行った NPO 団体のスタッフから提案をいただき、私と学生3名が約45分程度かけて一軒一軒声をかけて回って行った。8軒ほど訪ね、計3件のニーズを得た。いずれも破損した家具の運び出しのニーズであった。これらのニーズを前述の NPO 団体に報告をした。聞き取りを行った際には、「いろいろお願いしたいことはあり過ぎる」と言う方もいれば、「今はもう大丈夫です」という方もいて、様々であった。

被災地の住民との交流があったことで、各学生の心と体に被災者の気持ちや状況が強く記憶されたと思う。実習や訓練では得られない学びの機会があった。

3月1日(金)は、公営テニスコート駐車場に集積された廃棄物を仕分けする作業を行った。

「仮置き場に運ぶ前」の「仮仮置き場」が設置され、そこに運搬された廃棄物を11品目に分別し、再度トラックに載せる作業を行った。(その後、トラックは指定された「仮置き場」に行き、廃棄物を捨てる作業を行っている。)本来、分別作業は各家庭で行うことであるが、高齢・本来の仕事がある等理由で作業が困難なため、苦肉の策としてこのプロセスを踏んでいると聞いた。仮仮置き場には、ふとん、木造家具、破損したブロック、ガラス、家電製品が運ばれることが多かった。

当日は住民との接触はなかったが、ボランティア活動を一緒に行った東京消防庁の方、トラックを運転する地元の方や NPO スタッフの方々との交流から、学生は地域の現状や災害復興の実際を知ることができた。

発災後2ヵ月経過したが、七尾市全体でもまだ断水が続いている。道路もいたる所で凸凹があり、復旧復興が少しずつゆっくり進むことを実際に感じた。2日間の活動を、住民との接触がある・なしで分けたとしても、どちらも学びがある時間であった。地域のニーズに応じて活動をするという意味では、直接市民と接触できなかったがボランティアセンターの要望に応えた3月1日の活動は、本来の活動を行なえたと思う。学生自身は作業をした充実感と新しいことを知れた達成感両方を得られた。



第3陣引率教員 曾根 悦子

今回3陣は最多の学生ボランティア41名が参加してくれた。体育学部のみならず、法学部・文学部・理工学部からも参加あった。特に他の陣と異なるのは多摩キャンパスからのバスで移動できたことである。資器材搬送も自身の荷物も同時に運ぶことができ、移動時間はかかるが、苦なく移動することが出来たのは学生からも大変好評であった。また学生生活ではあまり交流ができない学部とボランティアをとおし交流することで、学生同士が助け合い、お互いのいいところを吸収しあって共に活動している姿を見ることができた。この環境でしかできない交流であり、個々の持っている“優れているもの”を見出すきっかけになったのではないか。学生の間でしかできない交流を、また自身の武器＝優れているものを見つける環境が提供できたことは大きな成長に繋がったと考える。今後も学生ボランティア派遣をする際は、同様に他学部交流ができる環境を提供していきたい。

移動初日は講堂で顔合わせと今後のスケジュール、施設内での注意事項等を告げ、解散とした。ホテルではなく、お借りしている環境であること、我々の為に学校担当者が必ず宿泊してくださっていることを浅倉先生からお話いただき、学生自身も身が引き締まる思いをした。

2日目からは、七尾市に入っているNPO団体と活動することが出来た。学生たちを7グループに分け、家具の搬出、がれきの撤去、粗大ごみの分別、困りごとの聞き取り調査等多岐にわたった活動を行った。NPO団体の皆さんは我々の学生に対して、真摯に向き合ってください、作業等の内容を細かく理由も含めご指導くださいました。その姿を見た学生たちは、今後被災地で活動する際にどんなことをすべきなのか、今後何を習得すべきなのか等、肌で感じるきっかけになったと考える。教室で学ぶだけではなく、OJTで教育されることの重要性を実感した。

3日目は昨日に引き続き家具の搬出、がれきの撤去、粗大ごみの分別等を行った。また、NPO団体のつながりからクレープ屋さんが来てくれるとのことで、被災された方々への癒し空間を提供するお手伝いをさせてもらった。沢山の地域の方々が集まり、談笑されている姿を見て学生たちも嬉しそうにしていた。被災者の方々と一緒にお話をする機会もあり、現状の困りごとや悩み事などもお話を直接聞き、被災者の気持ちに寄り添うことの重要性を感じていた。ボランティア＝力仕事だけではなく、環境を提供することや、お話を聞くこともボランティアの一つの役割であり、対話力や寄り添う心を彼らにも実践で学んでもらえた。

中2日のボランティア活動ではあったが、体育館に寝泊することや水を汲みに行くこと、生活の中でも被災地で活動することの意義は彼らに十分に伝わったであろう。帰りのパーキングエリアで暖かいお水で手を洗っていた学生が、「当たり前この環境に感謝」とつぶやいていたのがとても印象的だった。このような活動の場を与えてくださった国際医療福祉専門学校七尾校の皆様に大変感謝申し上げます。ありがとうございました。



第4陣引率教員 植田 広樹

1. 活動の概要

2024年8月10日から14日の期間、学生20名が石川県七尾市において災害ボランティア活動を行いました。このうち3日間を引率しましたので報告します。今回の活動は、七尾市が直面した大規模な自然災害の復旧支援を目的としており、主に亜急性期における被災者の心の支援として、被災地を元気にする「こども縁日」を開催しました。

2. 活動内容

学生たちは各々が考え、「こども縁日」のなかで以下のような出し物を実施しました。

シャボン玉遊び・スーパーボールすくい・ヨーヨー釣り・射的

そうめん流し・かき氷・フライドポテト

この活動を通じて、学生たちは被災地の現実と直面し、自分たちの力がどのように地域社会に貢献できるかを学びました。

3. 学生の成長と成果

今回のボランティア活動を通じて、学生たちは以下のような成長を遂げました。

- ・災害時の亜急性期における、被災した子供たちに対する心のケアの重要性を実感
- ・地域住民とのコミュニケーションを通じた柔軟な対応力の向上
- ・自らが主体的に行動する意識の向上

特に印象的だったのは、学生たちが被災者の方々から感謝の言葉を直接いただくことで、自分たちの活動が地域に与えた影響を強く感じた点です。

4. 課題と今後の展望

今回の活動を振り返ると、学生たちは一定の成果を上げましたが、いくつかの課題も見えてきました。特に、災害直後と亜急性期では、被災者への対応の際の言葉使いや振る舞いをどうすべきか、授業や実習の中での訓練やシミュレーションの強化が必要であると感じました。また、活動の前後での心のケアやフォローアップも重要な課題として挙げられます。今後は、こうした経験を活かし、より充実したボランティア活動の提供を目指していきたいと考えています。

具体的には、事前の訓練やシミュレーションの強化、活動後の振り返りとフィードバックの機会を設けることで、学生たちがさらに成長できるよう支援したいと考えています。引率教員として、学生たちの成長を目の当たりにし、大変有意義な時間を過ごすことができました。今後も、この経験を活かし、災害ボランティア活動を通じて地域社会に貢献できる人材育成を目指していききたいと思います。



第4陣引率教員 都 城治

本年3月に引き続き長期休暇を活用し、石川県へのボランティア活動に学生と赴いた。ボランティア活動内容は子供向け縁日の運営であり、その詳細な内容は本学の学生や他の教員の報告に論を譲ることとする。今回は活動後の時間を利用し輪島市を学生と訪れ、大規模火災の発生現場を視察する機会を設けたが、本稿ではその時の出来事に焦点を当てる事とする。

ボランティア活動終了後に輪島市へ向かう途中で、輪島市における被害状況、視察の目的や注意点について学生とディスカッションを行った。詳細な被害状況を知っている学生や、既に記憶が薄れている学生もいたが、十分に事前知識の共有を行う事が出来た。当初は学生同士で和やかに会話していたが、輪島市に近づくにつれ被害状況が深刻になる光景を見て彼らの口数が少なくなるのを感じた。輪島市の大規模火災の発生地域に到着した後は、改めて発災状況について解説を行ったが、このような大規模火災が自分の地元で起きたことを連想させる問題提起をしたところ、数名の学生が目を赤くする様子を浮かべた。少し時間がたった後で声をかけると、「災害の発生は常に自分事として捉えていたはずなのに、実際はまだまだ遠い世界のように感じており、火災現場を目の当たりにして初めて当事者として捉えることができた。そんな自分自身の不甲斐なさや、この地域に住まわれていた住民の事を考えると気持ちが溢れてしまった。」と言っていた。学生には強すぎる刺激を与えてしまったのではという心配と同時に、防災対策の重要性を再認識するきっかけになったのではと感じた。また、被災現場に行く事が学生の勉強になるという意見があり、この点については私自身も同意するところだが、単純に被災現場を見せる事で完結するものではないと改めて考えた。

災害現場を訪れる事の教育的な影響については、いくつかの先行研究が存在する。例えば精神的な侵襲の可能性を指摘した報告や、その後の防災行動への関連を明らかにした報告がある。また、心理学分野ではストレスを受けた後に「PTSD（心的外傷後ストレス障害）」の対となる、「PTG（心的外傷後成長）」という現象がある。これを本学の学生に当てはめていくと、被災現場を見たという経験を、全ての学生が成長方向に自主的に昇華する事を期待したいが、これには一定の限界がある。大学生は既に18歳成人とされる意味では大人であり、自身の選択で被災現場のボランティア活動に来ているものの、初めての体験に対してストレスを感じる事は想像に難くない。あくまで、被災現場を概括的に眺めるのではなく、その背景や得る事が出来た教訓、自身への当てはめを視察の前後で話し合うことで、初めて被災地域を訪れた全ての学生に学びを共有できると考える。



全陣引率教員 浅倉 大地

この度の震災に際し、心よりお見舞いを申し上げます。今回の石川県七尾市での災害ボランティア活動では多くの学び、気づきを学生だけでなく私自身も得ることができた。その一端を紹介したいと思う。

まずは活動について振り返っていききたい。今回の震災に際し、発災当初、現地からの発信として「不要不急の移動自粛」が求められた。それがいつの間にか「ボランティア自粛論」となり、現地に向かうボランティアの足を鈍らせることとなった。我々も例外ではなく、いつも以上に「自分たちの活動は現地の役に立てるか、ありがた迷惑になっていないか」というところに気を配ることとなった。先遣隊の派遣は最初の活動までに3度行い、多くの調整の時間を要した。特に「自己完結」という言葉は、「石川県災害対策ボランティア本部」や「七尾市災害ボランティアセンター」と活動調整をする際も強調することとなり、「我々は自己完結ができます。現地の負担にはなりません。」ということで、活動を許可していただくことができた。その結果、つながりのあった国際医療福祉専門学校七尾校に体育館や食堂をお借りすることができ、学校内の復旧作業を最優先に行いつつ、七尾市内の復旧のお手伝いをさせていただけることとなった。石川県には石川県のやり方があり、それを外部の人間が外から批判するべきではないと思うが、発災から2ヶ月で7116人（3月5日時点）しか活動ができていない状況には少しもやもやとした思いを持っている。単純比較はできないが、阪神・淡路大震災は発災1ヶ月で約62万人、東日本大震災では2ヶ月で約22万人と大きな差が生まれてしまっている。現地の人や活動した学生からは「人手が全く足りていない。気持ちがあればいいので、一人でも多くきて活動して欲しい。」という意見をよく聴いた。学生も自分たちが役に立てたという実感を得た一方で、2ヶ月経過しても全く終わりの見えない状況に忸怩たる思いを持った者もいたと思う。3月上旬の段階でまだまだ復旧復興への道のりは遠く継続した支援が必要であることは間違いない状況であった。春期の授業が開始されると教員や学生もまとまった休みを取ることが難しくなり、石川県に行っの活動はできなかったが、多摩市の聖蹟桜ヶ丘にて開かれた「せいせき桜まつり」において能登半島地震の支援活動のパネル展示および募金のお願いを学生中心に行い、被災地外でできる支援活動を行った。これまで、被災地に出向いてのボランティア活動が多かったのが本学の活動であったが、大学等がある地域での活動でも被災者・被災地の為になる活動ができるということが改めて分かった。その後は定期的に現地と連絡を取りつつ、夏休みの派遣を見据えて、7月に再度先遣隊の派遣を行い、8月の第4陣の派遣へとつなげることができた。2月3月と比べると変わった場所も少しはあるが、専門学校の敷地内はまだ断水しており、いまだに復旧作業が進んでいない状況もわかった。8月の活

動は「災害ボランティア」という言葉が持つイメージとは少し違った夏休みの子ども向けのイベント企画運営であった。災害時には子供達が我慢を強いられ、思いっきり遊ぶ場所がなくなるということがこれまでも報告されている。学生たちはさまざまな出し物や食べ物の屋台を企画し、2日間のイベント運営を行った。遊びに来た子ども達に「一年中いてほしい。そしたら毎日遊びに来る。」と言われるなど、現地の子ども達にとって少しの間ではあるが、地震のことを忘れて思いっきり遊んで、笑って楽しめる空間を提供することができたと思う。活動の最終日には現地でコーディネートをしていた災害支援団体の代表の方から「皆さんのやった事には必ず意味があります。皆さんにしかできないことをしたと自信を持ってください。」と声をかけていただき、言葉の重みから涙を流す学生もいた。大学生だからこそできる活動、提供できた遊びもあり、参加した学生の心に響いた活動を提供することができたと感じている。

続いて生活について振り返っていく。特に2月から3月にかけての活動は必ずしも最高の生活環境ではなかった（断水が続く中での体育館でのテント泊、お風呂は2日に一回程度一人3分以内、トイレは仮設）が、自らの考えや災害との向き合い方を見直すという意味では、良い環境となっていた。飲み水は支援物資としてたくさん届くが、生活用水がない。生活用水を汲むには寒い中、外でホースを持ってポンプを動かさなければならない。シャワーは一人3分以内に入らないと水が不足してしまう。トイレに行くために、屋外の仮設トイレに行かなければならないなど様々な苦労があった。現地で3～4泊するだけでも苦労した学生は、その生活を2ヶ月以上続けている被災者の方の苦労に思いをはせ、身の引き締まる思いだったと思う。蛇口をひねれば無限に水が出る。湯船につかり、温かいシャワーで体を洗える。トイレに行きたい時に自由に行くことができる。こういったいつもの環境に感謝するとともに、それが災害により遮断された生活を体験し、日頃からの防災意識などを高める機会となったと思う。今後も多少の不便はむしろ学生への教育という意味では歓迎し、そこから何を学べるかということにも着目した方が良いだろう。ただし、過酷な環境下での生活には限界があり、学生などでは3～4泊程度が限界であると思う。長くいるにはそれなりの経験と胆力が求められ、ストレスもかかるので、過酷であれば過酷であるほうが良いという意味ではない。4陣の時には七尾市内での断水も解消し、被害が少なかった宿泊施設を利用することで、現地の事業者への支援を行ないつつ、安定した快適な生活環境を確保することができた。宿泊場所の方には朝夕の食事としてご飯やお味噌汁、ケーキなどを提供していただき、学生が活動に集中して取り組める環境を作っていただいた。改めてここで感謝の言葉を残しておきたい。OneDayFamの宮谷さんには本当にお世話になりました。ありがとうございました。

最後に総括的な話で私からの報告を終わりにしたい。今回、1陣と2陣は「七尾市災害ボランティアセンター」と「七尾市石崎町を拠点とする災害支援団体」の2つのやり方のボランティアを経験することとなった。個人装備の不備のフォローや活動場所までの移動手段の準備など様々な手厚いフォローをしていただける災害ボランティアセンター。住民さんと直接つながり、困っていることに対して迅速に対応し、ブロック塀クズなど少し危険な活動も厭わない災害支援を専門とする団体。どちらの方がよいという比較論には収まらないが、どちらも被災地には必要であり、両方で活動することで

双方の状況をよく知ることができた。その経験を踏まえて「発災時に力を発揮する防災リーダー」の人物像を考察するならば、「現場で判断をすることができるかどうか。」が重要な能力であるとする。さまざまな計画があったとして、その通りに行くこともあればいけないこともある。災害現場は常に、アップデートや違う情報がくる中で、その場でできる最良の判断を連続で行うことが求められる。良く言えば「柔軟性」が求められ、悪く言えば「出たところ勝負」といった状況である。付け焼刃的な能力や気持ちでなく、本来の「人間力」が求められていると毎回の災害で感じている。その「人間力」に「国を思い、世のため、人のために尽くせる人材」である「国士」と通ずる部分があると私は考えている。

今回の一連の能登半島地震への支援の活動は参加した学生にとって、通常ではえがたい経験になったと思う。ボランティアの募集を呼びかけてすぐに71名もの学生が集まり、半年が経過した8月のお盆休みでも20名の学生が集まり、現地に赴き活動したのは何物にも代えられない経験だと思う。現地で活動した学生のレポートを読んでも、多くの学びをそれぞれの学生が得られており、良い活動を提供できたと言ってよいと思う。現地に行かなければわからないこと、得られないものはある。少し歩けば家が崩落し、水も出ない、そのような環境の中で人々が暮らしている。このような状況は写真や文字だけでは伝えることができない。これからも講義や実習を通して、学生などに「災害ボランティアに行こう」と呼びかけ続けていきたい。今回、東京で出来る新しい支援の形も見つけることができた。今後より一層多くの学生が、ボランティアとして被災地・被災者のために活動できる環境を整えていきたい。このような活動への学校法人の理解、手厚いサポートには感謝している。引き続きのご支援をお願いして、結びの言葉とさせていただきたい。

V . シンポジウム登壇学生による報告

体育学部スポーツ医科学科 2 年

大橋 勇斗

体育学部スポーツ医科学科 2 年

篠原 聖真

理工学部基礎理学系 4 年

淵野 葉子

司会： 学生からの発表を始める前に、まずは国土舘大学が実施をした石川県七尾市でのボランティア活動について、簡単に説明します。国土舘大学では、1月1日の発災の後に情報収集を行い、1月7日から物資支援を行いました。弊学のOGが七尾市の専門学校に勤務している縁もあり、七尾市での活動を継続的に行っています。実際に学生が現地に行ったのは、2月中旬から3月上旬まで、夏休みの8月で、計4回に分けて被災地の支援活動を行っています。その他にも、東京での募金集めの活動などもしています。今回はその活動に参加した学生から発表します。それではお願いします。

大橋： 皆さんこんにちは。国土舘大学体育学部スポーツ医科学科学生2年の大橋勇斗です。本日は令和6年能登半島地震災害ボランティアの活動報告を行います。よろしくお願いします。最初に簡単な自己紹介をします。普段は多摩キャンパスにある体育学部スポーツ医科学科で、救急救命士を目指しています。ボランティアの参加回数は、今回、報告する能登半島地震の第3陣と第4陣の計2回です。活動する時は『被災地に笑顔と活力を！』をモットーに活動しています。今回の報告では、2回のボランティア経験を基に、大きく四つの項目に分けて報告します。



まずは、第3陣の活動について報告します。第3陣は3月4日から7日まで行い、初日と最終日は移動日とし、その他の2日間で活動を行いました。活動内容はニーズの調査、家財搬出、傾いたブロック塀の解体・撤去、サロン運営の補助を行いました。3月の活動では、40人を超える学生が参加したため、ニーズ調査を行うチームが生まれ、被災地のお家を1軒ずつまわり、聞き取り調査（ニーズ調査）を行いました。その結果、車庫の棚が崩れて、木材に埋もれてしまった車の救出を行うことになりました。学生の仲間と一生懸命活動した結果、車庫の木材を取り除き、無事に車を取り出すことに成功しました。活動後の終礼の際に、発災直後から七尾市に入っている災害支援団体の sien sien west の代表である今井健太郎さんより、学生のみでニーズ調査を行い、活動を考え、解決するまでの一連の流れが出来たことは、素晴らしいと評価していただきました。ブロック塀の解体作業ではウインチを活用して、倒れかかった塀を固定し、慎重に作業を行いました。作業を始めた頃の頃は、はつり機を当てる位置に戸惑い、ゆっくりとした作業でしたが、時間が経つにつれ、作業に慣れて、学生同士でアドバイスをし合って、最終的には効率よく作業を終えることができました。また、活動拠点でのサロン運営ですが、サロンの準備や整理券の配布を行いました。

続いて第4陣の活動についてです。8月に行った活動では、主にこども縁日の企画運営を行いました。他には家財整理の作業系の活動も行いました。また、拠点近くの津波避難場所の見学も行いました。活動終了後には、輪島市の朝市跡地の見学にも行きました。こども縁日では、ヨーヨー釣り、スーパーボールすくい、水遊びの他、工作コーナーや飲食の提供も行いました。

参加した子どもたちが楽しそうに遊ぶ姿は、保護者や他のボランティアの方へ連鎖していき、笑顔であふれる縁日になりました。発災以降、大人はがれきの撤去に追われ、子どもたちとの時間があまり作ることができていない状況の中で、今回、こども縁日が開催できたのは、子どもたちだけではなく、大人にとっても気の休まる空間を作ることができたと考えています。

家財搬出では、ホテルと拠点近くの家屋の2カ所で行いました。最初に作業に入ったホテルは、住宅再建のため、廃業にせざるを得ないという話を聞きました。この話を聞いたとき、災害がもたらす経済や心身への影響の大きさに驚きを隠せませんでした。津波避難場所である養泉寺の見学では、住職と実際に1月1日に避難された方から、この津波避難場所では約300人が避難し、一夜を過ごしたという話を伺いました。避難場所とはいえ、安全が確保されていない場所で、1月の寒い夜を過ごしたと考え、とても不安だったと思います。

第4陣の最後は、輪島市の見学についてです。今回の活動終了後に輪島市内を訪れ、復旧、復興の現状を見学しました。輪島市で最初に目に留まったのは、発災直後から連日報道で見ていた倒壊したビルの姿でした。そして、車を止めた目の前には、火災により200棟以上が焼け、およそ5万平方メートルが消失した朝市が広がっていました。実際に自分の目で見るとこの景色は想像以上で、言葉を失ったのを今でも鮮明に覚えています。

最後にまとめに移ります。今回の2回のボランティアを通して、3月と8月の七尾市の状況を比較すると、駅のホームや市内の上下水道は復旧しているものの、建物の再建や建物内の水道管、陥没したままのマンホールなど、まだ手がつけられていない場所も多くありました。

続いて、輪島市についてです。活動拠点のある七尾市から輪島市に近づくにつれ、道路の凹凸が目立つようになり、スライドにあるような山肌が滑り落ちている箇所が多くなっていました。火災のあった朝市では、今も規制線が引かれ、復興があまり進んでいない印象を持ちました。輪島市を訪れる道中に多くの仮設住宅を目にしましたが、あまり入居している人を見受けなかったのも、引率教員に理由を聞きました。入居することにより、避難所で生まれたコミュニティが壊れてしまう、孤独感が増してしまうと思っている人が多くいるという原因を知りました。また、復興が遅れている原因を調べると、2次避難をする方が多くなることによりニーズの調査ができないことや、公費解体の申請があまりできていない現状がありました。

2回のボランティアを通して、災害ボランティアは作業系だけではなく、メンタルケアなど、さまざまな活動があることを学びました。また、第4陣の活動終了後に、こども縁日に参加した子どもたちが「毎日遊びに来るから1年中いてほしい」と言っていたという話を仲間から聞いたときは、本当に参加して良かったと感じました。

最後に、お世話になった災害支援団体 sien sien west 様と、10月11日に開設された民間災害ボランティアセンターおらっちゃ七尾の紹介をして終わります。sien sien west 様は、Facebook と Instagram で活動の様子を投稿しています。復旧、復興の今をより深く知ってもらうために、今回は紹介しました。ボランティアという立場だからこそ、見えてくる部分も多くあると思います。また、民間災害ボランティアセンターおらっちゃ七尾のホームページ

では、これから災害ボランティアに行く方を募集しています。こちらも同様に Facebook と Instagram を開設しています。9月の豪雨を受け、被災地ではさらなるボランティアの力が必要とされています。ぜひ確認をしていただき、能登でのボランティアに興味を持っていただきたいと思います。以上で報告を終わります。ありがとうございました。

司会： 大橋さん、ありがとうございました。続いて、篠原さんよろしくお願いします。

篠原： 能登半島地震、災害ボランティア活動の報告をします。
体育学部スポーツ医科学科学生2年の篠原聖真です。簡単に、私が所属している学科を説明します。スポーツ医科学科は将来、救急救命士の資格取得を目指している学科です。救急救命士と呼ばれる人は、救急車の中で応急救置ができる資格です。この学科では困っている人を手助けしたい、そういう人が多く集まっている学科です。



私からは2点お話をします。1点目は季節に応じた備えについてです。2点目は現地でのボランティア以外の支援方法についてです。

初めに季節に応じた備えについてです。私は3月4日から3月7日まで、石川県の七尾市でボランティア活動を行いました。3月でもまだまだ寒くて、活動していた3月5日、3月6日は、最低 -0.8 度、日中の最高気温は8度で、2桁に満たない気温の中で活動を行いました。寝る時や活動の合間でも、ストーブがないと疲労回復ができないような寒さだったのを覚えています。

そんな寒い冬に被災した場合、皆さんはどうしますか？日中は日も出ていて、活動しているので、まだ身体は暖かいと思います。しかし、夜になると日も沈み、休む時間になるので、身体を動かす活動もしないと思います。そのため、寒さを実感することが多くなります。そういう時こそストーブの様な暖房器具が欲しくなるとは思いますが、本格的な支援が始まるまでは、今ある備蓄で何とかやりくりをしなければいけません。電気がつかないかもしれません。灯油も限りがあると思います。ストーブは近くであれば暖かいかもしれませんが、避難所の様な広い場所全体を暖めるには力が弱く、寒い中で生活することがあると思います。そこで、一人一人ができる寒さへの備えとして何かあるのかを考えました。

冬に災害支援に行って実感した、寒さへの備えとしてこういうものがあればいいと思ったものを紹介します。それが保温シート、ホッカイロ、エアーマット、電熱毛布や雨ガッパです。避難所では、特に最初は、床に毛布1枚だけを敷いて生活する場面もあると思います。冬場だと底冷えがありますし、硬い床に寝る事で身体の痛みも出てくるとは思います。それらの軽減にエアーマットの備えがあるといいと思いました。電熱毛布だと直接、体を温めることもできます。最近では、コンセントタイプではなく、モバイルバッテリーで温めることができる USB

タイプもあります。こういう備えもあると、冬場を暖かく過ごせると感じました。雨カップだと冷たい空気や雨も遮断することができ、体温低下を防止することができます。また、気密性も高いため、自分の体温が外に逃げにくい特徴もあります。

水や保存食、ライト、モバイルバッテリー、トイレ用品などの普段の備えのプラスアルファとして、冬場はこういう備えがあれば安心して過ごせると思いました。

逆に、夏に被災した場合はどうしますか？夏に多い熱中症などは備える事で予防ができます。個人の備えで予防することで、災害時に貴重な医療資源となる救急車を占有しないためにも、できる事はないか考えました。私は冷感タオル、ヒヤロン、ハンディファン、スポーツドリンク、そしてエアーマットを考えました。例えばスポーツドリンクですが、普通の水よりも吸収が早いため、失った塩分やミネラルも同時に補給できる特徴があります。また、疲労がたまると、体温調節をする機能の低下や免疫力も下がっていき、暑さに対する抵抗力がなくなってしまう。そのため、床に直接寝るよりも少しでも疲労回復につながるエアーマットがあるといいと感じました。

続いて、現地でのボランティア以外の支援方法についてです。能登半島に災害ボランティアとして行って、2カ月経っても復旧復興があまり進んでいない、まだまだ支援が足りていないと強く感じました。そこで自分に何かできることはないかと考え始め、またボランティアに参加しようと考えました。しかし、学生の一人暮らしでお金が足りないことに直面してしまい、この考えは断念せざるを得ませんでした。再度考えていたところ、東京からでも何か支援できることがあるのではと考え始めました。そこで思い付いたのが、募金や募金活動を行うことです。そのときに浅倉先生から、ちょうど災害ボランティアに行った学生向けに、募金活動の案内がありました。それが多摩市で開催される「せいせき桜まつり」での募金活動です。「せいせき桜まつり」の一角に、能登半島の現状や支援活動を伝えるブースを設けて、お祭りに来場された方に、現状をお知らせした後に募金をお願いする活動を行いました。

活動当初、私は募金活動で被災地支援ができればいいと感じていましたが、活動を通して、災害を風化させない、させたくないという気持ちも芽生えてきました。被災地の方々も金銭的な支援を望むと同時に、備えておけば防げたことなど、今回の被災経験を教訓にしてほしいと思っているはずです。例えば岩手県宮古市の大津波記念碑には、ここより下に家を建ててはいけないという教訓が書かれています。こういうことから、募金などの金銭的な支援も私たちが行える支援の一つだと思いますが、被災地を想うこと、風化させないことも支援だと考えました。

他にも東京でできる支援方法がありました。この写真は、先ほどの募金活動のブースの隣で行われていた特産品の販売ブースです。特産品の販売・購入も支援活動になると思います。特産品を販売・購入することで、被災地の生産者にお金が回ります。被災地の経済の活性化に貢献し、更にはそれが税収として被災地の行政に還元されるため、特産品を売る・買うこと被災地の支援につながるようになります。調味料やご飯のプラス1品として、今日から出来る支援

です。ぜひ今日から、特産品の購入で被災地の支援をしてみてください。

まとめに移ります。私からは2点話しました。1点目は、今の備蓄に追加して季節に応じた備えをすることです。夏であれば暑さ対策、冬であれば寒さ対策です。2点目は被災地に直接ボランティアに行かなくても、支援できることはたくさんあるということです。募金をする、集める、被災地を想うだけでも支援になると思います。また、被災地の特産品を購入することでも支援ができます。被災地はまだまだ支援が必要な状況です。皆さんにも今出来ることを考えて行動していただけると幸いです。ご清聴、ありがとうございました。

司会： 篠原さん、ありがとうございました。続いて、淵野さんよろしくお願いします。

淵野： 私が災害現場で感じた、コミュニケーションの大切さや難しさについて発表します。国土館大学理工学部基礎理学系学生4年の淵野葉子です。三重県四日市出身、2003年生まれの21歳です。現在はボランティアチーム援人の一員として活動しています。



初めに私がボランティアを始めたきっかけについてお話しします。テレビなどで災害の様子を見て、自分にも何かできないか感じていましたが、何も行動に移せませんでした。しかし、大学2年生の頃、授業で「防災リーダー養成論」を履修していた際にボランティアの募集があり、参加しました。ボランティアに参加した際に、ボランティアチーム援人という方たちと一緒に活動しました。その方たちと色々な話をするうちに、仲間に入らせてもらうことになりました。

私は今まで静岡県、茨城県、千葉県、石川県での災害ボランティア活動を行ってきました。ボランティアの主な活動内容は、学校などが会場となり、地域住民の憩いの場をつくるサロン運営、被災した家などにがれきや土砂が入り込んでいるので、それらの撤去や食事を提供する炊き出しなどでした。この中で、私は土砂やがれきの撤去をメインで行ってきました。静岡県などでは豪雨災害や土砂災害が起き、床下に入り込んだ土砂やがれきの撤去を行いました。石川県七尾市では、災害ごみの仕分け作業、宿泊させていただいた専門学校のまだ手が付けられていない部分の片付け、地震の揺れによってずれた地面のタイル直しを行いました。

活動を行う中で、人の力では限界があること、被災し落ち込んでしまっている方とのコミュニケーションの難しさ、そしてボランティア不足やボランティアの高齢化という課題を感じました。ボランティアを始めた最初の頃は、自分が発した言葉で不快にさせてしまうことがないか、伝えたかったことと違う受け取り方をされてしまうのではないかなど、自分の知らないうちに被災者の方を傷付けてしまうのではないかなという不安から、被災者との対話を避け、他の方が話しているのをただ見ているだけでした。しかし活動しているうちに、コミュニケーションの大切さに気がきました。

私がコミュニケーションは大切だと感じた瞬間は、静岡県川根本町で活動した際のことです。現場が町で唯一の工場で、地域住民に何としてでも復興させたいという思いがあり、町民と一緒に活動しました。最初は一步を引いてしまっていたのですが、少しずつ話をするうちに地域の方の強い思いを感じ、私も地域の方々と関わりを築き、復興に向けて力になりたいと強く感じ、コミュニケーションはとても大切だと感じました。コミュニケーションは活動する上で必要不可欠です。積極的にコミュニケーションを取らなければいけないことは理解していましたが、なかなか行動に移せませんでした。コミュニケーションがなければ、活動を効果的に行えません。相手が何を求めているのか、他の場所の被害状況や有益な情報の共有ができなくなるなど、活動に支障が出てしまいます。

そういうことをなくすために、私は次のことを意識して取り組みました。話をする際は、作業する手を止め、丁寧に傾聴し、分かりにくい言葉や極端な遠回しの言葉を使わずに、被災者の気持ちや言葉を受け止め、親身になり落ち着いたトーンで話し、ジェスチャーなども交えた非言語コミュニケーションを活用し、状況に応じた適切な情報提供や確認を行うなど、誠実な対応を心掛けました。その結果、被災者の方から多くのストレスや不安があったが、それを言葉にする機会がなかなかなく、話ができて心が軽くなった、復旧作業に向けてどうすればいいのか分からなかったから不安が減った、遠い所から来てくれてありがとうという言葉をいただき、コミュニケーションを取る事自体が心の助けになっていることに気付かされました。

私が感じたこれからの課題は、言葉の壁や被災者への継続的な支援、人手の確保です。日本語が得意ではない外国人が取り残されてしまわないように、情報提供など、言葉の壁を乗り越えることが重要です。また、日によって違うボランティアが対応すると、お互いの状況把握などが困難になってしまい、被災者がストレスを感じてしまうかもしれません。そのため、継続した支援が重要だと感じています。また、被害が大きいことや広域被害によるボランティア不足、被害が周知されていない地域でのボランティア不足などの課題があると感じています。災害ボランティアを通して、コミュニケーションや信頼関係、チームワークの大切さを学んだとともに、これからもボランティア活動を続けていきたいと思います。発表は以上です。ありがとうございました。

司会： 淵野さん、ありがとうございました。以上で学生からの発表を終わります。三者三様の発表がありました。学生の発表がありましたが、こちらを聞いてもらった上で、前原さんからもう一度、被災地支援における大学生の役割、感想等を含めていただいてもいいですか。

前原： 学生が来るだけで、地域の人たちがとても喜ぶことが結構あります。能登半島は高齢化率が高いと言いましたが、学生を見るだけで喜ぶ人たちがいます。存在だけでボランティアというか、存在が宝というか、大事だと思います。ただし、学生の難しいところは、お金の問題、移動費の問題があると思います。そこをどうカバーすればいいのかと思いながら聞いていました。

A man wearing a red t-shirt and a tan cap is speaking into a microphone. He is standing in front of a light-colored wall with a horizontal line. The text "災害NGO結 代表 前原 土武氏" is overlaid at the bottom of the image.

災害NGO結 代表
前原 土武氏

司会： 前原さん、ありがとうございます。本学としても、本日、発表してもらった3人だけではなく、この教室の中にもたくさんのボランティアをしてきている学生がいます。今後も学生が被災地で活躍できる場の提供や、授業の展開などをしていきたいと考えています。



VI . 災害ボランティア活動資料

先遣隊第 1 次調査報告書

先遣隊第 2 次調査報告書

先遣隊第 3 次調査報告書

先遣隊第 4 次調査報告書

災害ボランティア活動概要（第 1 ～ 3 陣）

災害ボランティア活動概要（第 4 陣）

第 1 ～ 4 陣共通資料

派遣計画書

説明会資料

ボランティア同意書

国土舘大学への依頼内容

国際医療福祉専門学校七尾校資料

先遣隊第1次調査報告書（1月16日時点）

活動期間：2024年1月7（日）～16日（火）現在

視察場所：石川県

七尾市：国際医療福祉専門学校七尾校（救急救命士養成校）、公的指定避難所

羽咋市（はくいし）：国立能登青少年交流の家

派遣メンバー

1/7（日）- 1/15（月）：植田広樹（教授）

1/7（日）- 1/8（月）：曽根悦子（講師）、都城治（助教）、坂梨秀地（助教）、吉川文隆（職員）

1/8（月）- 1/9（火）：永吉英記（教授）

1/8（月）、1/12（金）- 1/14（日）、1/16（火）- 1/17（水）：中林啓修（准教授）

1/13（土）- 1/14（日）：田中秀治（教授）

目的：物資の支援を行い、災害支援ボランティアを実施するための具体的なニーズ調査、周辺施設・団体の活動状況等の調査を実施すること。

現地被害状況（基礎情報）

七尾市は人口48,352人、21,776世帯（令和5年11月末現在）であり、令和6年1月1日16時10分に発生した令和6年能登半島地震では震度6強を観測し、避難者数は1,570人（16日時点）となっている。

（被害状況）

建物被害について、七尾市内は珠洲市、輪島市と比べて建物損傷被害は少ないが建築年数が古い木造建築物の被害が散見された。拠点となった国際医療福祉専門学校七尾校ではレンガ路面のひび割れ、図書館の本棚の転倒等があった。

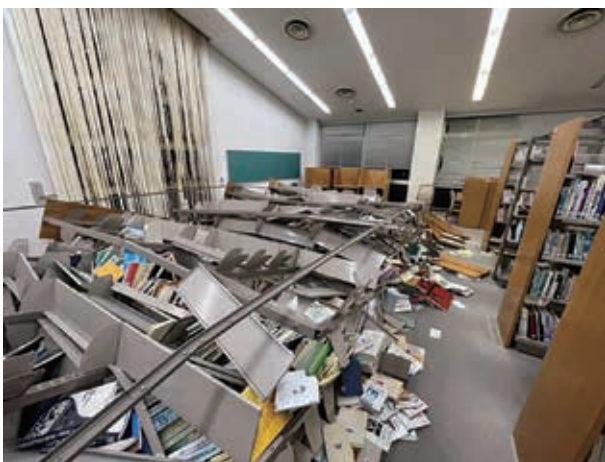
道路被害について、陥没、ひび割れ等の被害が散見された。またマンホールの浮き出しがあり、また橋梁結合部の損傷が比較的多かった。これから本格的な雪の季節となる中、雪の重みによる建物倒壊や積雪による路面が見えずに道路損傷部を通過することでパンク等の車両損傷が懸念される。



鉄道J R七尾線は現在も運転再開の見込みはない。（1/16時点）市内全域で断水しており、復旧のめどはたっていない（1/16時点）電気は復旧している。



市内状況



国際医療福祉専門学校の状況

調査先情報・結果

1. 国際医療福祉専門学校（七尾校）

指定避難所では無く支援物資が届かないものの、公立能登総合病院が隣接しており現地に派遣された医療班からも協力を依頼され物資の不足が著しい状態。また本学体育学部OGが勤務する（平成27年卒，星野氏，旧姓武田）。※1/16時点で電気復旧、断水

●以下、活動概要

- ・校長、副校長へご挨拶
- ・支援物資の受け渡し（表1）
- ・被災地域の現状把握・ヒアリング
- ・ボランティア活動に関する調査

学生ボランティア派遣時は、滞在拠点としての敷地内使用も可能と申し出を受けた。

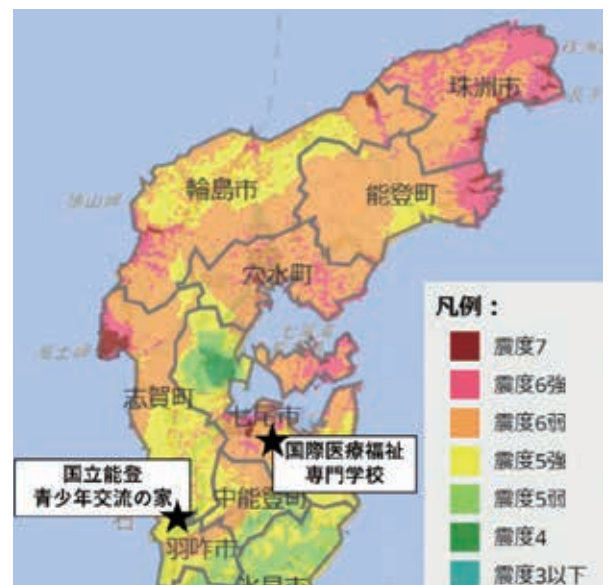


図1 本派遣に伴い訪問した主要地域と面的推定震度分布図

表 1 現地支援物資一覧

No	項目	物資名称	個数	支援元
1	飲料・食料	飲料水 500ml	37 箱 (444L)	国土舘大学・多摩市内福祉施設
2	飲料・食料	生活用水	360L	国土舘大学
3	生活支援	簡易便座 (6 個入り)	20 箱	多摩市
4	生活支援	携帯トイレ	160 回分	多摩市内の企業・福祉施設
5	生活支援	ポリタンク	30 個	国土舘大学・多摩市
6	生活支援	ガスコンロ	7 台	多摩市
7	生活支援	ガスボンベ	36 本	多摩市
8	生活支援	ウェットティッシュ	2 箱	多摩市
9	生活支援	毛布	40 枚	国土舘大学
10	生活支援	ボディシート	15 セット	国土舘大学
11	生活支援	ブルーシート 10m × 10m	1 枚	国土舘大学
12	生活支援	黒色ゴミ袋	100 枚	国土舘大学
13	教材	救急救命士国家試験問題		国土舘大学

支援物資搬送の様子



2. 国立能登青少年交流の家

住 所：〒 925-8530 石川県咋市柴垣町 14- 5 - 6

電話番号：TEL 0767-22-3121 FAX 0767-22-3125

※ 1 / 7 時点 電気・水道復旧、建物被害なし、海拔 65m であり避難場所に指定

本学の学生ボランティア派遣時の滞在拠点として調査を実施。

別紙に詳細記述

3. 公的指定避難所・ボランティアニーズ

七尾市立中島小学校を訪問した。避難者は 200 名 (七尾市 HP) で、国際医療福祉専門学校の学生 1 名が避難している。七尾市は平成 26 年より市民が主体となって避難所運営を行う体制を構築しており、該当の避難所においても、避難所運営組織が機能しており、市民 (被災者) が中心となって避難所の運営を行っていた。国家試験を 3 月に控えている国際医療福祉専門学校の学生も避難所運営に関わっており、避難所運営から抜けて、国家試験勉強をするという環境はない状況であった。避難所は感染者が増加傾向にある中、感染者等の隔離配置や玄関付近での支援物資の整理などが整然と行われていた。他方、市職員は 3 名おり、災害対策本部との連絡や対外的な対応などを行っている。外部支援は、日本看護協会などが医療、保健衛生部門での支援を行っており、また大阪府箕輪市のトイレトレーラーが設置されていた。断水被害のため、飲水、生活水の支援が定期的に入っ

ている模様。

ボランティアの受付について、現在は県外者の受け入れは行っていない。今後、ボランティアセンターの開設等により、受け入れが可能になることが予想される。地域によっては市の指定された避難所ではない施設に避難している被災者がいるとの情報から、物資搬送等の支援の必要性を感じた。なお、被災者配慮のため、短時間の視察に留め、写真撮影は実施していない。

4. 国土館大学同窓会 石川県支部

同窓会から情報提供を受け、石川県支部会長、事務局長を訪問した。

同窓会石川県支部会長：島畑 米造（しまはたよねぞう）氏 S55 体育卒，小松市在住

同支部事務局長：中原 智吉（なかはらともよし）氏 S61 体育卒，小松市在住

小松市内の被害状況について情報提供を受けるとともに、事務局長の関係する鵬学園高等学校（七尾市）が水不足で困っているとの申し出を受けたため、国土館大学から持参した水の配布を行った。また、今後の連携や学生ボランティア派遣時の協力体制について確認を行った。



5. 国際医療福祉専門学校七尾校への学習支援

現在、救急救命学科、理学療法学科、介護学科の3学科で総学生数90名が在籍している。救急救命学科は1年生9人、2年生13人、3年生16人が在籍しており、今回は3年生を対象に田中秀治教授と国土館大学OBにより国家試験対策の講義を実施した。



6. 石川県庁

全般の災害対応状況の把握および、県の対応を取り仕切っている担当副知事チームに対する支援を行うため、1 / 8 および 1 / 12, 13 にかけて、石川県庁を訪問した。

県庁では、下表のような活動を実施した。

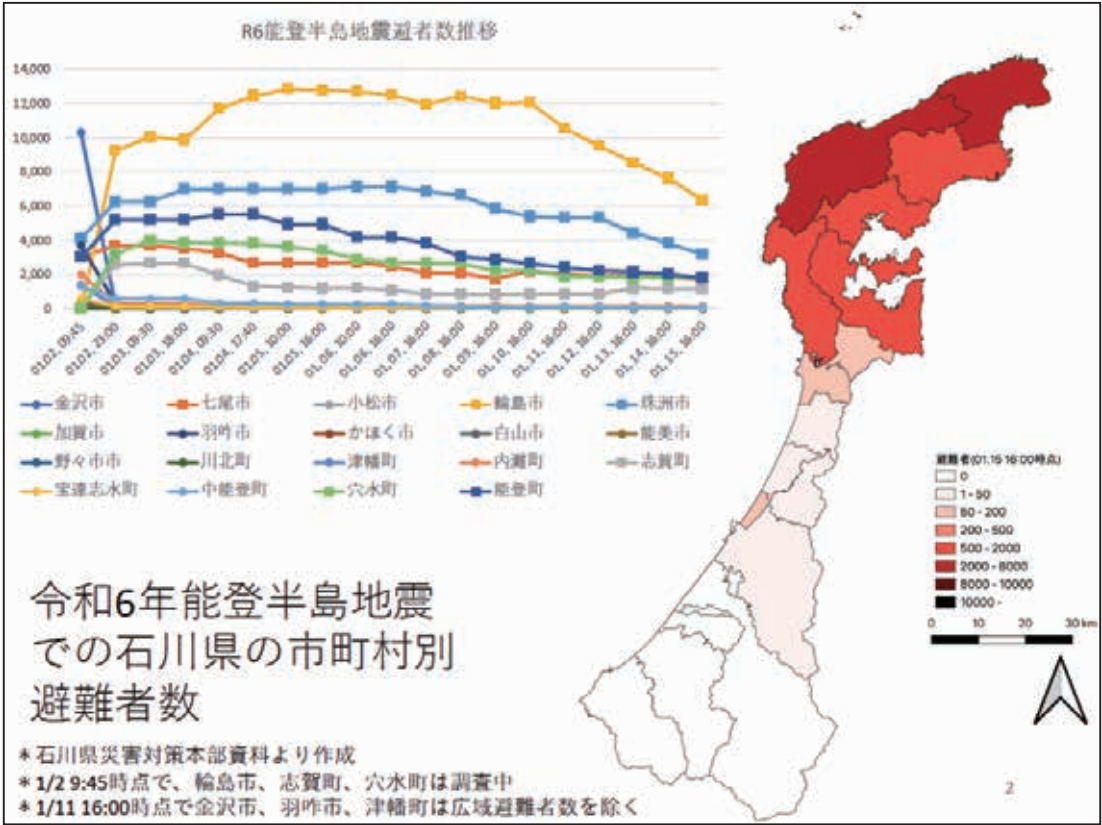
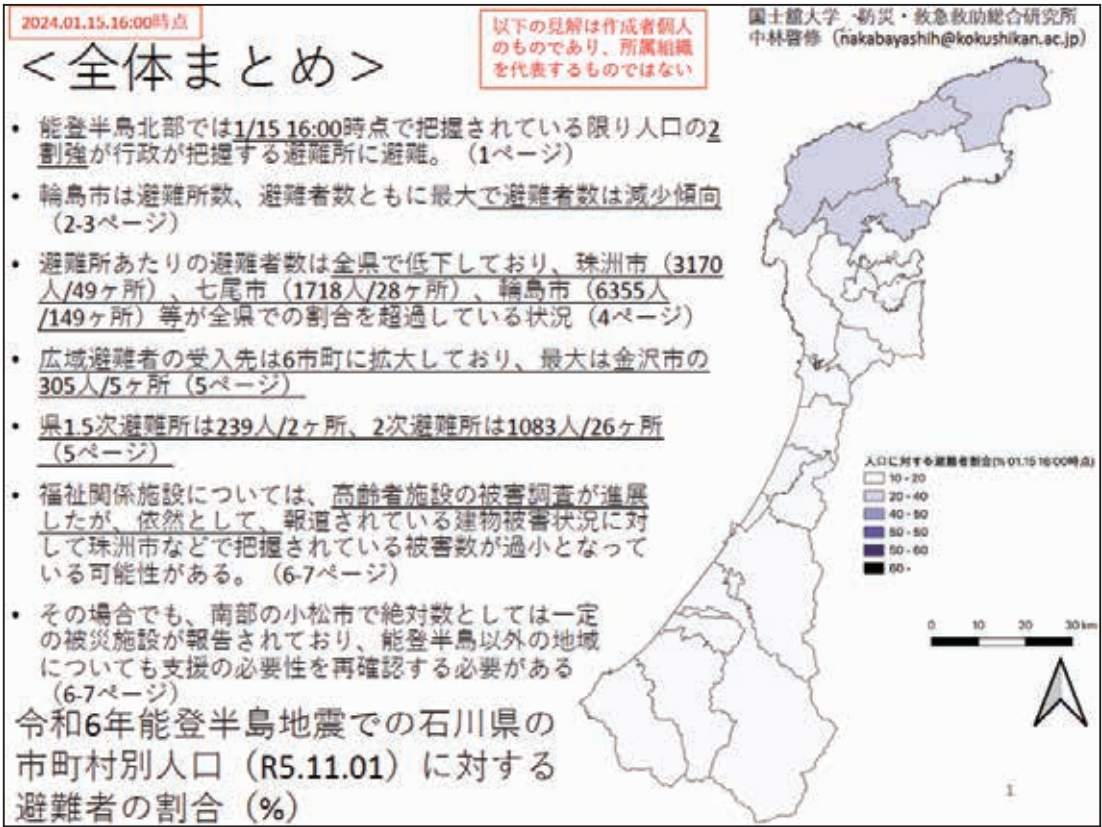
また、これと並行する関連作業として、1 / 2 以降毎日、避難者数および避難所数と被災福祉施設数等に関して、グラフおよび地図として整理した資料を作成し、関係先に提供している（別紙 1 参照）。

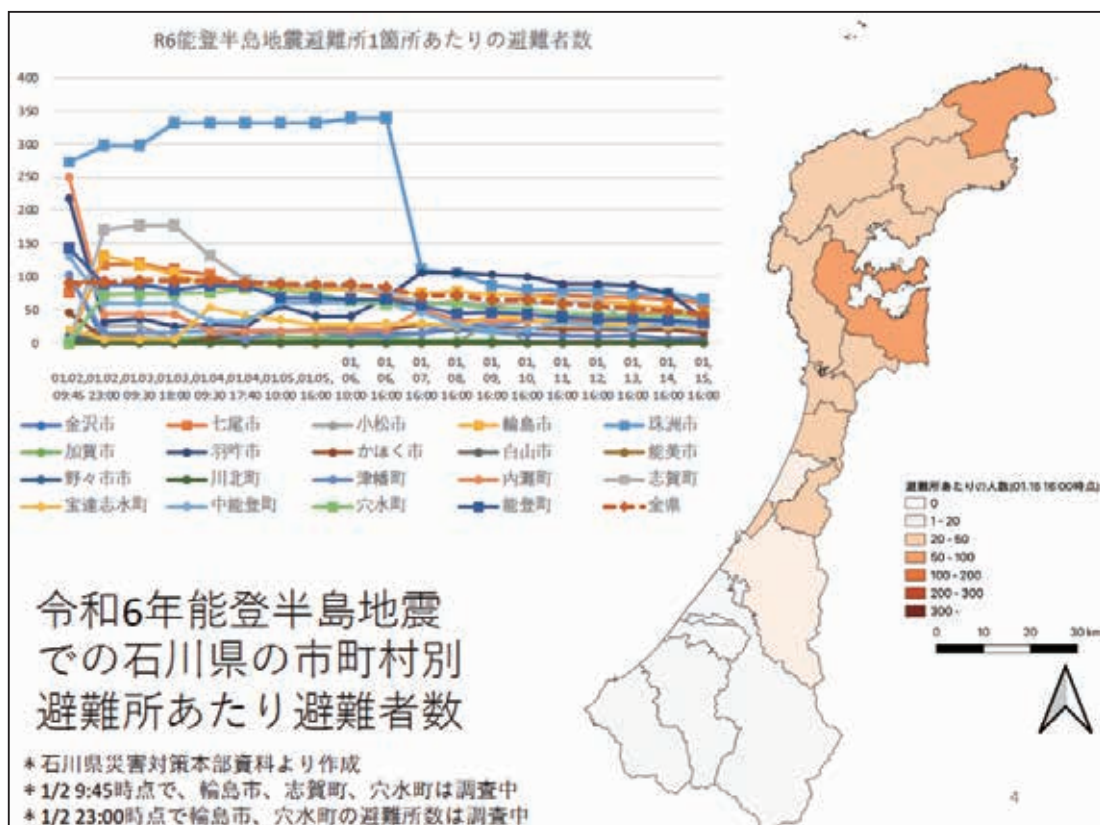
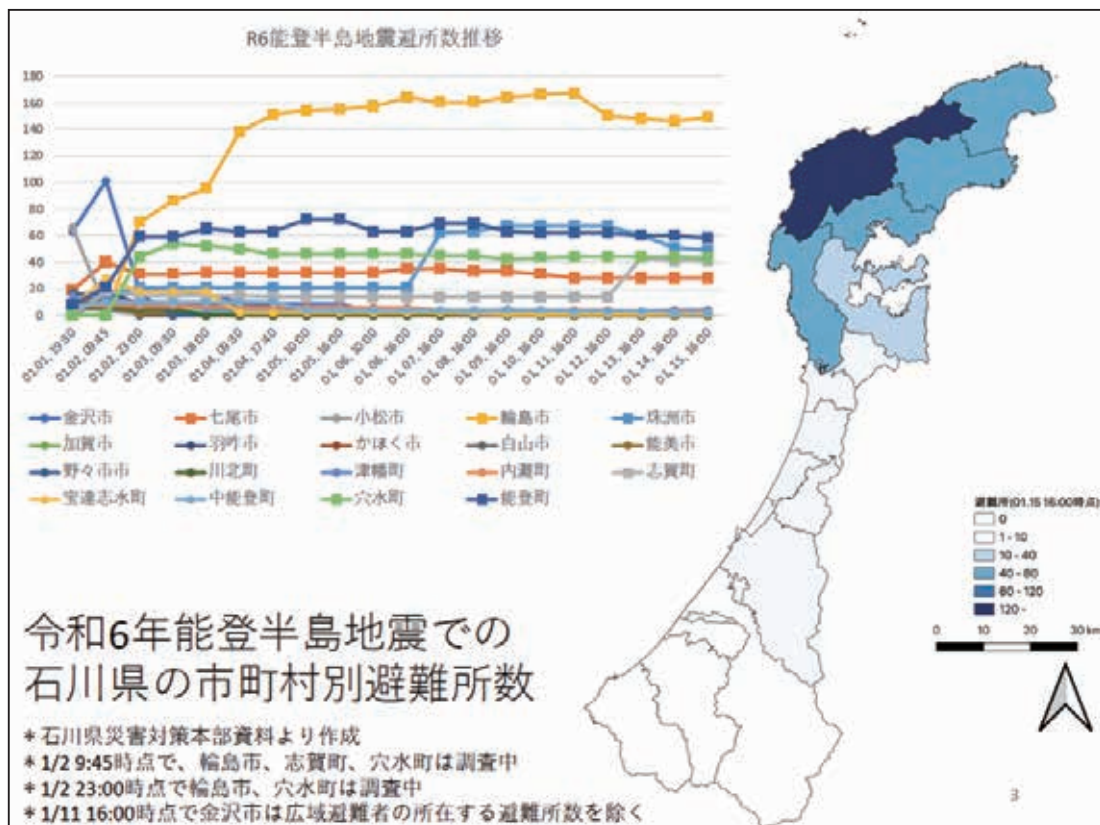
1 / 8 の活動 10:00 着 19:30 離脱	* 担当副知事チームへの支援実施 ▶ 災害救助法の運用および、自衛隊の船舶活用に関するブリーフィング。 * 関係団体との意見：現況および課題感について意見交換 ▶ 交換陸自統合任務部隊県庁連絡所所長および副官 ▶ 応援県連絡員（三重県庁職員） ▶ 防災科研 ISUT チーム ▶ JVOAD 事務局 ▶ 人防先遣隊（能登町に派遣）：特に奥能登の市町の対応状況について情報提供受
1 / 12 の活動 19:00 着 22:30 離脱	担当副知事チームと見通しについての意見交換。DHEAT 事務局と意見交換（県主導の広域避難の対応について）
1 / 13 の活動 9:30 着 20:30 離脱	担当副知事チームに対する支援 罹災証明手続き等、応急期の支援策についてブリーフィング後意見交換・関連情報の収集提供。

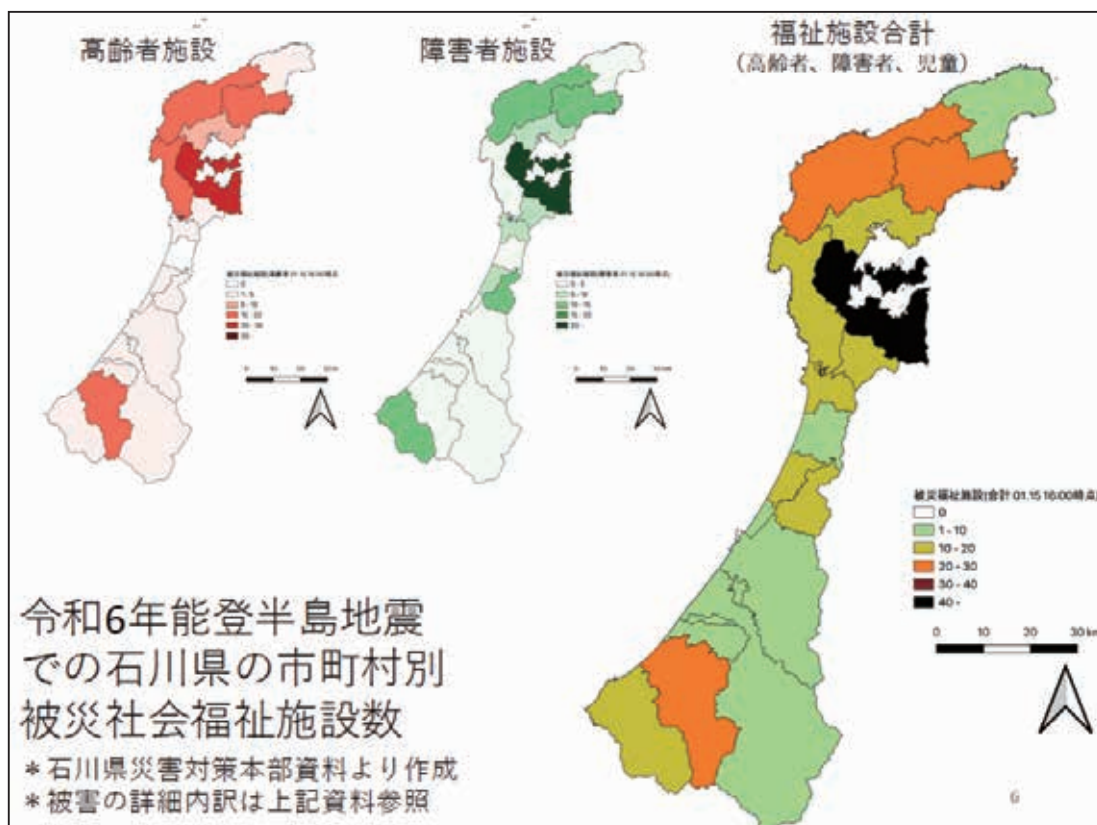
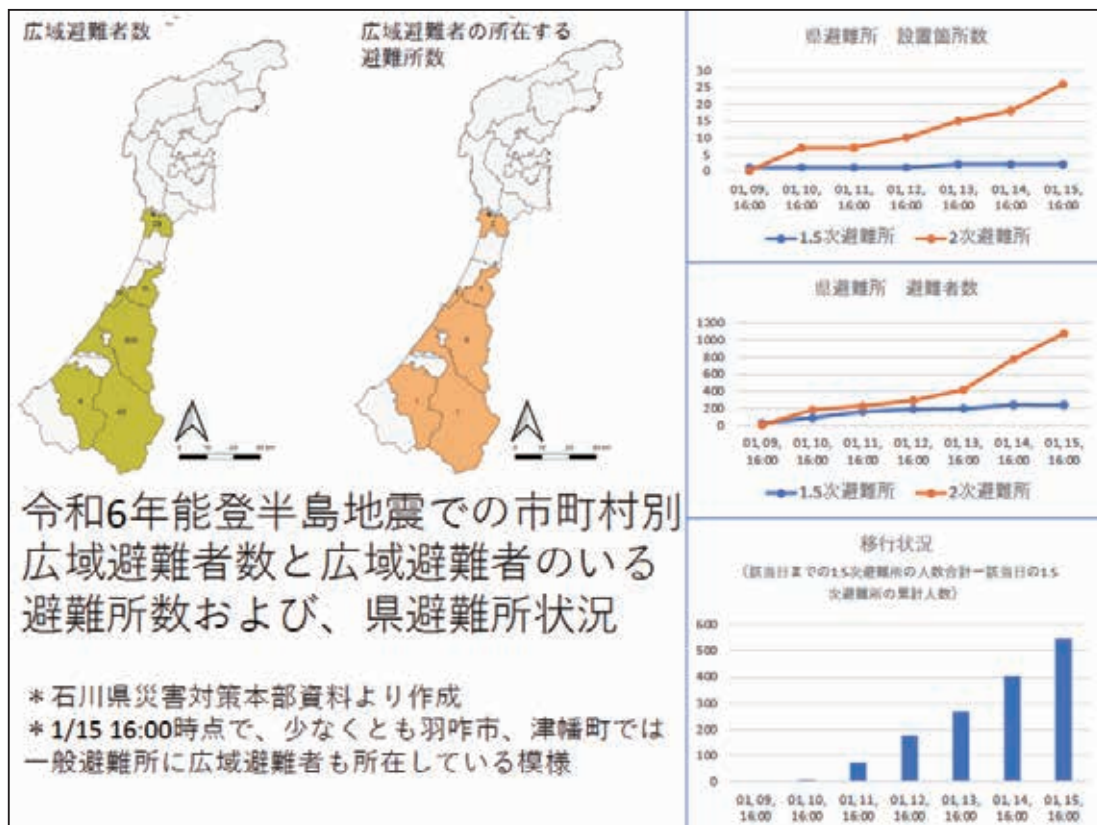
7. 今後の活動について

- ・ボランティアセンターが県外よりボランティア受け入れをしていない為、現地の体制が整うまで情報収集を継続し派遣に向けて準備を進める。
- ・東京から七尾市までは高速道路での移動が容易であるが、積雪状況によって進行ルートについて慎重な検討が必要。（北陸自動車道 or 東海北陸自動車道）
- ・七尾市以北は救助活動が継続中であり、現在までの進入・調査には至らず。道路整備と積雪状況によっては活動も視野に入る。
- ・学生派遣の際の宿泊地としては、国立能登青少年交流の家が最適であるが、今後他のボランティア参加者が多数入る可能性があるため、国際医療福祉専門学校の敷地の借用も考慮する。
- ・国際医療福祉専門学校七尾校の救急救命学科学生に対する国家試験対策の支援は継続的に実施する。

(別紙1)：「R 6 能登半島地震避難者・被災福祉施設等関係データ類」
* 災害対策本部の開催に合わせて更新、提供（サンプルは1/15 16:00 時点のもの）

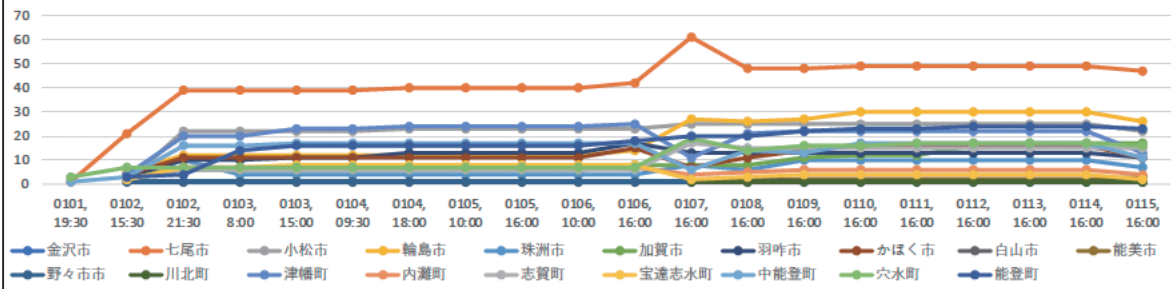






被災福祉施設の判明状況の市町村別推移

7



直近内訳																
市町名	0111, 16:00				0112, 16:00				0113, 16:00				0114, 16:00			
	高齢者 関係	障害者 関係	児童関 係	合計	高齢者 関係	障害者 関係	児童関 係	合計	高齢者 関係	障害者 関係	児童関 係	合計	高齢者 関係	障害者 関係	児童関 係	合計
金沢市	1			1	1			1	1			1	1			1
七尾市	26	22	1	49	26	22	1	49	26	22	1	49	26	22	1	49
小松市	20	5		25	20	5		25	20	5		25	20	5		25
輪島市	17	13		30	17	13		30	17	13		30	17	13		30
珠洲市	8	2		10	8	2		10	8	2		10	8	2		10
加賀市	1	10	1	12	1	14	1	16	1	15	1	17	1	15	1	17
羽咋市	6	7		13	6	7		13	6	7		13	6	7		13
かほく市	7	9		16	7	9		16	7	9		16	7	9		16
白山市	2			2	2			2	2			2	2			2
能美市		2		2		2		2		2		2		2		2
野々市市		1		1		1		1		1		1		1		1
川北町	1			1	1			1	1			1	1			1
津幡町	11	11		22	11	11		22	11	11		22	11	11		22
内灘町	3	3		6	3	3		6	3	3		6	3	3		6
志賀町	15			15	15			15	15			15	15			15
宝達志水町	2	2		4	2	2		4	2	2		4	2	2		4
中能登町	11	6		17	11	6		17	11	6		17	11	6		17
穴水町	9	7	1	17	9	7	1	17	9	7	1	17	9	7	1	17
能登町	12	11		23	12	12		24	12	12		24	12	12		24

(別紙 2)

国立能登青少年交流の家

住 所：〒 925-8530 石川県咋市柴垣町 14- 5 - 6

電話番号：TEL 0767-22-3121 FAX 0767-22-3125

※ 1 / 7 時点 電気・水道復旧、建物被害なし、海拔 65m であり避難場所に指定

本学の学生ボランティア派遣時の滞在拠点として調査を実施。

HP: <https://noto.niye.go.jp/>

○利用料金

・ 宿泊料：施設利用料（1 人 1 泊あたり）900 円

・ シーツ等洗濯料（1 人あたり）300 円

※ 4 泊以上の場合、3 泊ごとにシーツ・枕カバーを交換します。

交換ごとにシーツ等洗濯料がかかります。

・ 食事（1/16 現在食事提供は行っていない）：朝：550 円、昼：680 円、夜：780 円

○ライフライン

1 / 7 宿泊時は断水状態ではあったが、シャワー・トイレ・手洗いなど使用可能であった。

暖房・電気も使用可能

洗濯機は 3 か所（1 か所 5 台）、無料で使用可能、乾燥機は 10 分 100 円

○宿舎内の様子



施設案内図



ランドリー内



和室 3 人部屋



ベッド 12 人部屋

先遣隊第2次報告書（1月29日時点）

活動期間：2024年1月27（土）～29日（月）

視察場所：石川県

七尾市：国際医療福祉専門学校七尾校、公的指定避難所

七尾市災害ボランティアセンター

派遣メンバー

1/27（土）－1/29（月）：永吉英記（教授：所員）、浅倉大地（助教）

田中クララ（ウェルネス・リサーチセンター研究員）

目的：国際医療福祉専門学校が市民に対して行うサロン活動、ボランティアに対して行う宿泊場所の提供等の準備、物資の支援を行い、災害支援ボランティアを実施するための具体的なニーズ調査、周辺施設・団体の活動状況等の調査を実施すること。

現地被害状況（1/29時点）

建物被害、道路被害については第1次先遣隊の報告書の通り。

・交通網

鉄道 J R 七尾線は金沢駅 - 七尾駅間で1/28より臨時ダイヤにて運転を再開。

七尾市までの高速道路は渋滞等もなく、スムーズに現地入り可能

・ライフライン

電気は復旧

断水は継続しているが、29日朝に水道局の方が来校。

建物の手前までは生活用水として復旧済（飲水不可）

→専門学校敷地内の配水管の破断等の疑いがある為、断水は継続中。

・店舗

スーパー（どんたく）は時短営業中（～19時まで）

→品揃えはある程度あるが、惣菜系は残りが少ない。（18時頃）

すき家は牛丼のみで営業再開

他にも時短や持ち帰り限定での営業再開がちらほら。

活動報告・クロノロ

1月27日

- 1:30 国士舘大学多摩キャンパス出発
- 4:10 上信越自動車道東部湯の丸SAで休憩
- 5:50 北陸自動車道名立谷浜SAで休憩・給油
- 7:00 北陸自動車道有磯海SAで休憩・朝食
- 9:30 石川県七尾市国際医療福祉専門学校七尾校到着・ご挨拶
- 10:30 学内委員会 web 参加
- 12:00 雪かき・物資積み下ろし・サロン活動の準備



雪かき



七尾校への物資提供（表1）



七尾校の物資置場



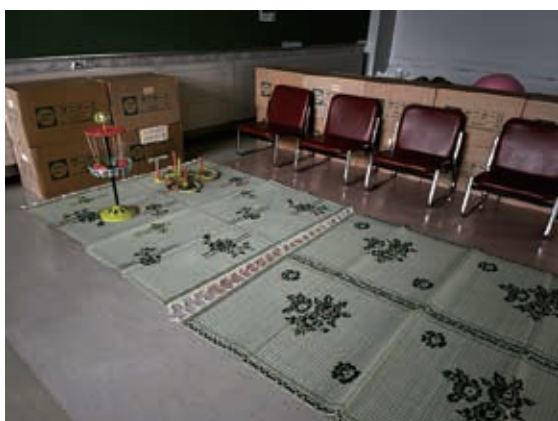
すぐに使えるように準備



洗濯機の設置



サロン会場



ちびっこ遊び場作り



大型電子黒板の確認

18：00 市内巡回・夕食買い出し

22：00 就寝



1月28日

7:00 朝食



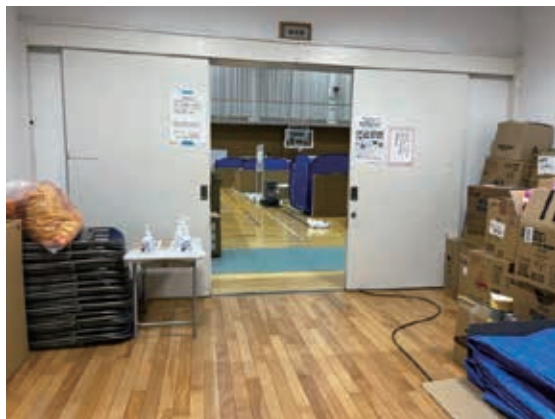
8:00 サロン事業活動場所の整備、清掃



10:00 ボランティア宿泊場所の整備・清掃



11：30 七尾市立小丸山小学校避難所訪問、サロン活動紹介調整
七放送による告知、午後のライブの際のチラシ配布の約束



12：00 七尾市災害ボランティアセンター訪問（事務局長：堀口嘉久様へ挨拶）
添付資料1をお渡しし、国際医療福祉専門学校による支援のご提案・説明



13：30 洗濯機置き場の屋根作成



14:00 サロン利用者と交流、遊び場運営



15:30 雨水を生活用水として再利用できるように貯水



18:00 市内巡回・夕食買出し

22:00 入浴・就寝

1月28日

7:00 朝食

8:00 入浴した分の水をタンクに補給



8:30 国際医療福祉専門学校七尾校の不調車両の整備



9:00 国際医療福祉専門学校七尾校の朝の朝礼に参加

10:00 七尾市災害ボランティアセンター再訪（総務管理課長：直龍芳様）

添付資料2をお渡しし、国際医療福祉専門学校によるサロン活動の周知のお願い

10:30 学外委員会 web 参加

12:00 国際医療福祉専門学校七尾校 出発

14:00 北陸自動車道有磯海 SA で休憩・昼食

15:15 北陸自動車道名立谷浜 SA で休憩・給油

16:30 上信越自動車道小布施 SA で運転手交代

19:30 国土舘大学多摩キャンパス到着・解散

今後の活動について

- ・七尾市災害ボランティアセンターは立ち上げ初期段階。金沢駅集合解散での日帰りボランティアを毎日 20 ～ 30 名程度受け入れをしており、宿泊ボランティアや団体ボランティア等の活用はまだ始まっていない。
- ・正規の流れとして石川県災害対策ボランティア本部が運営している特設サイトに事前登録を行った人・団体に順次活動参加の要請をしている。(1/27 登録済)
- ・国際医療福祉専門学校七尾校による地域支援へのバックアップを行うことが理想的であると考え

①サロン活動

→毎日、10 時～ 11 時半、13 時半～ 15 時で行っているため、人手や管理人が必要。
継続して入れる人材や若い学生の力が必要。

②学校関係者宅の片付け支援

→輪島市や珠洲市に住む学校関係者（教職員・学生等）の家が被災している。
片付けが大変という声もあるため、力になりたいが国際医療福祉専門学校七尾校の教職員だけの力では難しく、若い学生の力が必要。
→ただし、輪島市社協や珠洲市社協への挨拶等の筋を通すことは必要。

感想

今回は男性 2 名女性 1 名で支援活動を行ったが、女性に同行していただけて助かった。

避難所でのアナウンス、チラシ配布や入浴のケア等の気づきは女性目線がないと、どうしても抜けがある。

災害ボランティア活動の目的は「被災者の自立・生活再建」です。

今回の場合、国際医療福祉専門学校七尾校や七尾市の住民の方が前向きに復旧・復興活動に向き合える環境作りを助けていくことが必要だと考えます。

そのため、表に出るのは「国際医療福祉専門学校七尾校」であり、国土舘大学は裏支えであることが大事だと思います。

今一度この考えを頭に、多様な支援活動を展開していくべきだと思います。

表 1 現地支援物資一覧

No	項目	物資名称	個数	支援元
1	生活支援	遊び道具	多数	こどもスポーツ教育学科学生有志
2	飲料・食料	米 20kg	8 個	多摩市
3	飲料・食料	ベビーフード 48 個入り	16 箱	多摩市
4	飲料・食料	らくらくミルク 24 缶入り	5 箱	多摩市
5	飲料・食料	水 2L × 8 本	7 箱	町田ビルゼアスポーツクラブ
6	飲料・食料	OS-1 300ml × 24 本	2 箱	町田ビルゼアスポーツクラブ
7	飲料・食料	OS-1 1500ml × 6 本	6 箱	町田ビルゼアスポーツクラブ
8	生活支援	ヨガマット	23 枚	町田ビルゼアスポーツクラブ

先遣隊第3次報告書（2月8日時点）

活動期間：2024年2月6日（火）～8日（木）

視察場所：石川県

金沢市：石川県庁

JVOAD（全国災害ボランティア支援団体ネットワーク）

石川県県民文化スポーツ部女性活躍・県民協働課（ボランティア担当部署）

七尾市：国際医療福祉専門学校七尾校

国際医療福祉専門学校七尾校の所有する寮3か所

派遣メンバー

浅倉大地（助教）

目的： 国士舘大学では七尾市の国際医療福祉専門学校への支援を行うために、①2/19～23、②2/28～3/2、③3/4～7の日程で学生のボランティア派遣を計画し、募集を開始した。当初は各日程10名程度ずつを想定していたが、定員を大幅に上回る100名近い応募が見られた。学生の善意を無駄にしないために、1人でも多くの学生に活動をしてもらえるように石川県、七尾市災害VC、国際医療福祉専門学校と具体的な調整を実施することとした。また、公共交通機関での現地入りを想定し、実地調査を行った。

活動報告・クロノロ

2月6日

8:40 自宅出発

10:45 東京駅から北陸新幹線で金沢へ

13:00 金沢着 昼休憩

14:30 石川県庁内 JVOAD 訪問・打ち合わせ

15:00 石川県県民文化スポーツ部女性活躍・県民協働課訪問・打ち合わせ

16:00 JVOAD 内で軽作業

17:00 県庁 OUT

金沢駅前ホテル1泊



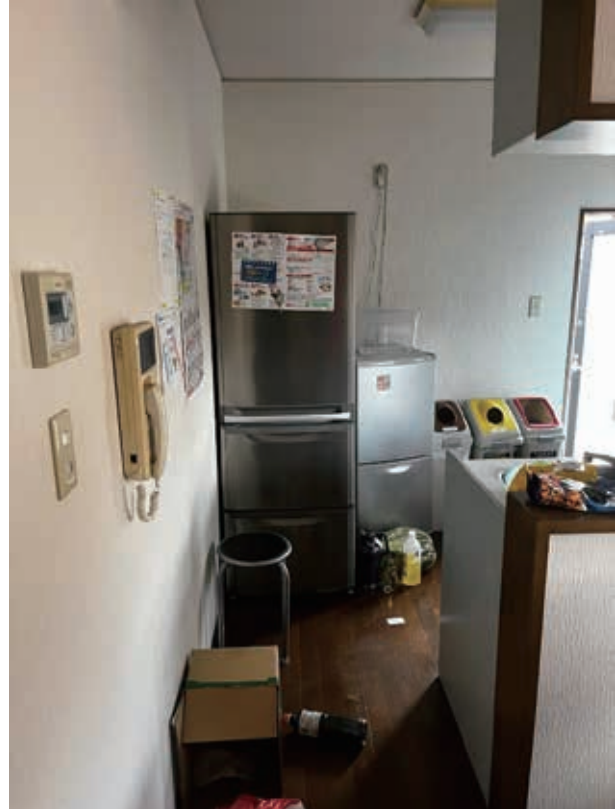
2月7日

- 6:00 強い余震で目が覚める
- 7:00 秋期授業成績付け
- 8:00 金沢駅から IR いしかわ鉄道線、七尾線を使って七尾へ
- 9:40 七尾駅到着徒歩で国際医療福祉専門学校へ
- 10:15 国際医療福祉専門学校へ
校長先生、副校長先生へ挨拶
ボランティア活動の打ち合わせ
- 12:30 昼食
- 13:30 サロン活動支援・見学
- 16:30 所員会 web 参加
- 19:00 夕食
- 22:00 就寝

2月8日

- 7:00 起床
- 8:40 国際医療福祉専門学校朝のミーティング
- 9:00 被害を受けた寮3カ所の見学、活動内容打ち合わせ
- 11:00 七尾駅から七尾線、IR いしかわ鉄道線を使って金沢駅へ
- 13:00 金沢駅到着
- 14:00 金沢駅から北陸新幹線で東京駅へ
- 17:00 東京駅
- 17:50 自宅着、出発
- 19:30 多摩南野キャンパス到着報告書作成
解散





今後の活動について

- ・ 石川県における災害ボランティア活動は現時点で県本部が統括し、事前受付制となっている。
2 / 8 時点では金沢からの日帰りバスでのみ参加者を募集している。
- ・ 国土舘大学は国際医療福祉専門学校の支援をえることで、七尾市内での現地集合・現地解散をすることが出来、宿泊・食事も含め「自己完結」することが出来る。
- ・ 石川県県民文化スポーツ部女性活躍・県民協働課の担当者の方は「自己完結」出来るようであれば、頼もしくありがたいという事で、七尾市災害 VC とも我々の受け入れのために調整をしていただけるとのこと。
- ・ 結果が出来るまでは数日～1 週間程度お時間をくださいとのことで、結果を待っている。
国際医療福祉専門学校は複数の寮を抱えており、被災している。

学生の個人物資はすでに取り出されているが、共有財産（冷蔵庫や洗濯機、レンジ等）はまだ室内に取り残された状態で、4月以降の運営のためにも、取り出しておくことを希望している。また、半壊の寮については、屋根瓦の状態等も確認をしたいが、出来ていないとのことで、ドローンの活用等も期待される。

感想

現地には倒壊家屋なども多々あり、まだまだこれからボランティアが本格化することが予想される。七尾市までは道路状況も不安がなく、渋滞等も朝夕しか発生していないため、今後数日～数週間でかなり活発にボランティア活動が展開されることが予想される。

国土舘大学はあくまで国際医療福祉専門学校への支援を基本としつつも、「自己完結」の原則を守っていくことで、七尾市災害VCとも連携し、市内を中心に活動をしていくことが望ましいと考える。

ボランティアの世界において「パターンリズム¹」への懸念があり、今回の被災地支援においても、支援者の側は特に注意が必要である。

支援者側は「本当に被災者のための活動になっているか」「自分たちの自己満足の活動になっていないか」を常に自省しながら活動にあたる必要があり、今後の学生派遣においても、事前学習などでしっかりと意識をさせたいと思う。

1 「強制される者の福利、善、幸福、必要、利益あるいは価値になるという理由だけで正当化される当該者に対する自由な行為への干渉」 Dworkin,G.

先遣隊第4次報告書（7月4日時点）

活動期間：2024年7月2日（火）～4日（木）

視察場所：石川県

金沢市：石川県庁

JVOAD（全国災害ボランティア支援団体ネットワーク）

石川県県民文化スポーツ部女性活躍・県民協働課（ボランティア担当部署）

七尾市：七尾市災害ボランティアセンター

国際医療福祉専門学校七尾校

Sien sien WEST（石崎地区を拠点とする NPO）

のと楽（宿泊施設候補） 1泊 7700 円

One・Day・Fam（宿泊施設候補） 1泊 5000 円

穴水町：穴水町災害ボランティアセンター

派遣メンバー

浅倉大地（講師）

目的：国土舘大学では 2024 年能登半島地震の被災地支援として、これまで① 2/19～23、② 2/28～3/2、③ 3/4～7 の日程で学生のボランティア派遣を行った。3 陣累計で 71 名の学生が石川県七尾市で活動を行った。被災地ではボランティア募集が継続して行われている状況にあるため、長期休暇期間の 8 月に改めて学生のボランティア派遣を検討する。そのための実地調査を行った。

活動報告・クロノロ

7月2日

9：40 自宅出発

11：30 東京駅から北陸新幹線で金沢へ

14：15 金沢着 昼休憩

15：00 所員会事前ミーティング web 参加

15：30 石川県庁内

JVOAD 訪問・打ち合わせ

16：00 内閣府政策担当官付

参事官付主査甲様と打ち合わせ

17：00 県庁 OUT

金沢駅前ホテル 1 泊



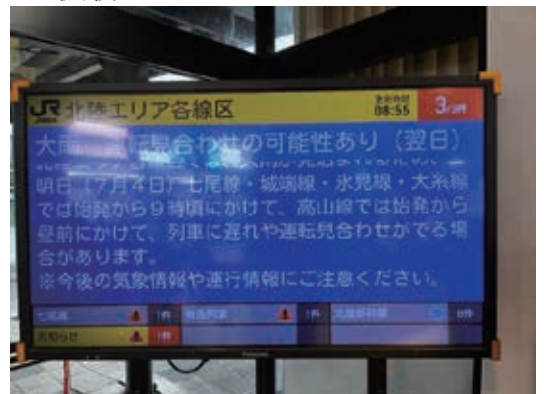
7月3日

- 8:30 金沢駅から能登かがり火1号を使って七尾へ
- 9:50 七尾駅到着 バスで七尾市災害ボランティアセンターへ
- 10:00 七尾市災害ボランティアセンター到着
直様と打ち合わせ
- 10:30 徒歩で国際医療福祉専門学校七尾校へ
途中昼食
- 12:00 国際医療福祉専門学校七尾校到着
玉村先生へ挨拶
ボランティア活動の打ち合わせ
- 12:30 徒歩で七尾駅へ
- 13:10 のと鉄道で穴水へ
- 14:00 穴水駅到着
- 14:05 穴水町災害ボランティアセンター到着
事務局長関様、橋本様と打ち合わせ
- 14:44 穴水駅発のと鉄道で和倉温泉駅へ
- 15:30 和倉温泉駅到着 徒歩で旧石崎保育園（Sien sien WEST 拠点）
- 15:40 Sien sien WEST 拠点到着
今井様、外屋敷様と打ち合わせ
- 16:00 徒歩でのと楽、One・Day・Fam（宿泊施設候補）へ
- 17:00 One・Day・Fam、のと楽（宿泊施設候補）で調整後徒歩で和倉温泉駅へ
- 18:00 和倉温泉駅から七尾線で七尾駅へ
明朝の天候悪化による運休予測を確認。七尾駅から金沢駅へ
- 19:40 金沢駅到着
金沢駅前ホテル1泊



7月4日

- 7:00 起床
- 8:00 金沢駅から北陸新幹線で東京駅へ
- 10:30 東京駅
- 11:30 世田谷キャンパス到着報告書作成
解散



今後の活動について

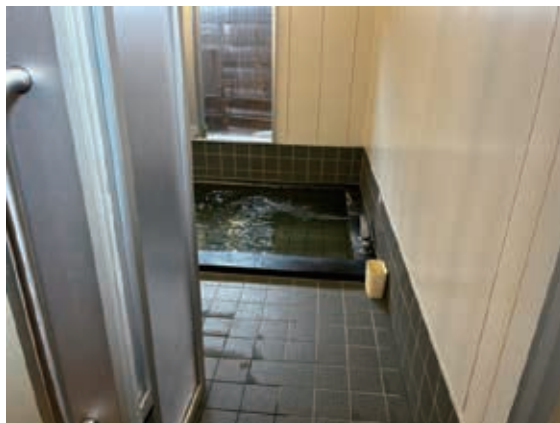
- ・七尾市災害ボランティアセンターは7月から週末型の運営に切り替えており、7月末で閉所する予定。(よって8月の活動は通常業務の範囲内で実施予定となり外部募集予定なし。)
- ・国際医療福祉専門学校は未だ断水中であり、図書室や職員室前の書籍・書類類の活動は手付かず。ただし8月10～14日の期間は学校閉鎖中のため、施設の使用等は難しい。
- ・穴水町災害ボランティアセンターは6月から週末型の運営に切り替えているが、8月も活動予定。(ただし13日～15日はお盆休み)8月の開所は災害ゴミ仮集積場の閉鎖による部分があるため、7月下旬に再度打ち合わせ予定
- ・七尾市石崎を拠点としている SienSienWEST (NPO 団体) はお盆休みなく活動予定。現在、技術系の活動とサロン系の活動2つに分けて実施している。8月13日は石崎地区の盆踊り大会のため、ぜひお手伝いしてほしい。11日、12日は国土舘大学主体のサロン活動と技術系の作業2つをお願いしたいと依頼があった。

宿泊場所について

- ・宿泊場所の確保・選定にあたり、内閣府政策統括官(防災担当)付参事官(普及啓発・連携担当)付主査の甲祥子様を通じて、石川県創造的復興推進課大山様をご紹介いただいた。
- ・学生の負担減のために安価な宿泊場所を探した結果、能登空港脇の日本航空学園をご紹介いただいた。(石川県創造的復興推進課大山様)
- ・One・Day・Fam は元合宿所ということもあり、学生向けの施設だった。1階に食堂、風呂、トイレ、2階が2段ベットなどが入った居室が部屋数6室35名前後が宿泊可能。オーナーの方ともお話しして協力的に施設内をご紹介いただいた。食事は自分たちで準備が前提。お湯、レンジ、トースターなどはあり。

宿舎名	場所	活動場所 への距離	料金	食事提供	食堂	風呂	ライフ ライン
日本航空学園	輪島市 能登空港の脇	車で片道1h	1000円強 (シーツ交換代)	朝夕あり (日祝除く)	あり (レンジ・お湯あり)	あり (男女別)	完全復旧
OneDayFam	七尾市	車で4m、 徒歩20m	1泊5000円	なし	あり (レンジ・お湯あり)	あり (男女交代制)	完全復旧





車両について

- ・国際医療福祉専門学校七尾校より車両 2 台の借用予定

ハイエースとマイクロバス

10 日～ 15 日が専門学校の休業期間のため、借用の方法に工夫が必要。

案として 9 日の夕方に浅倉前乗りで借用、14 日は学校前に車両を返却し、鍵はポストへ。

災害ボランティア活動概要（第1～3陣）

■活動目的

2024年1月1日に発生した能登半島地震により、石川県、富山県、新潟県において発生している。中でも能登半島を中心に石川県内では甚大な被害が発生し、今現在も多くの方が避難生活を送られている。被害状況、ボランティアセンターの運営状況、災害ボランティアの要否の実態調査を行ったところ、ボランティアニーズがあることが認められた。また、断水が継続する中で、復旧・復興支援が急務である。これまでの災害ボランティア活動の経験を活かし、学生の安全を確保した上で被災地支援に行く事は、本学の教育理念に適い、当研究所の事業目的でもある。

■期 間：2月19日～23日：1陣 2月28日～3月2日：2陣 3月4日～7日：3陣

■活動場所：石川県七尾市内（予定）

* 現地の都合により変更になる可能性があります。

■活動内容：サロン活動の運営・周知、被災家屋（個人宅）の瓦礫撤去、床下からの泥だし・清掃、ニーズ調査など（被災地のニーズにより変更の可能性あり）

■集合：1陣2陣：初日の17時～19時の間に国際医療福祉専門学校七尾校に現地集合

3陣：初日の9時45分に国土館大学多摩キャンパスに集合

■解散：1陣2陣：最終日の昼までに国際医療福祉専門学校七尾校で現地解散

3陣：最終日の午前発で国際医療福祉専門学校七尾校出発、夕方から夜に東京到着

■移動：1陣2陣：公共交通機関

3陣：チャーターバス

■個人装備：※別途添付

■学生負担：1人1万円程度の移動費、期間中の食事代、個人装備代

■連絡先：

- ・ 国土館大学防災・救急救助総合研究所事務局
- ・ 責任者 浅倉 大地
- ・ 職員（事務窓口）鈴木 篤

ボランティア参加教職員

	1 陣	2 陣	3 陣
責任者	浅倉	浅倉	浅倉
メンバー	都	大木	植田 / 曾根

防災総研所属

植田広樹（教授）大木学（准教授）曾根悦子（講師）浅倉大地（助教）都城治（助教）

緊急連絡先：当日遅刻や欠席などの際は電話連絡してください。

浅倉大地

個人装備

装備名	個数	備 考
タオル（作業用）	適量	汗をかくので多めに持ってくる
作業用マスク（防塵マスク）	2	喘息持ちの人などは注意が必要です。
ヘルメット	1	貸与予定
作業用ゴーグル	1	貸与予定
運動靴	1	
踏み抜き防止のインソール	1 セット	
作業着 上下（長袖、長ズボン）	適量	
雨具（カッパ）	1	セパレートタイプ
水筒（ペットボトルでも可）	充分な量	しっかり水分補給が出来る様に。
常備薬（あれば）	適量	
懐中電灯	1	ヘッドライトがよい
ウェットティッシュ・ボディーペーパー	1	
ファーストエイドキット	1	絆創膏など（個人用）
筆記用具・ノート	1	
食事	1	初日の夕食
レトルト食品	適量	チンするご飯は現地にあります。
行動食	適量	飴やカロリーメイトなど
腕時計	1	時間厳守
作業グローブ	1 以上	活動時に使用
雑巾	2	
防寒対策グッズ	適量	とにかく寒いので温かいものを！
寝袋・枕等快眠グッズ	1	寝袋は厚手が望ましい
着替え	適量	
バスタオル・ハンドタオル	1 ずつ	お風呂に入る時に使います。
シャンプー、ボディソープ	各 1	ご自身で持参してください。
デイバック	1	
ビニール袋	適量	大きいのも小さいのも
新聞紙	1 ～	
保険証のコピー	1	

災害ボランティア活動概要（第4陣）

■活動目的

2024年1月1日に発生した能登半島地震により、石川県、富山県、新潟県において発生した。中でも能登半島を中心に石川県内では甚大な被害が発生し、半年経った今でも避難生活を送られている方もいる。防災総研では2、3月に1～3陣で計71名の学生ボランティアを石川県七尾市に派遣した。7月に改めて被害状況、ボランティアセンターの運営状況、災害ボランティアの要否の実態調査を行ったところ、ボランティアニーズが依然としてあることが認められた。これまでの災害ボランティア活動の経験を活かし、学生の安全を確保した上で被災地支援に行く事は、本学の教育理念に適い、当研究所の事業目的でもある。

■期 間：8月10日～14日

■活動場所：石川県七尾市石崎地区（予定）

*現地の都合により変更になる可能性があります。

■活動内容：サロン活動の運営・周知、被災家屋（個人宅）の瓦礫撤去、ブロック塀撤去、清掃、ニーズ調査など（被災地のニーズにより変更の可能性あり）

■集合：10日の17時～19時の間に OneDayFam に現地集合

■解散：14日の朝に宿をチェックアウト後解散

13日の活動終了後に夜行バスを使うもの等は解散も可とする。

■移動：公共交通機関

■個人装備：※別途添付

■大学からの補助：交通費の一部（1.5万円）、宿泊費の一部（1万円）

■学生負担：交通費・宿泊費、期間中の食事代、個人装備代

■連絡先：

- ・ 国土舘大学防災・救急救助総合研究所事務局
- ・ 責任者 浅倉 大地
- ・ 職員（事務窓口）鈴木 篤

ボランティア参加教職員

	10 日	11 日	12 日	13 日	14 日
責任者	浅倉	浅倉	浅倉	浅倉	浅倉
メンバー	植田	植田	植田 / 都	都	都

防災総研所属

植田広樹（教授）浅倉大地（講師）都城治（講師）

緊急連絡先：当日遅刻や欠席などの際は電話連絡してください。

浅倉大地

個人装備

装備名	個数	備 考
タオル（作業用）	適量	汗をかくので多めに持ってくる
作業用マスク（防塵マスク）	2	喘息持ちの人などは注意が必要です。
ヘルメット・作業用ゴーグル・ビブス	各 1	貸与予定なので持参の必要なし
安全靴	1	つま先、足裏を守る機能があるもの
活動用の服	1 セット	子ども達と勉強・遊びに適したもの
遊び道具	あれば	ボール、フリスビー等子どもと一緒に出来るもの
作業着 上下（長袖、長ズボン）	適量	作業用
雨具（カッパ）	1	セパレートタイプ
水筒（ペットボトルでも可）	充分な量	しっかり水分補給が出来る様に。
常備薬（あれば）	適量	
懐中電灯	1	ヘッドライトがよい
ウェットティッシュ・ボディーペーパー	1	
ファーストエイドキット	1	絆創膏など（個人用）
筆記用具・ノート	1	
食事	1	初日の夕食
レトルト食品	適量	ご飯（茶碗 1.5 杯）にあうもの
行動食	適量	飴やカロリーメイトなど
腕時計	1	時間厳守
作業グローブ	1 以上	活動時に使用
雑巾	2	活動時に使用
着替え	適量	
バスタオル・ハンドタオル	1 ずつ	お風呂に入る時に使います。
シャンプー、ボディソープ	各 1	こだわりあれば持参してください。
デイバック	1	
ビニール袋	適量	大きいのも小さいのも
お金	適量	昼食の購入などに使います。
お金（1 万円）	1 万円	宿泊費として 13 日の夜に回収します。
保険証のコピー	1	

*必要最低限のものを記しています。各自、自分で考えて持ち物を調整してください。

楽しい思い出いっぱいのお休みを!!

七尾・ISSAKI

こども縁日

そうめん流し ヨーヨー釣り 射的
シャボン玉遊び フライドポテト
スーパーボールすくい かき氷
ヨーヨー釣り 夏休み宿題教室
スマホ教室

参加費無料

七尾・ISSAKIこども縁日

Supported by 日本THE NIPPON 財団 FOUNDATION

8/12(祝・月) 8/13(火) 会場 旧石崎保育園
七尾市石崎町ソ部21-1

10:00 START
ヨーヨー釣り、輪投げ、スーパーボールくち、射的、シャボン玉、水鉄砲、
小学校のグラウンドで遊ぼう(12日のみ)、手持ち花火大会、フライドポテト、かき氷

12:00~13:30
流しそうめん

13:30~16:00
国士舘大学の生徒による夏休み宿題教室
各務原高校の生徒によるスマホ教室(13日のみ)

〈お問い合わせ〉
sien sien west
☎080-6053-9183

主催：sien sien west 国士舘大学 各務原高校学生有志

第1～4陣共通資料

ボランティア服装 最低限必要なウェア類

装備名	備 考
帽子	
マスク	
タオル・てぬぐい	
長袖の服	
長ズボン	
ゴム手袋	
運動靴・長靴	安全靴が適しています。安全靴でないとブロック塀撤去などの活動は出来ません。 つま先、足裏に金属が入ったものが適切です。 踏み抜き防止のインソールを入れて作業をしてください。
ウエストポーチなど	財布・スマートフォンなど貴重品は自分で管理してください。
ペットボトルなど自分用飲み物	

《ボランティア活動の心得》

〔自分自身の心構え、安全管理〕

- ・今何をやればいいのか、自分のできることを探し、自分で考えて行動することを心がける。
- 自分だけで何とかしようと気負わない。皆で助け合い、分かち合う。
- ・周りに気をつけて活動する。(建物の中、床・壁など)
- ・体調が悪い場合は無理をしないで報告する。
- オーバーワークは禁物。十分な休養や栄養を取りましょう。
- ・活動中の安全の確保は自身で行い、自分の身は自分で守る。
- ・「危険」や「不安」と感じる作業は無理に行わない。
- 出来ないことは「出来ません」とはっきり断ろう。もしくは教職員に相談しよう。
- ・ボランティアセンターの運営について十分に理解して、批判はしない。
- 自分の想像と違う活動になることも。納得できる心の準備を。
- 自分の行動をポジティブに評価しよう。
- ・活動中に問題が起きたら、迅速に教職員に報告・連絡・相談を行う。
- ・教職員の指示を聞いた上で、集団行動を徹底し、個人での単独行動は慎みましょう。

〔被災された方への配慮〕

- ・被災された方のお気持ちやプライバシーに配慮し、マナーある言動と言葉遣いを心がけましょう。
- ・相手の話を共感的に聞きましょう。（傾聴しましょう）
- ・相手の感情に巻き込まれ過度な哀れみや同情をする必要はありません。

→過度に励まさない。

- ・「ボランティアをしてあげている」では「させてもらっている。」という気持ちを持ち、活動を通して学ばせてもらっているという意識で謙虚な姿勢で活動に望みましょう。
- ・挨拶は自分からすすんで行き、気持ちの良いコミュニケーションを図りましょう。
- ・一部のボランティアによる記念撮影などで戸惑われる地元の方もいます。不要な写真撮影はボランティアへの信頼を損ねる原因になるため自粛してください。

→どうしても撮影したいときは必ず地元の方の許可を得てください。

- ・活動終了後の SNS の投稿なども不要であれば避け、必要ならば十分配慮をした上で行いましょう。
- ・物の廃棄や撤去をする場合はどんな物でも被災された方に必要か不要か確認を取りましょう。

→被災された方の大切な思い出の品かもしれません。

- ・活動中に知り得た情報は絶対に他者に漏らさないことを徹底してください。
- ・被災された方が自分たちでやる仕事を奪うのではなく、一緒に活動をしてください。

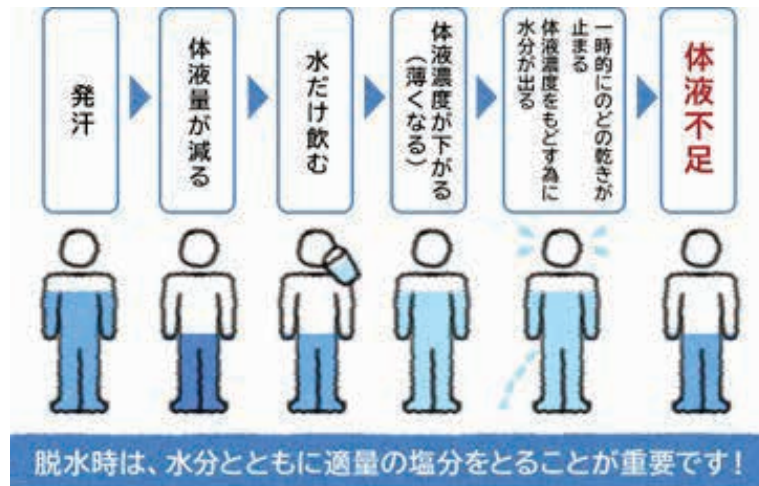
→基本的に活動も休憩も一緒に取りましょう。

お疲れの様子であれば追加で休んでいただくなど臨機応変な対応をお願いします。

～熱中症対策をしましょう～

災害ボランティアとして被災地に入るのに、被災地で医療のお世話になることのないように、しっかり熱中症予防して行きましょう。

熱中症は「**体温上昇**」と「**体液不足**」の2つが主な理由で発生します。



■活動時の服装

怪我や感染予防のため、薄手で通気性の良い、長袖・長ズボン。
汚れたまま処分してもかまわないようなものが最適。

■帽子・タオルなど

屋外での作業が多いと思われるので、帽子は必ず用意。
(ヘルメットはこちらで用意します)
帽子の後ろにタオルを垂らすと、日よけになります。

■活動時の注意点

●無理をせず体調不良を感じたら活動を中止する

少しでも「おかしいな?」と思ったら、無理をして活動を続けず、リーダーに報告し、休息をとる。

本人からの訴えがなくても、周囲が不調に気付いた場合、直ちに休息を促す。

●定期的に休憩をとる

作業20～30分につき、10分の休憩をとるペースで。
疲れなどの自覚症状がなくても、必ず休憩をとる。

●休憩時の工夫

日陰などで、着脱できる上着や靴下を脱いで、風を通しましょう。

●定期的な水分・塩分補給を行う

①一気に飲まない。(こまめに少しずつ)

気温28度以上の時は**30分に1回250cc程度**を目安に！

②5～15度位の冷えたものが好ましいが、冷やし過ぎに注意

③経口補水液は他のものと混ぜないこと。

熱中症の分類

分類	症状
I 度 (軽度)	めまい たちくらみ こむら返り (脚がつる)
II 度 (中等度)	頭痛、悪心 (吐き気)、 嘔吐、全身倦怠感
III 度 (重度)	意識障害 けいれん おかしい言動や行動 体温が高くなる (39度以上)

I 度の症状が出たり、
『おかしいな』と思ったら
すぐに作業をやめて、リーダーに報告！

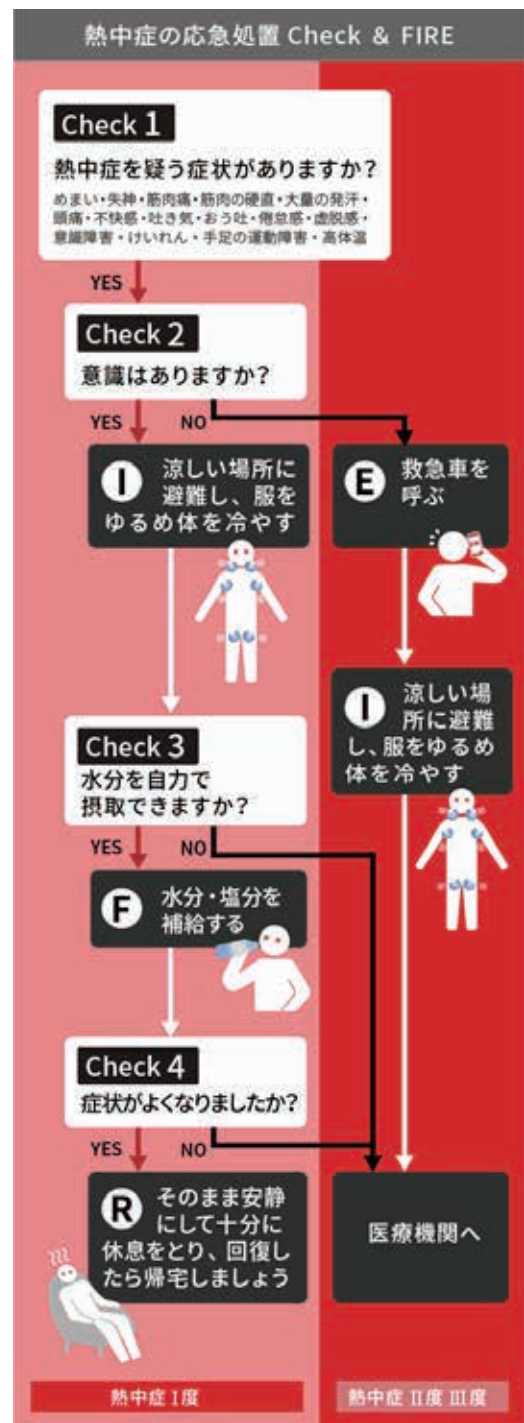


自分では気づかないことも！
お互いに様子を確認し、声を掛け合って！

2度から3度への以降はあっという間。
休ませる時は1人にしないこと！
意識がなくなってからでは遅い！

**安全第一で
災害支援していきましょう！**

応急手当の基本はFIRE!



派遣計画書（第4陣）

令和6年能登半島地震に関わる 被害に伴う災害ボランティア派遣 計画書(案)

派遣期間: 8月10日(土)から8月14日(水)
活動期間: 8月11日(日)から8月13日(火)

<派遣の必要性とメリット>

2024年1月1日に発生した能登半島地震により、石川県、富山県、新潟県において発生した。中でも能登半島を中心に石川県内では甚大な被害が発生し、半年経った今でも避難生活を送られている方もいる。防災総研では2、3月に1～3陣で計71名の学生ボランティアを石川県七尾市に派遣した。7月に改めて被害状況、ボランティアセンターの運営状況、災害ボランティアの要否の実態調査を行ったところ、ボランティアニーズが依然としてあることが認められた。これまでの災害ボランティア活動の経験を活かし、学生の安全を確保した上で被災地支援に行く事は、大学の教育理念に適い、当研究所の事業目的でもある。

スケジュール: 初日と最終日は移動日と定め、安全な移動に集中。間を活動日とする。

引率教職員: 8/10-14浅倉大地講師 8/10-12植田広樹教授 8/12-14都城治講師

学生: 33名を予定(One・Day・Famの定員)

主な活動内容

- ①サロン活動、子ども支援のお手伝い
- ②ボランティアニーズ確認
- ③ブロック撤去等の技術系案件
- ④清掃

連絡先

各日程、教職員が現地で引率
各日程引率予定者の連絡先一覧を作成

宿泊・交通

- ①宿泊はOne・Day・Famを予定
- ②交通費・宿泊費を一部補助し学生負担の軽減に努める。
- ③国際医療福祉専門学校七尾校から車両2台借用

学生派遣手続き

募集

- ①現在もしくは過去に「防災リーダー養成論実習」受講者で災害ボランティア参加希望者を優先
- ②授業・学業・試験に差支えない者
- ③防災士資格取得者等に広く行う。

参加条件

- ①参加希望者は説明会に参加する(オンデマンドで実施予定)
- ②内容・リスク等を十分理解し参加意思がある
- ③保護者の同意を得られる者

班編成

班編成後、班長の決定(班長は詳細連絡)

書類・参加費・ボランティア保険

- ①本人・保護者の同意書(FAX・写真可)
- ②ボランティア保険に加入

その他

連携(予定)

国際医療福祉専門学校七尾校
穴水町災害ボランティアセンター
Sien sien WEST(石川県七尾市支援団体)

予算(概算)

①交通費	50万円(33人×交通費補助1.5万円)
②ボランティア保険	5.1万円(36名×1400円)
③宿泊費	70万円(目安5000円/4泊×35名)
④備品購入	6万円(マキタハンマドリルHR3530)
⑤その他	10万円(教職員引率・雑費・消耗品・燃料代7万)
合計141.1万円	

説明会資料（第1～3陣）

令和6年
能登半島地震
ボランティア支援
説明会



27. 被験者の属性

1) 性別の分布、年齢の分布

属性項目	人 数										合計	
	男					女						
	1人	2人	3人	4人	5人	1人	2人	3人	4人	5人		
性別分布												
男	31	60	41	40	3	2,132					16 (22.88%) 15 (22.22%)	
女	31	60	47	47	129	2,600					8 (11.43%) 8 (11.43%)	
合計	62	120	88	87	132	4,732	8	8	8	8	24 (34.29%) 24 (34.29%)	
年齢分布												
10代	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
20代	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
30代	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
40代	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
50代	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
60代	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
70代	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
合計	6	6	6	6	6	30					30 (42.86%) 30 (42.86%)	

2) 職業の分布

属性項目	人 数										合計	
	男					女						
	1人	2人	3人	4人	5人	1人	2人	3人	4人	5人		
職業分布												
学生	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
会社員	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
主婦	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
その他	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
合計	4	4	4	4	4	20					20 (28.57%) 20 (28.57%)	

3) 学歴の分布

属性項目	人 数										合計	
	男					女						
	1人	2人	3人	4人	5人	1人	2人	3人	4人	5人		
学歴分布												
小学校	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
中学校	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
高等学校	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
大学	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
大学院	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
合計	5	5	5	5	5	25					25 (35.71%) 25 (35.71%)	

4) 収入の分布

属性項目	人 数										合計	
	男					女						
	1人	2人	3人	4人	5人	1人	2人	3人	4人	5人		
収入分布												
1万円以下	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
1万円以上	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
合計	2	2	2	2	2	10					10 (14.29%) 10 (14.29%)	

5) 家族構成の分布

属性項目	人 数										合計	
	男					女						
	1人	2人	3人	4人	5人	1人	2人	3人	4人	5人		
家族構成												
単身	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
夫婦	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
夫婦+子供	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
夫婦+子供+高齢者	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
合計	4	4	4	4	4	20					20 (28.57%) 20 (28.57%)	

6) 趣味・嗜好の分布

属性項目	人 数										合計	
	男					女						
	1人	2人	3人	4人	5人	1人	2人	3人	4人	5人		
趣味・嗜好												
読書	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
音楽	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
旅行	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
その他	1	1	1	1	1	5					5 (7.14%) 5 (7.14%)	
合計	4	4	4	4	4	20					20 (28.57%) 20 (28.57%)	

2月7日時点で開設されている
災害ボランティアセンター

- ・新潟県
→新潟市西区災害ボランティアセンター
- ・富山県
→小矢部市、高岡市、氷見市
- ・石川県
→珠洲市、輪島市、能登町、穴水町、七尾市、中能登町、羽咋市、志賀町、宝達志水町、内灘町、加賀市

能登方面への支援・災害ボランティアに関するお願い

今日の地震で甚大な被害を受けた地震方面については、多くの地域で災害ボランティアの受け入れ態勢が整っていない状況にあります。

また、搬送方面へ向かう道路については、深刻な渋滞が発生しており、こうした中で個別に被災地へと向かおうとする、支援物資の到着の遅れや、患者の輸送回数の減少など、救助・救護活動に大きな支障をきたす恐れがあります。

そのため、実費ボランティアを希望される場合は必ず、事前に本事務局サイト等で受け入れ状況をご確認ください。また、各府県・市町村・社会福祉協議会等には、電話でのお問い合わせは受けていただきますようお願いいたします。

現地の状況として

- ・現時点で七尾市災害VCは事前受付をした人を対象に、金沢から日帰りのチャーターバスを出して活動させている。
- ・災害の被害規模的にはボランティアの数は不足しているが、交通渋滞等の懸念から安易にボランティア募集が出来ないシグマがある。
- ・本学は被災地の負担にならないようにしつつ、「自己完結」ができる前提で学生の派遣を調整中。
- ・今後の状況次第では、活動の中止や大幅な変更もあるので、そのつもりでください。

派遣日程

- ・1陣 2月19日～23日（公共交通機関を利用）
 - ・2陣 2月28日～3月2日（公共交通機関を利用）
 - ・3陣 3月4日～7日（チャーターバスを利用）
- 初日、最終日は移動日として、活動は行いません。

派遣場所

石川県七尾市内（予定）

活動拠点

国際医療福祉専門学校
七尾校



1陣2陣の集合

- 国際医療福祉専門学校七尾校に現地集合
- 時間は初日の17時～19時の間に到着すればいつでも構いません。
- 交通手段は自分で確保してください。
- 最寄駅は、七尾線の七尾駅
- 最短は新幹線で金沢。金沢から七尾線で七尾になります。
- 新幹線（学割適用されます。）
- 夜行バスで金沢、富山、七尾という手段もあるそうです。
- 昼食は済ませ、夕食を持参してください。

1陣2陣の解散

- 最終日の午前中に清掃・片付け等を済ませ解散します。
- 遅くともお昼12時までには解散をする予定です。
- 交通手段は自分で確保してください。
- 複数日程参加する学生は金沢駅付近での宿泊等は可としますが、自分自身で準備し、実費精算すること。

3陣の集合

- 国士舘大学多摩キャンパスに9時45分集合、10時出発
- 多摩キャンパスのバピルスメイトで1万円の交通費を納入してください。
- 納入表がバスのチケットがわりです。
- 3陣はキャンセル待ちの学生さんがいます。
- 辞退される方はお早めにお知らせください。
- 昼食は途中のSAで済ませ、夕食を持参してください。
→レンジでチンするご飯とアルファ米はあります。

3陣の解散

- 最終日の午前中に七尾を出発し、多摩キャンパスで解散します。
- 永山駅にも寄ってもらえるように交渉中です。

想定される活動内容

- サロン活動への支援

運営だけでなく
周知活動を含みます。



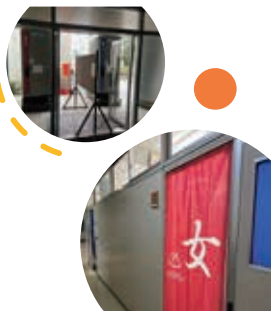
想定される活動内容

- 被災家屋の片付け、清掃等



生活環境

- 電気は通っています。延長コードがあると便利です。
 - 断水しています。
 - トイレは仮設の水洗トイレ。
 - 温かいシャワーが1人3分程度浴びることが出来ます。
- 水が貴重なので、補給も自分たちで行います。



食べるもの

- 滞在中はアルファ米、レンジご飯を支給します。
- 電子レンジ、湯沸かしが使えます。
- レトルトカレー等を個人で持参いただく分には構いません。
- レンジ、湯沸かしを使いたい人は順番に使っていきましょう。



寝る環境

- ・体育館での生活になります。
- ・寒いです。
- ・しっかりと防寒着やカイロなどを持ってきてください。
- ・寝袋を出来れば持参してください。
- ・毛布はこちらで貸し出しできるように準備します。



1陣2陣の学生の皆さんの負担

- ・移動費（七尾までの往復代）
- ・食事代（夕食を持参するなら）
- ・個人装備代（個人の装備は各自で準備）

- ・1回の陣につき1万5千円の交通費補助とボランティア保険代の補助が大学から出ることが決まりました。
- ・補助金に関しては、この後manabaで振込先を聞きます。
- ・振込は活動後になるので、ご了承ください。

3陣の学生の皆さんの負担

- ・移動費（1万円）パピルスメイトで当日朝納入してください。
- ・食事代（夕食を持参するなら）
- ・個人装備代（個人の装備は各自で準備）

- ・今回すべての学生さんができる限り同じ負担になるようにしています。
- ・東京一金沢間を1万円で往復できると思えば、お安く感じていただけますか。
- ・ご了承いただければと思います。

ボランティア活動保険

- ・全員加入をします。
- 大学が代理で加入手続きを行います。

- ・参加する人は加入が必須です。

- ・すでに1年以内に加入している人がいれば申し出てください。

自分自身の心構え、安全管理

国士館大学防災・緊急救助総合研究所
災害ボランティア活動 活動要領より抜粋

- ・今何をやらべいいのか、自分のできることを探し、自分で考えて行動することを心がける。
→自分だけで何とかしようと気負わない。自分の限界を知る。
- ・活動中の安全の確保は自身で行い、自分の身は自分で守る。（建物の中、床・壁、釘など）
- ・体調が悪い場合は無理をしないで報告する。
→オーバーワークにならない様に、十分な休養や栄養をとり、交替を守る。
- ・「危険」や「不安」と感じる作業は無理に行わない。
→出来ないことは「出来ません」とはっきり断ろう。もしくは教職員に相談しよう。
- ・ボランティア活動の運営について十分に理解して、批判はしない。
→自分が期待した活動が出来なくても、納得して帰る様に心の準備をする。
自分の行動をポジティブに評価する。
- ・活動中に問題が起きたら、迅速に仲間・教職員に報告・連絡・相談を行う。
→いつでも声をかけられる関係づくりを！
- ・教職員の指示を聞いた上で、集団行動を徹底し、個人での単独行動は慎みましょう。

被災された方、被災地への配慮

国士館大学防災・緊急救助総合研究所
災害ボランティア活動 活動要領より抜粋

- 被災された方々のお気持ちやプライバシーに配慮し、マナーある言動と言葉遣いを心がけましょう。
・相手の話を共感的に聞きましょう。（傾聴しましょう。）
- ・相手の感情に巻き込まれ過度な哀れみや同情をする必要はありません。（過度に助まさない。）
- ・「ボランティアをしてあげている。」ではなく「させてもらっている。」という気持ちで、活動を通して学ばせてもらっているという意識を持ち、謙虚な姿勢で活動に望みましょう。
- ・挨拶は自分からすすんで行い、気持ちの良いコミュニケーションを図りましょう。
- ・一部のボランティアによる記念撮影などで戸惑われる地元の方もいます。不要な撮影はボランティアへの信頼を損ねる原因になるため自粛してください。どうしても撮影したいときは必ず地元の方の許可を得てください。
- ・活動終了後のSNSの投稿なども不要であれば避け、必要ならば十分配慮をした上で行いましょう。
- ・物の廃棄や撤去をする場合はどんな物でも被災された方に必要が不要が確認を取りましょう。被災された方々の大切な思い出の品かもしれません。
- ・活動中に知り得た情報は絶対に他者に渡さないことを徹底してください。
- ・被災者が自分たちでやる仕事を取るのではなく、一瞬に活動をしてください。
→基本的に自分が休む時は一緒に休む。お疲れの様子であれば追加で休んでいただくなど臨機応変な対応をお願いします。

個人装備



学生ボランティア参加同意書

- 私は下記の5事項を理解し、自発的な意思に基づいて被災地支援ボランティア活動に参加します。
1. 所属学部の専攻授業等に支障がないことを確認した上で、ボランティア活動に参加します。
 2. 被災地での活動の危険性を十分理解したうえで、国士館大学防災・緊急救助総合研究所の活動目的・行動指針を共有し、その目標達成のために活動します。
 3. 災害伝言ダイヤルにて設定する電話番号を家族と共有し、家族と毎日連絡を取れる状態を維持します。
 4. 心身ともに良好な健康状態で、円滑なコミュニケーションがとれる状態で活動に参加します。
 5. 活動を通じて知り得た情報等の機密を保持し、ボランティア終了如何に関わらず、それらの情報を他に提供しません。

署名用紙 記入した日の日付
2024 年 月 日

行く日程にチェック
参加する陣に☑を入れてください。
1陣:☐ 2陣:☐ 3陣:☑

*3陣に参加する方は以下を選んでください。
チャーターバス:☐ 七尾校に現地集合:☑

参加校住所 現住所
参加者連絡先 (携帯電話) 携帯番号
参加者学籍番号 学籍番号 参加者署名 名前 (苗字)

保護者の皆様の同意のお願い

被災地支援に係るボランティア活動において、さらなる天災による被害、ならびに活動中において起こり得る被害に対して、上記の者の保護者として、一切の補償を国土領大学 防災・救急救助総合研究所ならびに派遣先の組織等に求めることはありません。また、それらの危険性を了承したうえで、上記の者の参加に同意いたします。

2022年3月27日付日

保護者住所	保護者の現住所
保護者緊急連絡先	保護者の携帯番号
保護者氏名	保護者の名前（捺印）

※本同意書は国土領大学防災・救急救助総合研究所にて管理し、当該活動以外の目的では使用いたしません。
FAX 送り先：042-401-8029（国土領大学防災・救急救助総合研究所）

皆がボランティアに行くまでに忘れずにやること

- 参加同意書の記入と提出（保護者の直筆が必要なので注意）
→提出方法はmanabaの個別指導でもFAXでもOK。原本は当日持参してください。

期限は
1陣が2月17日
2陣が2月27日
3陣が3月2日

- 参加同意書がないと活動が出来ません。

- 1陣2陣の人は交通手段の確保
- 個人装備の確保
- 健康の維持、体調管理

ボランティアが終わった後には、

- 報告レポートの作成
→被災地でのボランティア活動を通して、感じたこと、学んだことを記載して下さい。
- 事後報告会への参加
→別途企画予定です。改めてご案内します。

人の役に立てるのか不安です、、、

- 誰もが初めてのことは不安です。でも大丈夫です！
- 皆さんが出来るのは
- 「謙虚な気持ちで一生涯懸命活動することです。」
- それさえ出来れば、後は何も必要ありません。
- 自信を持ってください。皆さんには仲間がいます。
- その上で、自分が出来ることを無理なく行いましょう。
- 被災地、被災者に元気を届けることが大切です。

健康状態チェック



泥だけを見ずに、人を見る

この言葉を大切にしてください。

説明会資料（第4陣）

令和6年 能登半島地震 8月ボランティア支援 説明会



2. 被害の状況

(1) 人的被害・住家被害

被災状況	人的被害				住家被害				その他			
	死	重傷	軽傷	合計	全壊	半壊	一部被害	合計	その他	合計	その他	合計
富山県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
石川県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福井県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
岐阜県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
愛知県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
滋賀県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
京都府	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大阪府	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
兵庫県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
奈良県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
和歌山県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
鳥取県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
徳島県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
高知県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
佐賀県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大分県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
熊本県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
鹿児島県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
沖縄県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

※富山県の公表情報において住家被害の「全壊」と記載されている情報は本表に反映していない

＜死者の内訳＞

【石川県】七尾市8人、輪島市130人、珠洲市11人、羽咋市1人、志賀町2人、穴水町2人、能登町1人

7月頭時点で開設されている 災害ボランティアセンター

- ・富山県
→小矢部市、高岡市、氷見市
- ・石川県
→珠洲市、輪島市、能登町、穴水町、七尾市、中能登町、羽咋市、志賀町、内灘町、かほく市

七尾市災害ボランティアセンター は7月末で閉所予定。

7月時点の現地の状況として

- ・七尾市災害VCは5/20で新規ニーズの受付終了
- ・7月から週末型に移行し、7月末で閉所予定。
- ・ただし、地域には埋まっているニーズがまだあるという声も。
- ・現地の災害支援団体と連携しながら活動をしていく予定
- ・今後の状況次第では、活動の中止や大幅な変更もあるので、そのつもりでいてください。

派遣日程

- ・8月10日～14日（公共交通機関を利用）
初日、最終日は移動日として、活動は行いません。

派遣場所

- ・石川県七尾市石崎地区（予定）

集合

- ・OneDayFamに現地集合
- ・時間は初日の17時～19時の間に到着すればいつでも構いません。
- ・交通手段は自分で確保してください。
- ・最寄駅は、七尾線の和倉温泉駅
- ・最短は新幹線で金沢。金沢から七尾線で和倉温泉になります。
- ・新幹線（学割適用できます。）
- ・夜行バスで金沢、富山、七尾、和倉温泉という手段もあるそうです。
- ・昼食は済ませ、夕食を持参してください。



解散

- 最終日の朝にチェックアウトを済ませ解散します。
 - 遅くとも10時までには解散をする予定です。
 - 是非七尾、金沢で観光や買って応援をして、帰ってください。
 - 交通手段は自分で確保してください。
 - 13日の活動後に夜行バスで帰る人は13日のチェックアウトも可能とします。
 - 解散の希望はマナバのアンケートで取ります。
- 意思表示をお願いします。

活動拠点 宿泊場所

OneDayFam

石川県七尾市石崎町乙19-9

1泊

5,000円

電気、ガス、水道は全て復旧しています。



お部屋の様子

• 男女別部屋



• 食堂



• お風呂（1つの為、男女交代制）



持参してほしいもの（宿からの連絡）

- タオル類
- 歯ブラシ
- シャンプー、リンス、ボディソープは備え付けはありますが、こだわりのある方は持参してください。
- 部屋着
- 洗濯ネット
→洗濯機10kg 4台あり
- 箸、ご飯茶碗、お汁茶碗以外の食器類（使いたい人は）

食べるもの

- 滞在中は朝と夕は1人ご飯茶碗1杯半程度の白ご飯を宿がサービスしてくれます。
 - おかずは自分で用意しましょう。
 - 電子レンジ、湯沸かしが使えます。
 - レトルトカレー等を個人で持参いただくともいいかもしれません。
 - コンビニが開いています。
- 昼食等はそちらで調達しましょう。



想定される活動内容

- ブロック塀の撤去等技術系のニーズ
自分たちだけで行う可能性もありますが、補助等を担う可能性も十分にあります。



想定される活動内容

- 11日、12日は子ども向けの活動を国士館大学主導で企画予定です。
- 夏休みで時間がある子ども達の希望者を集めて、宿題をやったり、校庭で思いっきり遊んだり、充実した夏休みのお手伝いを学生さんにしてほしいです。



学生の皆さんの負担

- 移動費（和倉温泉までの往復代）
- 宿泊代（OneDayFamでの宿泊代）
*13日夜に集め、まとめて支払います。
- 食事代（期間中）
- 個人装備代（個人の装備は各自で準備）

大学からの補助

- 1万5千円の交通費補助と1万円の宿泊費補助
ボランティア保険代の補助が大学から出ることが決まりました。
- 補助金に関しては、この後manabaで振込先を聞きます。
- 振込は活動後になるので、ご了承ください。

ボランティア活動保険

- ・全員加入をします。
→大学が代理で8/7頃に加入手続きを行います。
- ・参加する人は加入が必須です。
- ・すでに4月以降に1年以内に加入している人が
いれば申し出てください。

自分自身の心構え、安全管理

国士館大学防災・救急救助総合研究所
災害ボランティア活動 活動要領より抜粋

- ・今何をやればいいのか、自分のできることを探し、自分で考えて行動することを心がける。
→自分だけで何とかしようと気負わない。自分の限界を知る。
- ・活動中の安全の確保は自身で行い、自分の身は自分で守る。(建物の中、床・壁、釘など)
- ・体調が悪い場合は無理をしないで報告する。
→オーバーワークにならない様に、十分な休養や栄養をとり、交替を守る。
- ・「危険」や「不安」と感じる作業は無理に行わない。
→出来ないことは「出来ません」とはっきり断ろう。もしくは教職員に相談しよう。
- ・ボランティア活動の運営について十分に理解して、批判はしない。
→自分が期待した活動が出来なくても、納得して帰る様に心の準備をする。
自分の行動をポジティブに評価する。
- ・活動中に問題が起きたら、迅速に仲間・教職員に報告・連絡・相談を行う。
→いつでも声をかけられる関係づくりを！
- ・教職員の指示を聞いた上で、集団行動を徹底し、個人での単独行動は慎みましょう。

被災された方、被災地への配慮

国士館大学防災・救急救助総合研究所
災害ボランティア活動 活動要領より抜粋

- 被災された方々のお気持ちやプライバシーに配慮し、マナーある行動と言葉遣いを心がけましょう。
・相手の話を共感的に聞きましょう。(傾聴しましょう。)
- ・相手の感情に巻き込まれ過度な哀れみや同情をする必要はありません。(過度に助さない。)
 - ・「ボランティアを志している。」ではなく「させてもらっている。」という気持ちで、活動を通して学ばせてもらっているという意識を持ち、謙虚な姿勢で活動に望みましょう。
 - ・挨拶は自分からすんでいい、気持ちのいいコミュニケーションを図りましょう。
 - ・一部のボランティアによる記念撮影などで戸惑われる地元の方もいます。不要な撮影はボランティアへの信頼を損ねる原因になるため自粛してください。どうしても撮影したいときは必ず地元の方の許可を得てください。
 - ・活動終了後のSNSの投稿なども不要であれば避け、必要ならば十分配慮をした上で行いましょう。
 - ・物の廃棄や撤去をする場合はどんな物でも被災された方に必要か不要か確認を取りましょう。被災された方の大切な思い出の品かもしれません。
 - ・活動中に知り得た情報は絶対に他者に漏らさないことを徹底してください。
 - ・被災者が自分たちでやる仕事を取るのではなく、一緒に活動をしてください。
→基本的に自分が休む時は一緒に休む、お疲れの様子であれば追加で休んでいただくなど臨機応変な対応をお願いします。

個人装備



学生ボランティア参加同意書

- 私は下記の5事項を理解し、自発的な意思に基づいて被災地支援ボランティア活動に参加します。
1. 所属学部の授業等々に支障がないことを確認した上で、ボランティア活動に参加します。
 2. 被災地での活動の危険性を十分理解したうえで、国士館大学 防災・救急救助総合研究所の活動目的・行動指針を共有し、その目標達成のために活動します。
 3. 災害伝言ダイヤルにて設定する電話番号を家族と共有し、家族と毎日連絡を取れる状態を維持します。
 4. 心身ともに良好な健康状態で、円滑なコミュニケーションがとれる状態で活動に参加します。
 5. 活動を通じて知り得た情報等の機密を保持し、ボランティア終了後に関わらず、それらの情報を他に提供しません。

署名用紙 記入した日の日付
2024 年 月 日

参加者住所 現住所

参加者連絡先 (携帯番号) 携帯番号

参加者学籍番号 学籍番号 参加者署名 名前 (直筆)

保護者の皆様の同意のお願い

被災地支援に係るボランティア活動において、さらなる天災による被害、ならびに活動中において起こり得る被害に対して、上記の者の保護者として、一切の補償を国士館大学 防災・救急救助総合研究所ならびに派遣先の組織等に求めることはありません。また、それらの危険性を了承したうえで、上記の者の参加に同意いたします。

2024年8月4日付日

保護者住所 保護者の現住所

保護者緊急連絡先 保護者の携帯番号

保護者氏名 保護者の名前 (直筆)

※本同意書は国士館大学防災・救急救助総合研究所にて管理し、当該活動以外の目的では使用いたしません。

皆がボランティアに行くまでに忘れずに やること

- ・参加同意書の記入と提出 (保護者の直筆が必要なので注意)
→提出方法はmanabaの個別指導で。原本は当日持参してください。
個別指導での提出期限は8月4日

- ・参加同意書がないと活動が出来ません。

- ・交通手段の確保
- ・個人装備の確保
- ・健康の維持、体調管理

ボランティアが終わった後には、

- ・報告レポートの作成
→被災地でのボランティア活動を通して、感じたこと、学んだことを記載して下さい。

- ・事後報告会への参加
→10月26日に防災・救急救助シンポジウムを企画しています。
学生さんにも発表をしていただく予定です。
場所は国士館大学世田谷キャンパス
詳しくはmanabaでまた情報を流す予定です。

人の役に立てるのが不安です、、、

- 誰もが初めてのことは不安です。でも大丈夫です！
 - 皆さんが出来るのは
 - 「謙虚な気持ちで一生懸命活動することです。」
 - それさえ出来れば、後は何も必要ありません。
 - 自信を持ってください。皆さんには仲間がいます。
-
- その上で、自分が出来ることを無理なく行いましょう。
 - 被災地、被災者に元気を届けることが大切です。

泥や瓦礫だけを見ずに、人を見る

この言葉を大切にしてください。

石川
マーク



ボランティア同意書（第1～3陣）

保護者の皆様に同意書ご署名のお願い

国土館大学防災・救急救助総合研究所は、1月1日に発生した能登半島地震による石川での災害に学生ボランティアを派遣することになりました。防災・救急救助総合研究所として派遣先の組織・地域とも連携して最善を尽くすことをお約束いたします。しかしながら、被災地では、二次被害の危険性も懸念されており、安全性を確約することはできません。そのことを踏まえ、被災地でのボランティアに参加希望の学生の方は、以下の同意書に保護者の方から許可と署名をいただくようお願い申し上げます。なお、参加者全員ボランティア保険には必ず加入していただきます。

2024年2月

国土館大学 防災・救急救助総合研究所

所長 島崎 修次

国土館大学 防災・救急救助総合研究所

所長 島崎 修次 殿

学生ボランティア参加同意書

私は下記の5事項を理解し、自発的な意思に基づいて被災地支援ボランティア活動に参加します。

1. 所属学部/部の通常授業等に支障がないことを確認した上で、ボランティア活動に参加します。
2. 被災地での活動の危険性を十分理解したうえで、国土館大学 防災・救急救助総合研究所の活動目的・行動指針を共有し、その目標追及のために活動します。
3. 災害伝言ダイヤルにて設定する電話番号を家族と共有し、家族と毎日連絡を取れる状態を維持します。
4. 心身ともに良好な健康状態で、円滑なコミュニケーションがとれる状態で活動に参加します。
5. 活動を通じて知り得た情報等の機密を保持し、ボランティア終了後に関わらず、それらの情報を他に提供しません。

署名用紙

2024年 月 日

参加する陣に✓を入れてください。

1陣: ☐ 2陣: ☐ 3陣: ☐

参加者住所

*3陣に参加する方は以下を選んでください。

チャーターバス: ☐ 七尾校に現地集合: ☐

参加者連絡先(携帯番号)

- -

参加者学籍番号

参加者署名

被災地支援に係るボランティア活動において、さらなる天災による被害、ならびに活動中において起こり得る被害に対して、上記の者の保護者として、一切の補償を国土館大学 防災・救急救助総合研究所ならびに派遣先の組織等に求めることはありません。また、それらの危険性を了承したうえで、上記の者の参加に同意いたします。

2024年 月 日

保護者住所

保護者緊急連絡先

- -

保護者署名

※本同意書は国土館大学防災・救急救助総合研究所にて管理し、当該活動以外の目的では使用いたしません。

※本用紙は、本人、保護者の署名が済んだら、まずは manaba の個別指導機能もしくは FAX を使って画像で送ってください。

ボランティア当日に原本を持ってきてください。

FAX 送り先: 042-401-8029 (国土館大学防災・救急救助総合研究所)

ボランティア同意書（第4陣）

保護者の皆様に同意書ご署名のお願い

国土館大学防災・救急救助総合研究所は、1月1日に発生した能登半島地震による石川での災害に学生ボランティアを派遣することになりました。防災・救急救助総合研究所として派遣先の組織・地域とも連携して最善を尽くすことをお約束いたします。しかしながら、被災地では、二次被害の危険性も懸念されており、安全性を確約することはできません。そのことを踏まえ、被災地でのボランティアに参加希望の学生の方は、以下の同意書に保護者の方から許可と署名をいただくようお願い申し上げます。なお、参加者全員ボランティア保険には必ず加入していただきます。

2024年7月

国土館大学 防災・救急救助総合研究所

所長 島崎 修次

国土館大学 防災・救急救助総合研究所

所長 島崎 修次 殿

学生ボランティア参加同意書

私は下記の5事項を理解し、自発的な意思に基づいて被災地支援ボランティア活動に参加します。

1. 所属学部通常授業等に支障がないことを確認した上で、ボランティア活動に参加します。
2. 被災地での活動の危険性を十分理解したうえで、国土館大学 防災・救急救助総合研究所の活動目的・行動指針を共有し、その目標追及のために活動します。
3. 災害伝言ダイヤルにて設定する電話番号を家族と共有し、家族と毎日連絡を取れる状態を維持します。
4. 心身ともに良好な健康状態で、円滑なコミュニケーションがとれる状態で活動に参加します。
5. 活動を通じて知り得た情報等の機密を保持し、ボランティア終了後に関わらず、それらの情報を他に提供しません。

署名用紙

2024年 月 日

参加者住所

参加者連絡先（携帯番号）

参加者学籍番号

参加者署名

被災地支援に係るボランティア活動において、さらなる天災による被害、ならびに活動中において起こり得る被害に対して、上記の者の保護者として、一切の補償を国土館大学 防災・救急救助総合研究所ならびに派遣先の組織等に求めることはありません。また、それらの危険性を了承したうえで、上記の者の参加に同意いたします。

2024年 月 日

保護者住所

保護者緊急連絡先

保護者署名

※本同意書は国土館大学防災・救急救助総合研究所にて管理し、当該活動以外の目的では使用いたしません。

※本用紙は、本人、保護者の署名が済んだら、まずはmanabaの個別指導機能を使って送ってください。

ボランティア当日に原本を持ってきてください。

国際医療福祉専門学校七尾校から国士舘大学への依頼内容

国士舘大学への依頼内容

1. 書籍整理 図書室
2. 書籍整理 書庫
- ③ 書籍整理 職員室
- ④ 下駄箱使用可能か、修復可能か
- ⑤ タイルの並べ直し 講堂横
- ⑥ タイルの並べ直し 玄関前
7. 体育館清掃
- ⑧ 飲料水タンクへの給水
- ⑨ シャワータンクへの給水
- ⑩ 生活用水タンクへの給水
- ⑪ 食堂棟側溝 清掃
- ⑫ 校舎内 清掃
- ⑬ 小丸山寮への通路整理、倒木移動
14. 仮設トイレの管理
15. シャワー使用者管理、説明
- ⑭ ⑮ 小島寮、共同スペース生活家電の移動（大手寮へ）
17. サロンの管理
- ⑯ ⑰ 昼食、毎食 30 合 炊飯、お味噌汁 40 人分炊事
- ⑱ 調理場清掃
- ⑳ 大手寮の片づけは必要？
- ㉑ 和倉地区、ゴミの集め、移動をお願いする可能性
22. 水道管の破れ、応急処置できる？

サロン 図書
15、17、18、19 2~3人

7、12、8 5人

1、8人

7、12、8 5人

17、18、19 ②

3、4、5、11、13

⑩

16、20

4、③、④

毎食 30 合

資料1

七尾市社会福祉協議会

ご担当者様

国際医療福祉専門学校七尾校の星野と申します。

令和6年能登半島地震によって、本校も被害を受けましたが、事業の継続をしております。

現在、すでに被災者の方向けのサロン活動を開始し、利用者の方が来始めている状態です。

周知活動等にご協力いただけますと幸いです。

また、七尾市の復旧・復興にご協力したく、学校施設の提供・貸し出しをさせていただければと考えています。

ボランティアの宿泊場所として本学の施設を提供することが可能です。

提供できる部屋：男性部屋（大部屋：本学食堂）

女性部屋（個室：1部屋2～3名宿泊可：4部屋）

*寝具等はありません。ヒーターはあります。

提供できる設備：入浴設備、水洗トイレ、洗濯機、駐車場

*駐車場以外は10時～15時はサロン利用者向けに開放しています。

その他の時間であれば、ボランティアさん向けに開放可能です。

駐車場はボランティアさん向けに校庭を提供できます。

備考：井戸を掘探し、水が出ました。現在水質検査中で2月頃には完了見込です。

利用開始時期：2024年2月～3月末

*学校の再開時期によって前後しますが、2023年度の授業は終了しています。

*開始時期は社協様とご相談させていただきます。

部屋の様子等は写真で添付いたします。

星野唯

男性部屋



水洗トイレ 2基
汲み取り業者への連絡済み



洗濯機 1台



シャワー 3基
継続的な水の支援・水汲み作業が必要



流し場 2 ヶ所



電子レンジ 1 台



女性部屋 4 室



ストーブなど



駐車スペース
30 台以上



活動用具スペース



水用タンク



物資保管場スペース



癒しサロン 軽食・軽作業スペース



体育館



健康ブース



運動ブース



電子黒板



出張サポート



国際医療専門学校七尾校 憩いサロン開設のお知らせ

資料2



場所：国際医療福祉専門学校 七尾校

期間：1月13日（土）～

時間 午前 10時～11時半
午後 13時半～15時

出来ること

- ・ お茶、お菓子でのんびり
- ・ 理学療法士による身体ほぐし体操
- ・ 体育館で思いっきり遊ぶ
- ・ 入浴
- ・ 水洗トイレ
- ・ 洗濯



遊び道具がいっぱいあるよ！



VII . 活動記録写真集

1 陣



集合写真



到着して専門学校の先生方に挨拶



体育館でテント生活



テント内部



夜は冷えるのでストーブも



図書館整理 1

1 陣



図書館整理 2



水汲み 1



水汲み 2



水汲み 3



水汲み 4



学校内整理

1 陣



タイル並び替え



タイル並び替え



タイル並び替え



タイル並び替え



学校内清掃



学校内清掃 2

1 陣



夜のミーティング



束の間の休息（誕生日のお祝い）



七尾市災害ボランティアセンターで受付



災害ごみの仮置き場 1



災害ごみの仮置き場 2



災害ごみの仮置き場

1 陣



夜のミーティング



O G の先輩からのお話



帰京前に専門学校校長先生からのお話



現地の学生と一緒に活動・交流も行いました

2 陣



集合写真



食堂に張ったテント



siensienwestさんと朝礼



現場には徒歩で向かいました



瓦礫の撤去



瓦礫の撤去 2

2 陣



瓦礫の撤去 3



瓦礫の撤去 4



液状化で堆積した土砂の撤去



液状化で堆積した土砂の撤去



ブロック塀の撤去



ブロック塀の撤去 2

2 陣



家財道具の撤去



専門学校の学生と一緒に活動をしました



途中で安全靴が壊れるトラブルも
ホームセンターに購入に行きました



終礼



水汲み



水汲み 2

2 陣



水汲み 3



七尾市災害ボランティアセンターで受付 1



七尾市災害ボランティアセンターで受付 2



災害ごみの仮置き場で朝礼



災害ごみの仮置き場 1



災害ごみの仮置き場 2

2 陣



災害ごみの仮置き場 3



七尾市災害ボランティアセンターへ挨拶



夜のミーティング



使った場所は清掃



専門学校の方へ挨拶して解散

3 陣



集合写真



貸切バスで現地入り



体育館でテント生活



siensienwest さんとの朝礼



siensienwest さんとの朝礼 2



クレープ屋さんの準備

3 陣



クレープ屋さんの準備 2



ニーズ調査（ローラー作戦）



家屋内の整理整頓



家屋内の整理整頓 2



家屋内の清掃



倉庫内の車の取り出し

3 陣



畳の運び出し



被災家屋からの運び出し



被災家屋からの運び出



現地専門学校の学生さんと協力して活動しました



被災家屋内の清掃



ブロック塀の撤去 1

3 陣



ブロック塀の撤去 2



活動しながら支援団体の方ともコミュニケーション



活動しながら支援団体の方ともコミュニケーション 2



活動しながら支援団体の方ともコミュニケーション 3



使わない家財の積み込み



使わない家財の積み込み 2

3 陣



終礼



専門学校内の片付けも継続



水汲み



専門学校から温かい差し入れをいただきました

4 陣



集合写真



OneDayFam (宿泊先)



宿でミーティング (自己紹介)



イベント準備



イベント準備 2



イベント準備 3

4 陣



イベント準備 4



イベント準備 5



イベント準備 6



イベント準備 7



イベント準備 8



イベント準備 9

4 陣



災害ごみの搬出



災害ごみの搬出 2



被災者の方との交流



家屋内の整理整頓



イベント（外の様子）



スーパースポーツボールすくい

4 陣



水でっぼう遊び



水遊び



流しそうめん



流しそうめん 2



イベント（中の様子）



輪投げ

4 陣



かき氷



かき氷 2



フライドポテト



厨房内部



射的 1



射的 2

4 陣



射的 3



参加賞はお菓子



ミーティング



集合写真 2

このたびの能登半島地震支援活動においては、多くの皆さまのご支援とご協力をいただき、無事に実施することができました。心より感謝申し上げます。

クラウドファンディングを通じていただいた温かいご支援は、私たちにとって大きな励みであり、支援活動を実現する原動力となりました。

今回の支援活動を支えてくださった支援者の皆さまのお名前を次ページに記載させていただきます（一部、匿名希望の方を除きます）。

【クラウドファンディング概要】

タイトル : 「実体験が成長に。被災地ボランティアを経て社会を支える人材を！」
実施主体 : 国土舘大学 防災・救急救助総合研究所
プラットフォーム : READYFOR
募集期間 : 2019年4月1日～5月31日
寄附総額 : 3,120,000 円
寄附者 : 129 名



**実体験が成長に。
被災地ボランティアを経て
社会を支える人材を！**

**クラウドファンディングに
挑戦しています。**

目標
金額 **240万円**

募集
期間 2019年4月1日(月)
～5月31日(金)

国土舘大学
防災・救急救助総合研究所

本学では、これまでも全国各地の災害に学生のボランティア派遣を行ってまいりました。この活動は、学生が社会に出た際に主体的に貢献意識を持てるための教育的観点と、被災地における支援需要の両方を満たす活動と考えています。

一方、限られた予算のため、一度の派遣で希望の学生全員を帯同することができない、また災害が多く発生した年には被災地へ派遣できないといったケースがございました。そのため予算を確保するためのプロジェクトです。

お問い合わせ先 国土舘大学 防災・救急救助総合研究所(担当:浅倉)
電話番号 042-339-7191 メール asakurad@kokushikan.ac.jp

検索は 国土舘大学 Readyfor



支援者一覧（敬称略）

青木和幸・千恵	城所勇太郎	中山恵里
亜厂暲好	木邑健太郎	成田泰崇
浅野誠一郎	久保田義衛	野澤英志
足立禮一	隈元テルミ	野村崇
有元典文	郡司菜津美	長谷川均
飯田昭夫	国土舘大学同窓会道央支部	畑勲
伊敷ひろみ	小濱修	福田さおり
一村弘幸	近藤知子	福本正幸
一文字寛光	斎藤弘子	藤原昌史
石部雄紀	坂井知志	古田仁志
井上拓訓	佐藤圭一	松永有夏
今福康夫	佐藤紀宏	三浦雅洋
入澤充	島崎修次	満岡周士
植田尚美	清水敏寛	水戸部真由美
内田鐵美	杉田道春	美納清美
江刺家亘彦	鈴木篤	都城治
海老澤太理	曾根悦子	村岡幸彦
大澤英雄	高垣晴夫	山浦祐介
大島有史	田久浩志	山川大介
大谷茂	多田幸子	山坂昌成
岡寄圭子	田中クララ	山崎登
岡田元子	田中秀治	山下友義
岡林中今	田中弘	山田慎吾
屋田敏弘	田部美樹	山根潤
小沢広和	近西輝明	横内基
小野田真弓	月ヶ瀬恭子	横沢民男
狩野平左衛門岳也	月野博之・真紀	吉川晃
上里昌輝	津野和宏	吉川吉衛
萱沼実	津波古憲	匿名希望の方々
川手桃	遠山一郎	
北村浩一	富田博文	
城所慶治	中川健	多くの方に
城所正美	中島徹	ご支援いただきましたことを、
城所奈奈江	中根雅夫	改めて心より御礼申し上げます。

本報告書をもって、今回の支援活動の成果を共有させていただきましたが、この経験を通じて得られた知見や学びを活かし、さらに社会に貢献できる活動を目指してまいります。

改めまして、心からの感謝を申し上げますとともに、今後とも温かいご支援とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

皆さまのご健康とご多幸をお祈り申し上げて、お礼の言葉とさせていただきます。

令和6年(2024年)能登半島地震支援活動報告書「縁」

2025年3月31日 発行

発行者 国土舘大学体育学部
国土舘大学防災・救急救助総合研究所
〒206-8515 東京都多摩市永山 7-3-1
電話 042(339)7191



Kokushikan